

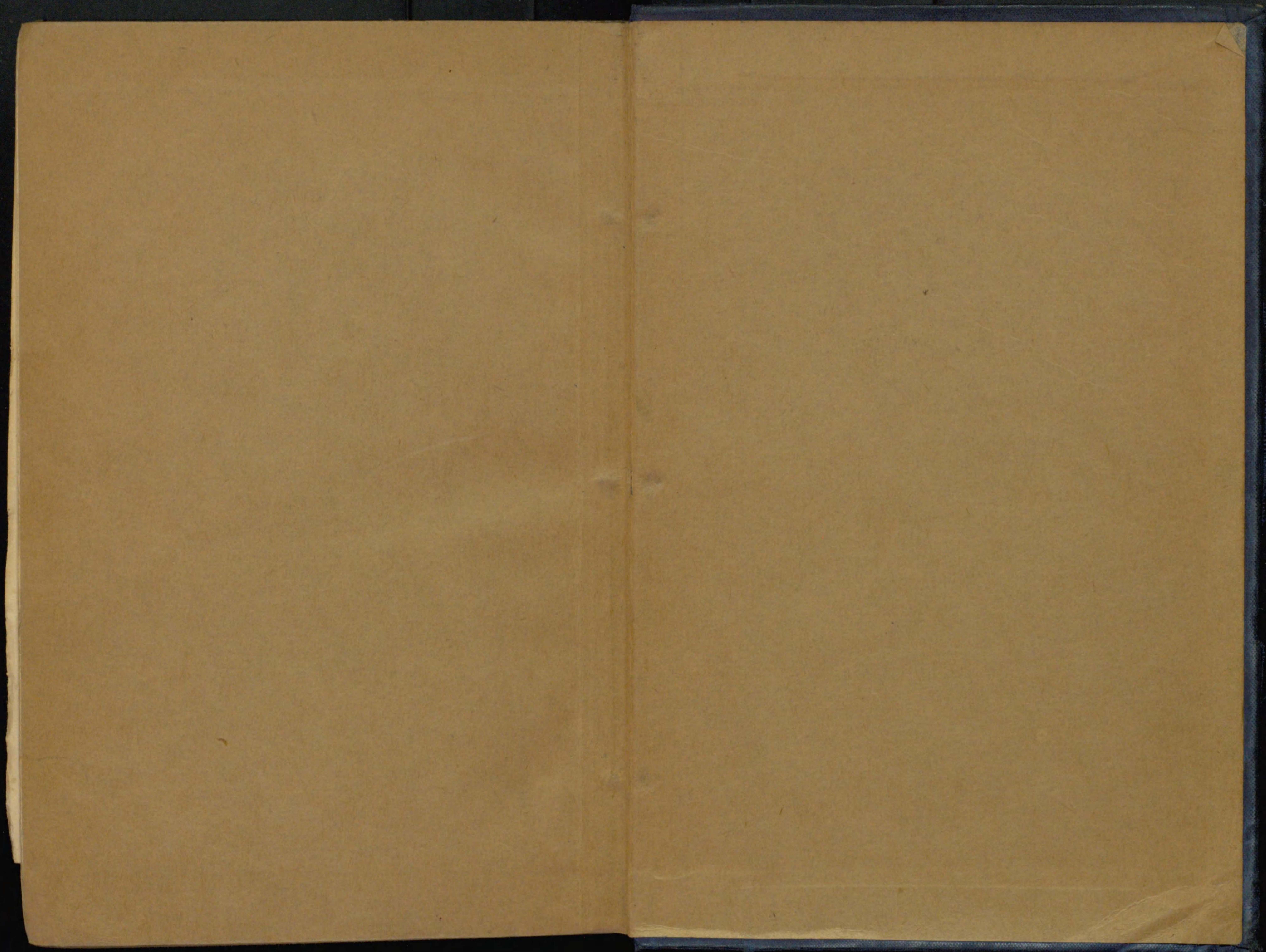
595-394



1200501527593

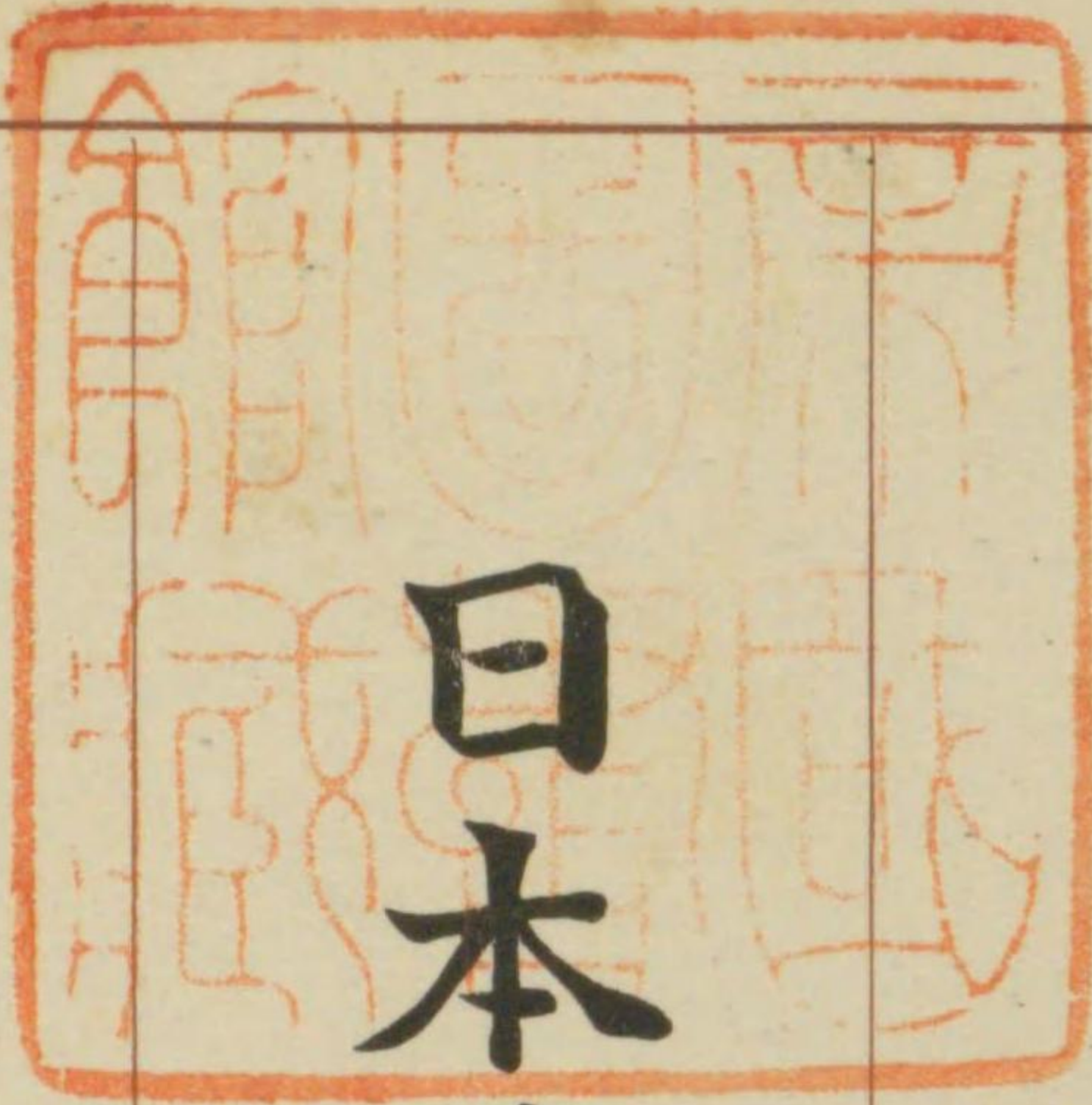
5
14





賴山陽先生百年記念

文學士 賴成一 著

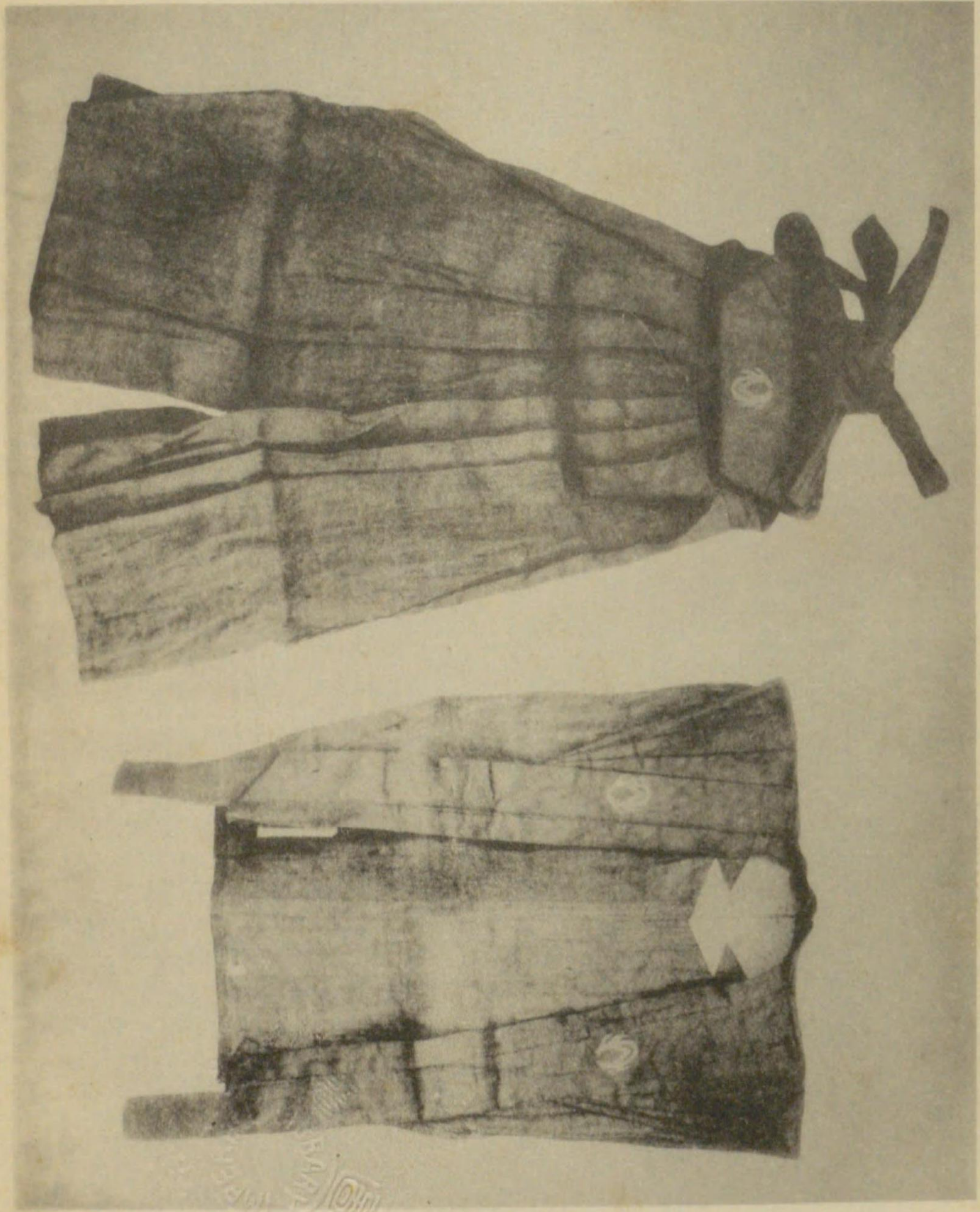


日本外史解義

卷下



東京 株式會社 弘道館 發兌



PHOTOGRAPHY
100
100

原圖は尾道市橋本家に傳はる天
下一品と稱せらるゝものなり。

山陽先生自寫に係り、最後に耶
馬溪圖卷記を自書せらる。元來

この圖卷記の文章は「乃自頼子
成始」の所にて終れるものなる

は弊家に残れる寫本によつて明
らかなり。「圖爲三舍公取去」以

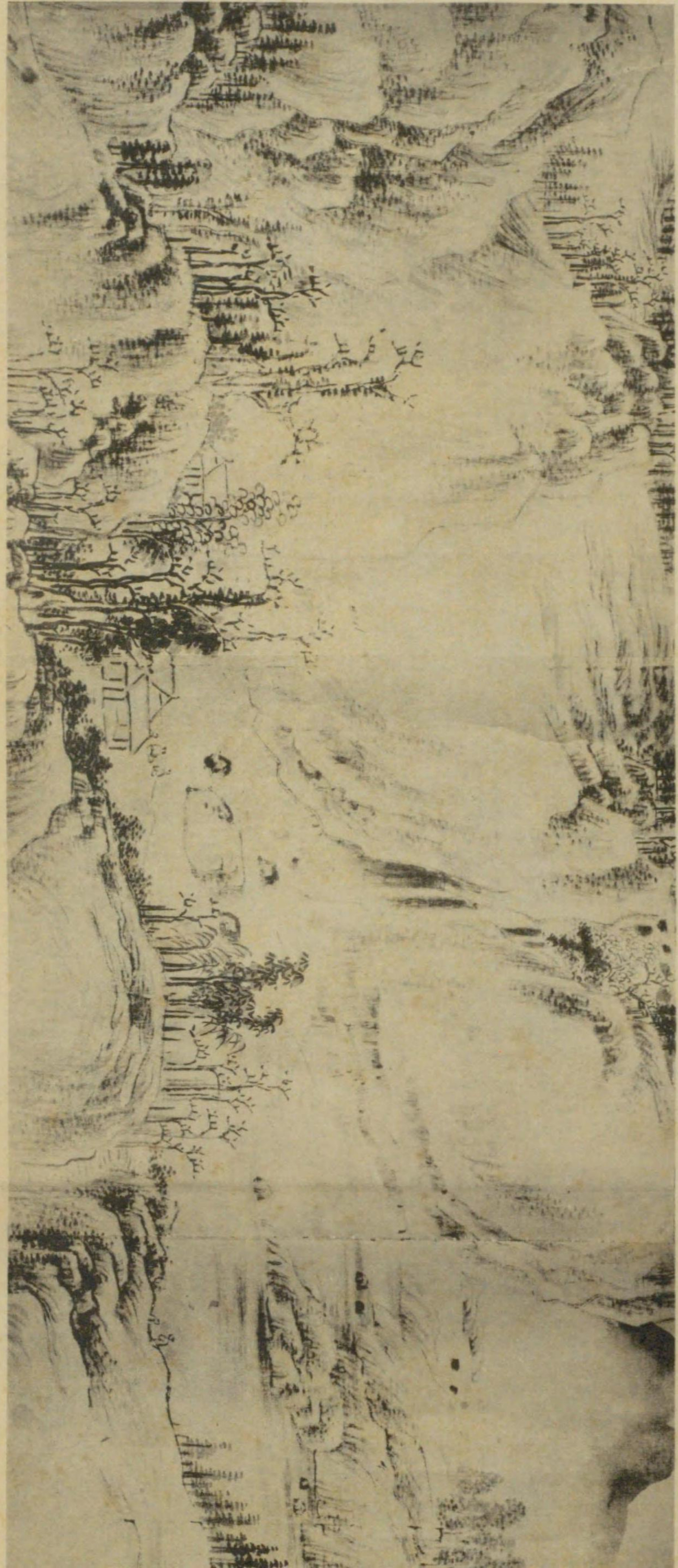
下は橋本氏に本圖を贈ら時、追
補せられたるものなり。

(山陽遺稿卷七)

595-394

この袴は山陽先生五歳の時、袴着の儀式に使用せし
ものにして、代々弊家の嫡男は之を用ひて儀式を行
ふ例となれるものなり。







この祥は山陽先生五歳の時、袴着の儀式に使用せし
ものにして、代々弊家の嫡男は之を用ひて儀式を行
ふ例となれるものなり。



595-394

日本外史解義 卷下

目次

卷十六 德川氏前記

豐臣氏中……………一頁

卷十七 德川氏前記

豐臣氏下……………一四七頁

卷十八 德川氏正記

德川氏一……………二七九頁

目次

一



卷十九 德川氏正記

德川氏二 三八三頁

卷二十 德川氏正記

德川氏三 四五九頁

卷二十一 德川氏正記

德川氏四 五八五頁

卷二十二 德川氏正記

德川氏五 七七九頁

諸家系圖

日本平氏家司源氏

九五五頁

日本外史解義卷下

目次終

附圖

安倍氏	楠氏	名和氏	新田氏	武田氏	吉川氏	豐臣氏	德川氏
清原氏	北畠氏	兒島氏	足利氏	上杉氏	小早川氏	織田氏	
北條氏	菊池氏	土居・得能氏	後北條氏	毛利氏			

日本外史解義 卷十六

安藝 頼山陽先生原著

玄孫

頼成一解義

徳川氏前記

豊臣氏中

秀吉之在關東也、遊於鎌倉、觀源頼朝、塑像進撫其背曰、若我友也。徒手取天下、唯
有吾與若而已。然若承藉名族、不_レ如吾起人奴也。吾欲遂略地至明、若以爲何如。

訓讀 秀吉の關東に在るや、鎌倉に遊び、源頼朝の塑像を觀、進んで其の背を撫して曰く、「若は我が友なり。
徒手にて天下を取りしは、唯だ吾と若と有るのみ。然れども若は名族に承藉す。吾が人奴より起れるに如かざる
なり。吾れ遂に地を略して明に至らんと欲す。若以て何如と爲す」と。

通釋 秀吉が關東に居つた時、鎌倉に遊び、源頼朝の土で作つた像を觀て、進んで其の背を撫で、曰ふには

「お前は吾が友である。素手で天下を取つたのは唯だお前と私とのみである。が併しお前は清和源氏の正統で名望ある家筋に生れてその後を承け續いたのだ。(からそこに名族といふ力強い助けになるものがあつた。)自分は左様ではなく、下僕から起つて天下を取つたのであるからお前は其の點で私に及ばない譯である。自分はいから進んで地を略し取り明に迄攻め行かうと思つてゐる。お前はそれを如何思ふかね」と。

在關東(北條氏を討つ) ○塑像(土で造つた像) ○承藉(昔シヨウシヤ、承は承け續ぐこと、藉はよる) ○承藉(昔シヨウシヤ、承は承け續ぐこと、藉はよる) 名族を承けつぎ其の勢にたよること。

初、秀吉爲織田氏、徇山陽、請攻韓及明。後常思成其志。明主嘗與足利氏修好。而韓兩屬。其間常奉朝貢於我。及足利氏衰、我西南海盜數侵明境。明韓皆與我絕。而海賈互市不絕。我對馬島、距韓甚邇。島主宗氏、世置吏于韓。釜山浦、至豐臣氏時、明民或有來投者。秀吉聞、明主朱翊鈞失政、武備不具、益思窺之。其定畿内、以橘康廣嘗諳韓事、擢爲使者、徵朝貢于韓。不得要領、而返。秀吉疑其與韓有私、族誅之。及定西海、宗義智送款焉。秀吉命掌使事、將伐關東、遂遣義智與僧玄蘇往韓。會琉球入貢。秀吉囑其國、求通於明。曰、明不聽我言、我當發兵伐之。琉球王尙寧告之。明不聽。義智至韓、韓王李昭乃使其大臣黃允吉、金誠一隨而入貢。

初め秀吉の織田氏の爲めに山陽を徇ふるや、韓及び明を攻めんことを請ふ。後常に其の志を成さんと思ふ。明主、嘗て足利氏と好を修む。而して韓其の間に兩屬し、常に朝貢を我に奉ず。足利氏の衰ふるに及び、我が西南の海盜、數、明境を侵す。明、韓、皆我と絶つ。而して海賈の互市は絶えず。我が對馬島は、韓を距ること甚だ邇し。島主宗氏、世吏を韓の釜山浦に置く。豐臣氏の時に至り、明の民或は來り投ずるものあり。秀吉、明主朱翊鈞、政を失ひ、武備具らずと聞き、益々之を窺はんことを思ふ。其の畿内を定むるや、橘康廣、嘗て韓の事を暗んずるを以て、擢んで使者となし、朝貢を韓に徵す。要領を得ずして返る。秀吉、其の韓と私ありと疑ひて、之を族誅す。西海を定むるに及び、宗義智、款を送る。秀吉、命じて使事を掌らしむ。將に關東を伐たんとするとき、遂に義智と僧玄蘇とを遣はして韓に往かしむ。會し琉球入貢す。秀吉其の國に囑し、明に通するを求めしめて曰く「明、我が言を聽かずんば、我れ當に兵を發して、之を伐つべし」と。琉球王尙寧、之を明に告ぐ。明、聽かず。義智、韓に至る。韓王李昭、乃ち其の大臣黃允吉・金誠一をして、隨つて入貢せしむ。

通釋 初め秀吉が織田氏の爲めに山陽道を攻めた時、韓及び明を攻めんことを信長にお願ひした。後いつてもその志を成し遂げようと思つてゐた。明の天子は前に足利氏と使聘を通じて交通してゐた。そして韓は日本と支那との間にあつて兩方に屬し、常に日本に入朝し貢物を持つて來てゐた。足利氏が衰へるやうになつて、我が日本の西南地方の海賊が度々明の海岸を侵した。そのやうな次第で明も韓も我が國と交通を絶つた。けれど船乗り商人の交易は止まなかつた。我が國の對馬は韓を去ること非常に近い。島主の宗氏は代々役人を韓の釜山浦に置いて居つた。豐臣氏の時となつて、明の民で我國に來り歸化する者があつた。秀吉は明主の朱翊鈞が政治を失くじり、軍備も不充分であると聞き、益々明を窺ひ攻めようと思つた。秀吉が畿内を平定した時に、橘康廣が以前韓の

ことをよく心得てゐたので、拔擢して使者となし、韓に對し、日本に貢物を持つて入朝するやうに催促した。併し要領を得ないで返つて來た。秀吉は康廣が韓と何か秘密の關係でもあるのではないかと疑つて、一族を全部誅殺した。秀吉が西海を平定した時に、宗義智が降服して來た。そこで秀吉は命じて朝鮮への使者の事を掌らしめた。秀吉が關東を征伐しようとした時、遂に義智と僧の玄蘇とをやつて韓に往かした。丁度その時、琉球が貢物を持つて來朝して來た。秀吉は琉球に頼んで明に交際を求めさせて曰ふには、「明が我が要求の言を承知しないならば、余は屹度、兵を繰り出して攻めてやるぞ」と。琉球王の尙寧は之を明に告げた。併し明は聞き入れなかつた。やがて義智は韓に行つた。そこで韓王の李昭は大臣の黃允吉・金誠一をして義智に付き従つて我國へ入貢せしめた。

詰釋 徇山陽(毛利氏討伐) ○足利氏(義滿、義教) ○朱翊鈞(明神)

秀吉既至自伐關東見韓使者乃命史作書以答之曰日本豐臣秀吉謹答朝鮮國王足下吾邦諸道久屬分離廢亂綱紀阻格帝命秀吉爲之憤激被堅執銳西討東伐以數年之間而定六十餘國秀吉鄙人也然當其在胎母夢日入懷占者曰日光所臨莫不透徹壯歲必耀武八表是故戰必勝攻必取今海内既治民富財足帝京之盛前古無比夫人之居世自古不滿百歲安能鬱鬱久在此乎吾欲假道貴國超

越山海直入于明使其四百州盡化我俗以施王政於億萬斯年是秀吉宿志也凡海外諸蕃後至者皆在所不釋貴國先修使幣帝甚嘉之秀吉入明之日其率士卒會軍營以爲我前導因遣平調信玄蘇與偕

訓釋 秀吉既に關東を伐ちてより至り、韓の使者を見る。乃ち史に命じて書を作らしめ、以て之に答ふ。曰く「日本の豊臣秀吉、謹んで朝鮮國王足下に答ふ。吾が邦の諸道、久しく分離に屬し、綱紀を廢亂し、帝命を阻格す。秀吉、之が爲めに憤激し、堅を被り銳を執り、西討東伐、數年の間を以て六十餘國を定む。秀吉は鄙人なり。然れども其の胎に在るに當り、母、日の懷に入ると夢む。占者曰く、日光の臨む所、透徹せざる莫し。壯歲必ず武を八表に耀さんと。是の故に、戦へば必ず勝ち、攻むれば必ず取る。今、海内既に治り、民富み財足る。帝京の盛なる、前古に比なし。夫れ人の世に居る、古より百歳に滿たず。安んぞ能く鬱鬱として久しく此に在らんや。吾れ道を貴國に假り、山海を超越し、直に明に入り、其の四百州をして、盡く我が俗に化せしめ、以て王政を億萬斯年に施さんと欲す。是れ秀吉の宿志なり。凡そ海外諸蕃の後れて至るものは、皆釋さる所に在り。貴國、先づ使幣を修む。帝甚だ之を嘉す。秀吉、明に入るの日、其れ士卒を率ゐて軍營に會し、以て我が爲めに前導せよ」と。因つて平調信、玄蘇を遣はし、與に偕にせしむ。

通釋 秀吉關東の北條氏を征伐して終つてから歸つて來て、韓からの使者に會つた。そこで書記に命じて書面を作らせて、韓王に答へて曰ふに「日本の豊臣秀吉は謹んで朝鮮國王足下にお答へする。吾が國の諸道は久しい

間バラ／＼に分かれて群雄諸方に割據してゐて、朝廷の詔を廢て亂し、天子の御命令を隔て拒んでゐた。秀吉は之が爲め激し憤り、堅固な甲を被り鋭い武器を執つて西を討ち東を伐ち、數年の間に日本六十餘國を平定して終つた。秀吉はもと鄙しい人間であつた。併し母の胎内に在つた時に、母が太陽が懷に入ると夢を見られた。占ひをする者がいふのに「日光が臨み照らす所は、どんな所でも其の光の差し込まぬ所はない。此の腹の子は三十代の血氣盛りに屹度武威を八方に耀かし示す事であらう」と。左様な譯で戰爭すれば必ず勝ち、攻めれば必ず取るのである。今天下既に治まり、人民は富み、財も充分である。天子の都の盛大なることは、これ迄に比へるものもない程である。一體人間が此の世の中に生きてゐるのは、昔から百年に足らないものである。その短い壽命であるのに、何うしていつまでも此の日本國內に爵としてゐられようか。自分は貴君の國の道を通して貰うて、山や海を越し、直ちに明國へ入り、支那四百州を全部我が日本の風俗に化せしめ、而して王者の御政治を億萬年も先き／＼まで施したいと思つてゐる。これが秀吉の年來の志である。凡そ海外に在る諸々の蕃夷で、後れて日本へ朝貢する者は、どこの國でも皆決して許しはしないのだ。貴國は最先きに使者を寄越し、禮物を持參した。天子様は大層お喜び遊ばされてゐる。この秀吉が明へ攻め込む時には、貴君は士卒を率ゐて我が軍營に集まり來り、我が爲めに道案内をなされへ」と。そこで平調信、僧方蘇を遣はし、韓の使者と一緒に朝鮮へ行かせた。

韓王得書疑懼。誠一以爲虛喝。王使之私饗二人、探其情實。調信曰：「我主欲通明。明不答禮。故欲伐之耳。貴國盍居間和解之。」誠一依違。玄蘇厲聲言曰：「今日之議、不得

首鼠兩端。不欲講和、乃欲戰耳。因辭訣返。韓始懼、稍修邊備。明亦聞之、申嚴海防。天正十九年夏、秀吉復遣義智責昭。在釜山旬餘、不得報。怒而返。秀吉志益決。

訓讀 韓王書を得て疑懼す。誠一以て虚喝と爲す。王之をして私に二人を饗し、其の情實を探らしむ。調信曰く「我が主、明に通せんと思ふ。明答禮せず。故に之を伐たんと欲するのみ。貴國盍ぞ間に居て之を和解せざる」と。誠一依違す。玄蘇聲を厲まして言つて曰く「今日の議、首鼠兩端するを得ず。講和を欲せずんば、乃ち戦はんと欲するのみ」と。因つて辭訣して返る。韓始めて懼れ、稍く邊備を修む。明も亦之を聞き、海防を申嚴す。天正十九年夏、秀吉復義智を遣はし昭を責めしむ。釜山に在ること旬餘にして報を得ず。怒つて返る。秀吉志益々決す。

通釋 韓王はこの手紙を見て疑ひ、懼れもした。誠一はから脅かしたと考へた。王は誠一に二人を非公式に饗應させて本當の事情を探らせた。調信が曰ふには「我が主人は明と交際せんとせられてゐる。然るに明が答禮をせぬ。それ故に討伐せんとされるのである。貴國は間に居り乍ら何うして兩國を和解させないのか」と。誠一は承知したやうなせぬやうな曖昧な態度であつた。玄蘇は聲を荒らげて曰ふには「今日の相談は、どつちつかずの日和見は許されぬ。講和せぬならば戰爭するのみだ」と。そして別れを告げて歸つて終つた。韓は始めて怖くなつて、ぼつ／＼國境の防備に手を付けた。明もその事を聞いて海岸の防禦をいよく嚴重にした。天正十九年夏、秀吉は再び義智を派遣して韓王李昭を責めさせ、証明の先棒になることを督促させた。所が釜山に十日餘りもあつたが何の返事もなかつた。そこで怒つて還つて來た。秀吉の朝鮮征伐の腹は益々決まつて終つた。

秀吉初無子。先是、姫人淺井氏生男鶴松。秀吉絶愛之。是歲鶴松夭。乃悲哀累月。心忽忽不樂。因屢出遊以自遣。一日、登清水寺閣。西望謂從者曰、「大丈夫、當用武萬里之外。何自悒鬱爲。」乃還。大會諸將帥。謂之曰、「吾藉諸君之力、平定海内。亦可以休矣。特諸醜夷有阻王化者。吾深羞之。吾欲以邦治委内府。而自將入朝鮮。以其兵爲先鋒。以入於明。彼拒我命。則擊滅之。遂自遼東直襲北京。奄有其國。多割土壤。以予諸君。使諸功臣皆厭其望。不亦快乎。我籌之已熟。事非甚難。諸君其能爲我出力耶。」諸將帥愕眙相視。莫敢對者。浮田秀家進曰、「殿下舉此無前之事。誰不努力者。」衆莫敢異議。内府謂秀次也。秀次時爲内大臣。敍正二位。

訓讀 秀吉初め子なし。是より先き、姫人淺井氏、男鶴松を生む。秀吉、絶た之を愛す。是の歳、鶴松、夭す。乃ち悲哀月を累ね、心忽忽として樂しまず。因つて屢出遊し、以て自ら遣る。一日、清水寺の閣に登り、西望して從者に謂つて曰く、「大丈夫、當に武を萬里の外に用ふべし。何ぞ自ら悒鬱するを爲さん」と。乃ち還り、大に諸將帥を會し、之に謂つて曰く、「吾れ諸君の力に藉り、海内を平定す。亦以て休すべし。特だ諸醜夷、王化を阻む者あり。吾れ深く之を羞づ。吾れ邦治を以て内府に委ね、而して自ら將として朝鮮に入り、其の兵を以て先

鋒と爲し、以て明に入らんと欲す。彼れ我が命を拒まば、則ち撃つて之を滅し、遂に遼東より直に北京を襲ひ、其の國を奄有し、多く土壤を割き以て諸君に予へ、諸功臣をして皆其の望に厭かしめん。亦快ならずや。我れ之を籌ること已に熟す。事甚だ難きに非ず。諸君其れ能く我が爲めに力を出すや」と。諸將帥、愕眙し、相視て敢て對ふる者莫し。浮田秀家進んで曰く、「殿下、此の無前の事を擧ぐ。誰か努力せざる者ぞ」と。衆敢て異議する莫し。内府とは、秀次を謂ふなり。秀次、時に内大臣と爲り、正二位に敍せらる。

通釋 秀吉には初め子がなかつた。これより先き妾の淺井氏が男子鶴松を生んだ。秀吉は非常にこの鶴松を愛した。所が此の年即ち天正十九年に鶴松が早や死した。そこで秀吉は悲しみ嘆き、數ヶ月に及んで、心がうとくして何事も手につかず、面白からず暮してゐた。そこで度々外出して遊び自ら憂を晴らしてゐた。或る日清水寺の閣に登り西の方を望み、供の者に向つて曰ふには「大丈夫たる者は武威を萬里の外に用ふ可きである。何うして自ら憚いで計りぬようや」と。そこで歸つて、大いに諸將帥を集め、之に謂つて曰ふには「余は諸君の力によつて天下を平定した。だから休息したつてよいのである。たゞ諸外國に我が日本の天子様の御政道を拒む者がある。余は左様な者のある事を非常に羞ぢるのである。余は日本國の政治を内大臣に委せて、自身大將となつて朝鮮に攻め込み、其處の兵を先鋒として明に攻め込もうと思ふのである。朝鮮が若し我が命令を拒んで受け入れなければ之を撃ち滅し、それから尙ほ進んで遼東から、直ちに北京を襲撃し、明國を掩ひ取り、其の土地を多く割いて諸君に與へ、多くの功臣をして饜腹、望みに飽かしめ度い。どうぢや、亦愉快ではないか。余は随分前から十分に胸算用してゐる。此の事は決して難かしい事ではないのだ。諸君どんなものぢや、能く余の爲めに力を出して働いて呉れるか」と。諸將帥は呆氣に取られ眼を見張り、互に見あつて誰れこそ、それにお對へしようとする

者もない。浮田秀家が進んで曰ふのに「殿下は此のこれ迄にない事をなされる。誰れが努力しない者ですか」と。多くの者も敢て異議を挟むものは一人もなかった。内大臣といふのは秀次のことである。秀次は其の時内大臣となり、正二位に敘せられてゐた。

浅井氏(茶々といひ、後) ○自遣(遣問、遣使) ○醜夷(外國を輕蔑) ○奄有(奄は覆ふことで、大に) ○秀次の甥

於是秀吉奏請遣諸將之國各具兵食命九鬼嘉隆造大艦數千艘大廳聞秀吉赴海外憂恐至廢寢食乃議使秀家代往而自出陣肥前以爲策應乃大築于那古耶建爲行營

訓讀 是に於て、秀吉、奏請し、諸將を遣はして國に之き各兵食を具へしめ、九鬼嘉隆に命じて、大艦數千艘を造らしむ。大廳、秀吉、海外に赴くと聞き、憂恐して寢食を廢するに至る。乃ち議して、秀家をして代り往かしめ、而して自ら出で、肥前に陣し、以て策應を爲す。乃ち大に那古耶に築き、建て、行營と爲す。

通釋 そこで秀吉は天子様にお願ひ申し、諸將を皆夫々の領國へ遣つて、武器食糧を準備させ、九鬼嘉隆に命じて大きな軍艦數千艘を造らしめた。大政所(秀吉の母)が秀吉が海外へ行くとき心配し恐れて夜の目も合はず、食は喉を通らぬといふ有様であつた。そこで相談をして秀家をして代り往かせることにし、自分を出で、肥前に陣取り、遙かに計略を通じ合ふことにした。そこで大に那古耶に城を築き、そこを假りの本陣とした。

十二月、分朝鮮地圖于諸將部署其所嚮分西南四道兵爲八軍以嚮韓之八道主

計頭加藤清正將第一軍攝津守小西行長將第二軍鍋島直茂相良頼定屬清正宗義智松浦鎮信有馬義純屬行長兩軍迭爲先鋒大友義統黑田長政將第三軍島津義弘毛利高政伊東祐丘將第四軍福嶋正則長曾我部元親將第五軍蜂須賀家政生駒親正將第六軍小早川隆景毛利秀包立花宗茂將第七軍毛利輝元將第八軍別置水軍以九鬼嘉隆脇坂安治加藤嘉明來島康親將之秀俊將藤堂高虎率大和軍屬焉水陸九軍總十五萬人織田秀信中川秀政石田三成増田長盛大谷吉隆糟谷武則片桐且元與淺野左京大夫將游軍六萬以備應援而秀吉自以秀俊及徳川公前田利家蒲生氏郷上杉景勝結城秀康最上義光佐竹義宣伊達政宗南部信直等畿内東北三道將士十萬自衛以明年三月盡會行營秀吉乃上書乞骸骨讓關白職于秀次自稱太閤於是宗義智戒釜山吏卒稍稍引返韓人來窺其府閔然無人乃驚懼修守備益急

訓讀 十二月、朝鮮の地圖を諸將に分ち、其の嚮ふ所を部署す。西南四道の兵を分ちて八軍と爲し、以て韓の

八道に屬はしむ。主計頭加藤清正第一軍に將たり。攝津守小西行長第二軍に將たり。鍋島直茂・相良頼定は清正に屬し、宗義智・松浦鎮信・有馬義純は行長に屬し、兩軍迭に先鋒と爲る。大友義統・黒田長政第三軍に將たり。島津義弘・毛利高政・伊東祐兵第四軍に將たり。福島正則・長曾我部元親第五軍に將たり。蜂須賀家政・生駒親正第六軍に將たり。小早川隆景・毛利秀包・立花宗茂第七軍に將たり。毛利輝元第八軍に將たり。別に水軍を置き、九鬼嘉隆・脇坂安治・加藤嘉明・來島康親を以て之に將とし、秀俊の將藤堂高虎、大和の軍を率ゐて屬す。水陸九軍總て十五萬人。織田秀信・中川秀政・石田三成・増田長盛・大谷吉隆・糟谷武則・片桐且元は、淺野左京大夫と游軍六萬に將とし、以て應援に備ふ。而して秀吉自ら秀俊及び徳川公・前田利家・蒲生氏郷・上杉景勝・結城秀康・最上義光・佐竹義宣・伊達政宗・南部信直等畿内東北三道の將士十萬を以て自ら衛る。明年三月を以て盡く行營に會せしむ。秀吉乃ち上書して骸骨を乞ひ、關白職を秀次に譲り、自ら太閤と稱す。是に於て、宗義智、釜山の吏卒を戒め、稍稍引き返らしむ。韓人來つて其の府を窺ふに、闕然として人無し。乃ち驚き惟し、守備を修むること益々急なり。

十二月、朝鮮の地圖を諸將に分けて、各の向ふべき所を手分けした。西南四道、山陰・南海(四國)・西海(九州)の兵を分けて八軍とし、それを韓の八道に向はせることにした。主計頭加藤清正は第一軍の將となつた。攝津守小西行長は第二軍の將である。鍋島直茂と相良頼定は清正の手につき、宗義智・松浦鎮信・有馬義純の三人は行長の配下となり。この兩軍は交互に先鋒となることとした。大友義統と黒田長政は第三軍の將、島津義弘・毛利高政・伊東祐兵は第四軍の將、福島正則・長曾我部元親は第五軍の將、蜂須賀家政・生駒親政は第六軍の將、小早川隆景・毛利秀包・立花宗茂は第七軍の將、毛利輝元は第八軍の將。別に水軍を置き、九鬼嘉隆・脇坂安治・加藤嘉明・來島康親の四人をその將とし、秀俊の部將たる藤堂高虎が大和の軍勢を率ゐてその手に屬した。水陸九軍全部で十五萬人である。織田秀信・中川秀政・石田三成・増田長盛・大谷吉隆・糟谷武則・片桐且元は淺野左京大夫と共に豫備隊六萬人の將となつて、必要の場合に備へることになつた。秀吉自身は、秀俊及び、徳川家康・前田利家・蒲生氏郷・上杉景勝・結城秀康・最上義光・佐竹義宣・伊達政宗・南部信直等、畿内と東北三道の將士十萬を率ゐて國內の警備に當ることになつた。翌年三月、全部名古屋の木營に集合させることにした。そこで秀吉は書面を差し出して辭職を願ひし、關白職を秀次に譲つて自ら太閤と呼んだ。こゝに於て宗義智は、釜山に置いた役人兵卒に注意を怠らぬやうにさせ、だんくとしてそれを引上げさせた。韓人が(へんに思ひ)やつて來て役所をのぞくとしんとして人氣が無かつた。そこで吃驚して怪み、益々嚴重に守備を固めることになつた。

明・來島康親の四人をその將とし、秀俊の部將たる藤堂高虎が大和の軍勢を率ゐてその手に屬した。水陸九軍全部で十五萬人である。織田秀信・中川秀政・石田三成・増田長盛・大谷吉隆・糟谷武則・片桐且元は淺野左京大夫と共に豫備隊六萬人の將となつて、必要の場合に備へることになつた。秀吉自身は、秀俊及び、徳川家康・前田利家・蒲生氏郷・上杉景勝・結城秀康・最上義光・佐竹義宣・伊達政宗・南部信直等、畿内と東北三道の將士十萬を率ゐて國內の警備に當ることになつた。翌年三月、全部名古屋の木營に集合させることにした。そこで秀吉は書面を差し出して辭職を願ひし、關白職を秀次に譲つて自ら太閤と呼んだ。こゝに於て宗義智は、釜山に置いた役人兵卒に注意を怠らぬやうにさせ、だんくとしてそれを引上げさせた。韓人が(へんに思ひ)やつて來て役所をのぞくとしんとして人氣が無かつた。そこで吃驚して怪み、益々嚴重に守備を固めることになつた。

語釋 西南四道(山陰、山陽、山前、南海) ○韓の八道(李成桂篡奪即位の時、國都を分つて道と爲す) ○太閤(唐制では三公を閣下と云ふ。大閤と云つたものだ。關白が辭任して其の子が又關白となる場合、前の關白を大閤と云つたのである。一體ならこれも宜下あつて後稱すべきであるが、こゝは自らとあるから、この宣下を持たなかつたものと見える。)

文祿元年正月、秀吉召加藤清正、賜之記幟曰「吾伐毛利氏時、先右府所賜也。召小西行長、賜之名馬曰「以驅突髯虜。清正素鄙行長、不相善。於是謂之曰「予用賜幟爲號子號、何用行長對曰「我起藥商、當用藥囊耳。自是益相隙也。二月二十八日、秀吉發京師、或曰「盡以善漢文者從。秀吉笑曰「吾此行、將使彼用我文耳。四月、至安藝、謁

嚴島祠、投百錢祝曰、吾而勝明、面者居多、乃投。皆面矣。衆大喜。蓋豫糊合兩錢也。遂至那古耶。諸軍會者、凡五十萬人、糧食稱之。

訓讀 文祿元年正月、秀吉、加藤清正を召し、之に記帳を賜ひて曰く「吾れ毛利氏を討ちし時、先右府の賜ひし所なり」と。小西行長を召し、之に名馬を賜ひて曰く「以て辱虜を驅突せよ」と。清正素より行長を鄙みて相善からず。是に於て之に謂つて曰く「予賜帳を用ひて號と爲す。子が號何を用ふる」と。行長對へて曰く「我は藥商より起る。當に藥囊を用ふべきのみ」と。是れより益々相隙す。二月二十八日、秀吉、京師を發す。或ひと曰く「蓋ぞ漢文を善くするものを以て從へざる」と。秀吉笑つて曰く「吾が此の行、將に彼をして我が文を用ひしめんとするのみ」と。四月、安藝に至り嚴島祠に謁し、百錢を投じて祝して曰く「吾にして明に勝たば、面する者多きに居れ」と。乃ち投ず。皆面す。衆、大に喜ぶ。蓋し豫め糊にて兩錢を合はせしなり。遂に那古耶に至る。諸軍の會する者、凡そ五十萬人、糧食、之に稱ふ。

通釋 文祿元年正月、秀吉は加藤清正を召して、紋所の入つてゐる所の帳を與へて曰ふには「余が毛利を伐つ時、先嚴様石大臣信長公から下さつたものである」と。又小西行長を召し、之に名馬を與へて曰ふには「頼ひげの毛唐共を追ひとばせ」と。清正はふだんから行長を卑しんで仲が善くなかつた。そこで行長に向つて曰ふには「俺は下され物の帳をしろに致す。貴公はどんなしをお使いになるか」と。行長が答へて曰ふには「俺は藥屋から身を起したのだ。藥囊でも使ふことに致さうわい」と。この後は益々相怨むやうになつた。二月二十八日、秀吉は京都を出發した。或る人が曰ふのに「何故漢文の達者な者を連れておいでになりませぬか」と。秀吉

が笑つて曰ふのに「今度の軍は、彼れに吾が國のいろはを使はせようとするのである」と。四月、安藝に至り、嚴島神社にお参りし、百錢を投げて、祈つて曰ふのに「私が明に勝つことが出来まますなら面を向く方が多くありますやうに」と。そこで投げて見た所皆面を向いた。多勢の者は大喜びであつた。思ふに前以て糊で一枚の錢に粘り合はせ、どちらを向いても表面が向くやうに仕組んであつたのである。それから進んで那古耶に着いた。諸軍の集まる者凡そ五十萬人からあり、兵糧も之に稱ふだけあつた。

語釋 文祿(後陽成天皇) ○文(文字のこと。文字のことは書とか、名とか、軍に文とか、字とか) 文字など、色々に稱せられる。一つは時世によつて違ふのである)

於是先遣水陸九軍、發大礮、開而揚帆、蔽海而渡。至于風本、阻風十日。風稍定。行長與義智素諳海路、潛拔其軍、不告衆先發。至豐崎、平明、諸將乃覺之。清正怒而發。風益甚、不得進。行長促舵師發豐崎、冒濤而進。十三日、達于釜山。釜山守將鄭撥出獵。聞警馳返。行長隨攻其城、立拔之。生擒鄭撥。遂分兵徇慶尙道。陷西生、多大、二浦、斬多大守將尹興信。問其捕虜以要害城寨。曰「東北有東萊。距此三十里。行長謂其衆曰「諸君戰疲、當休。然使東萊爲備、吾力不能下。而諸將隨至、則奪功於人矣。宜急擊取之。」衆奮從之。乃進攻東萊。半日拔之。斬首千餘級。守將宋象賢不屈死。行長收

葬之進陷梁山至鵠院韓兵據險拒之我兵攀山廻出其背韓兵顧而潰韓巡察使金晬聞東萊急自晉州來援不及乃諭諸郡縣避我兵

訓諭 是に於て先づ水陸九軍を遣り、大礮を發し開して帆を揚げ、海を蔽ひて渡る。風本に至り、風に阻らるること十日。風稍々定まる。行長、義智と素より海路を諳んず。潛に其の軍を抜き、衆に告げずして先發し豊崎に至る。平明、諸將乃ち之を覺る。清正怒つて發す。風益々甚しくして進むを得ず。行長舵師を促して豊崎を發し、濤を冒して進む。十三日釜山に達す。釜山の守將鄭撥出獵し、警を聞いて馳せ返る。行長隨つて其の城を攻め、立ちどころに之を抜きて鄭撥を生擒す。遂に兵を分ちて慶尙道を徇し西生・多大の二浦を陥れて、多大の守將尹興信を斬る。其の捕虜に問ふに要害の城寨を以てす。曰く「東北に東萊有り。此を距る三十里」と。行長其の衆に謂つて曰く「諸君戰ひ疲る。當に休ふべし。然れども東萊をして備を爲さしめば、吾が力下す能はず。而して諸將隨つて至らば、則ち功を人に奪はれん。宜しく急に擊つて之を取るべし」と。衆奮つて之に従ふ。乃ち進んで東萊を攻め、半日にして之を抜く。斬首千餘級。守將宋象賢、屈せずして死す。行長收めて之を葬り、進んで梁山を陥れ、鵠院に至る。韓兵險に據りて之を拒ぐ。我が兵山を攀ち、廻りて其の背に出づ。韓兵顧みて潰ゆ。韓の巡察使金晬、東萊の急を聞き、晉州より來り援く。及ばず。乃ち諸郡縣に諭して我が兵を避けしむ。

通釋 そこで先づ海陸九軍を出發させることになり、大砲を放ち(出陣の式、勢をつける)開の聲を揚げ船に帆を張り、海を蔽うて出發した。風本に着いてから風の爲めに十日間妨げられた。漸く風が鎮まつた。行長と義智は元より海路をよく心得てゐる。こつそり自分の軍だけを引き抜いて誰にも言はずに抜けがけして豊崎に着いた。しらなく明ける頃に諸將は漸く氣がついた。清正は怒つて出發した。風が次第に激しくなつて進むことができなかった。行長は舵手をせきたて、豊崎を出發し、大波を凌いで進んだ。十三日に釜山に到着した。釜山の守將鄭撥は獵に出てゐたが、知らせを聞いて馳せ戻つた。行長はその後から城を攻めつけ、忽ちに陥れ鄭撥を生捕した。それから兵を分けて慶尙道へ巡り降りし西生と多大の二つの浦を陥れて多大の守將尹興信を斬つた。その捕虜に肝心要害な城寨を訊ねた。曰ふには「東北に東萊といふ所があります。こゝから三十里です」と。行長は部下に向つて曰ふには「諸君は戰で疲れてゐる。本當なら休息すべき所だ。併し東萊にすつかり防備を固めさせたらこの軍勢の力では降すことは出来ない。又その中に諸將がやつて來たら、人に手柄を奪はれて終ふ。だからこれから直ぐ様討ち取るのが宜いと思ふ」と。一同は勇氣を奮つて之に従つた。そこで進んで東萊を攻め半日で陥れた。斬首千餘級であつた。守將の宋象賢は屈服しないで討ち死した。行長はその死骸を收容し埋葬してやり、それから進んで梁山を陥れ、鵠院に至つた。韓兵は險阻な地に據つて拒いだ。我が兵は山をよち登りぐるりとその後方に廻つた。韓兵は後に知られて潰滅して終つた。韓の巡察使の金晬は東萊の危急を聞いて晉州から援けに來た。併し間に合はなかつた。そこで諸郡縣にふれを廻して我が兵の危険から避けるやうにと命じた。

風本(豐崎) ○西生・多大・東萊・梁山鵠院・晉州(慶尙道)

清正後行長三日至釜山聞行長已前進切齒曰悔爲豎子所先吾豈踐其迹乎乃轉取別路縱火慶州走其守將斬首千五百級轉鬪而進所向皆靡秀家聞行長深

入。謂其將佐曰。彼自我家起身。吾爭功而不援。使彼死於敵。不獨負太閤寄任之意也。乃踰次發舟。八軍相繼上陸。韓諸道競報警於國都。韓王命李鎰申砮爲大將。使金誠一距慶尙右道。金功距慶尙左道。

訓讀 清正、行長に後るること三日にして釜山に至る。行長已に前進すと聞き、切齒して曰く「悔ゆるくは豈子の先んずる所と爲る。吾れ豈に其の迹を踐まんや」と。乃ち轉じて別路を取り、火を慶州に縱つて其の守將を走らす。斬首千五百級。轉闘して進む。向ふ所皆靡く。秀家、行長の深く入るを聞き、其の將佐に謂つて曰く「彼れ我が家より身を起す。吾れ功を争うて援けず、彼をして敵に死せしめば、獨り太閤寄任の意に負くのみならざるなり」と。乃ち次を踰えて舟を發す。八軍相繼いで陸に上る。韓の諸道競うて、警を國都に報ず。韓王、李鎰・申砮に命じて大將と爲し、金誠一をして慶尙の右道を距ぎ、金功をして慶尙の左道を距がしむ。

通釋 清正は行長より三日遅れて釜山に着いた。行長が早くも前進したと聞いて齒を喰ひしはつて残念がつて曰ふには「失敗つた、野郎に出し抜かれたか。奴の跡なんかついてゆくものか」と。そこで方面を變へて別の道を進み、慶州に火をつけて、その守將を追ひ拂つた。斬首千五百級。それから、あちこちと戦ひつゝ進んだ。向ふ所皆閉口して開きなびいた。秀家は行長が深入りするのを聞いて部將參謀達に向つて曰ふには「彼は余が身内から身を起した者だ。もし余が功名を彼と争つて援の手を出さず、敵中に死なせる様なことになったら、太閤が余に任せられた重任の心に背馳する許りでなく、個人としても薄情な人間になるだらう」と。そこで順序を飛ば

して船を繰り出した。八軍が續々上陸をした。韓の諸道は我れ勝ちに國都京城に警報した。韓王は李鎰と申砮とを大將に命じ、金誠一に慶尙の右道を、金功に慶尙の左道を夫々を距がせた。

語釋 慶州(慶尙)

行長方圍金海。黑田長政援至。刈禾塹塹以陷之。引兵出左右道之間。絕其應援。進陷尙州。鎰已至州城。北觀城中火起。遣騎來候。行長望視之曰。我且奪其膽。潛使銃卒伏橋下。銃之墮馬。鎰軍動。行長以大眾出張。二奇兵劫之。鎰駭走。歸申砮於忠州。砮收忠清道兵八千。欲守鳥嶺。聞尙州陷。不敢進。行長進至鳥嶺。視其險阨。使輕卒先行。周踐山谷。無敵。笑曰。朝鮮兵不要我于此。吾知其莫能爲也。乃踰嶺至丹月驛。分兵爲二。擊申砮于彈琴臺。下斬之。遂取忠州。而與清正會。

訓讀 行長方に金海を圍む。黒田長政の援至る。禾を刈り塹を填めて以て之を陥れ、兵を引いて左右道の間に出で、其の應援を絶ち、進んで尙州を陥る。鎰、已に州城の北に至り、城中、火起るを觀、騎を遣はして來り候ふ。行長之を望み視て曰く「我れ且に其の膽を奪はんとす」と。潛に銃卒をして橋下に伏し、之を銃して馬より墮さしむ。鎰の軍動く。行長、大眾を以て出で、二奇兵を張りて之を劫す。鎰、駭き走り、申砮に忠州に歸す。砮、忠清道の兵八千を收め、鳥嶺を守らんと欲す。尙州陥ると聞き敢て進まず。行長進んで鳥嶺に至り、其

の險阨を視、輕卒をして先行し、周く山谷を踐ましむ。敵無し。笑つて曰く「朝鮮の兵我を此に要せず。吾れ其の能く爲す莫きを知るなり」と。乃ち嶺を踰えて丹月驛に至り、兵を分ちて二と爲し、申砦を彈琴臺下に擊つて之を斬り、遂に忠州を取りて清正と會す。

通釋 行長が丁度金海城を包圍してゐた。黒田長政の援兵が來た。稻を刈り、それで堀を埋めてこの城を陥れ、それから兵を引き連れて慶尙の左道と右道の間に、敵の援軍の連絡を斷ち、進んで尙州城を陥れた。李鎰はその時州城の北邊までやつて來たが、城中に火の起るのを見たので、騎兵をやつて偵察させた。行長はそれを遠くから見つけて曰ふには「一つ奴の膽玉を潰してやらう」と。ひそかに銃兵を橋の下に隠し、この斥候兵を打つて馬から落させた。鎰の軍はそれを見て動搖した。そこを行長は大勢で打つて出で、二箇所に不意討の兵を設けて威かした。鎰は驚いて逃げ出し、忠州に行つて申砦と合した。砦は忠清道の兵八千を軍勢に加へて鳥嶺を守らうと思つた。併し尙州が陥つたと聞いて思ひ切つて進まなかつた。行長は進んで鳥嶺に至り、その險阻な要害を見て、身輕な兵卒をして先に行かせ、山や谷を殘らず偵察させた。併し敵は一人も居なかつた。彼は笑つて曰ふには「朝鮮の兵は、こんな善い場所では我が軍を待ち受けない。して見ると朝鮮の兵もよくよくやくざなところが分る」と。そこで峠を越えて丹月驛に至り、兵を二手に分けて申砦を彈琴臺のほとりに擊つて之を斬り、それから遂に忠州城を攻め取つて清正と會つた。

譯釋 金海・尙州・鳥嶺(慶尙) ○忠州・丹月驛・彈琴臺(忠清)

諸將皆至。乃相見于城外、議進取其京畿。清正曰「攝津守多功矣。至攻國都、先鋒當

見屬僕也。行長曰「吾與子並受約束。子何擅更之。對曰「子之不告而發亦出約束乎。二人忿欲鬪。諸將解之曰「大敵在前。何私鬪爲。鍋島直茂曰「太閤令二公迭爲先鋒。今盍分道往。聞道有二。自南者遠。自東者近。近者有漢江之險。唯二公所擇。清正曰「吾寧取險而近者矣。議乃定。行長間使人先馳之漢江、奪其南岸、舟清正遂發。遇韓使李應舜于途、捕之。初行長獲蔚山守將李彥誠、送書韓王、招降之。使彥誠齎去。彥誠不敢白。及取尙州、乃獲應舜、予之太閤券書、使還責彥誠之報。且召李德馨、德馨嘗接我使人者也。韓王乃遣德馨乞降。途聞忠州陷、使應舜先往、誦之。乃爲清正所捕、遂誅之也。德馨走去。

訓讀 諸將皆至る。乃ち城外に相見、進んで其の京畿を取るを議す。清正曰く「攝津守功多し。國都を攻むるに至つては、先鋒は當に僕に屬せらるべきなり」と。行長曰く「吾れ子と並に約束を受く。子何ぞ擅に之を更ふ」と。對へて曰く「子の告げずして發するは、亦約束に出づるか」と。二人忿り鬪はんと欲す。諸將之を解いて曰く「大敵前にあり。何ぞ私鬪を爲す」と。鍋島直茂曰く「太閤、二公をして迭に先鋒と爲らしむ。今盍ぞ道を分ちて往かざる。聞く、道二あり。南よりする者遠く、東よりする者近し。近き者漢江の險ありと。唯だ二公

の撰ぶ所」と。清正曰く「吾れ寧ろ險にして近きものを取らん」と。議乃ち定まる。行長間に人をして先づ馳せて漢江に之き、其の南岸の船を奪はしむ。清正遂に發す。韓の使李應舜に途に遇ひて之を捕ふ。初め行長蔚山の守將李彦誠を獲、書を韓王に送り、之を招降せんとして、彦誠をして齎し去らしむ。彦誠敢て白さず。尙州を取らに及び、乃ち應舜を獲、之に太閤の券書を予へ、還つて彦誠の報を責めしめ、且つ李德馨を召す。德馨は嘗て我が使人に接せし者なり。韓王乃ち德馨を遣はして降を乞はしむ。途に忠州陥ると聞き、應舜をして先づ往いて之を誦はしむ。乃ち清正の捕ふる所と爲る。遂に之を誅す。德馨走り去る。

通釋 諸將が皆到着した。そこで忠州城外で相談をし、進んで京畿道を攻め取ることになった。清正が曰ふには「攝津守(行長)は澤山な手柄を立てた。國都を攻めるのに、その先鋒は是非共私に任して貰ひ度い」と。行長が曰ふには「私は貴公と同じやうに命令を受けた。貴公は何で勝手にそれを變へようといふのだ」と。清正は答へて曰ふに「貴公が皆に黙つて出掛けて終つたのはやはり命令に由るのか」と。二人は腹を立て勝負をしようとした。諸將はそれをなだめて曰ふのに「大敵が眼前に居る。何で私の喧嘩などするののか」と。鍋島直茂が曰ふには「太閤殿下はお二人に交互に先鋒になるやう言はれたのだ。今違つた道を進んだなら好いではないか。聞く所によると道は二つあるといふことだ。南から行く方は遠く、東から行くものは近い。併し近い方には途中に漢江の難所が有るさうである。どちらでもお二人の好きな方を選んで宜いでせう」と。清正が曰ふには「俺はいつそ難儀でも近い方を選ぶ」と。そこで相談が纏つた。行長はひそかに人を漢江に急行させて、その南岸の舟を奪ひ取らせた。清正はいよいよ出發した。途中で韓の使李應舜といふ者を捕へた。最初行長は蔚山の守將李彦誠を捕へたので、書面を韓王に送つて、降参をすゝめて見ようと思ひ、彦誠にその書面を持つて行かせた。所

が彦誠は敢てそれを申し上げなかつた。後尙州を占領した時應舜といふものを捕へ、之に太閤の朱印のある書面を與へて、返つて彦誠の報告を求めさせ、又同時に李德馨といふ者を呼びよせた。德馨は前に日本の使者に應接してゐた者であつた。韓王は遂にその德馨を遣はして降参を乞はせた。德馨は途中で忠州が陥つたと聞いて應舜をして先づ行つてその様子を見させた。斯くして清正に捕へられたのである。清正は遂にそれを誅した、德馨は逃げ去つた。

漢江(道) ○蔚山(道) ○責彦誠之報(彦誠に持たせて歸した手紙の返事を要求したのである)

韓已聞李鎰敗大怖而猶屬望申砮。每日有騎馳入都門。民迎問對曰申總兵死矣。關白軍將來矣。都城大擾。王與世子夜駕奔平壤。告急於明。遣王子徵兵諸道。留都元帥金命元副元帥申恪以舟師扼漢江。命元聞清正至。措疑兵遁。清正抵江。無舟可渡。立望北岸。久之笑曰敵舟有鳧。是無兵也。令善泅者往取其舟。以渡。五月四日。至都城。南大門有兵守門。視其旗幟皆小西氏號也。蓋行長渡驪川。走敵將元豪。先一日自東大門入。王已遁矣。清正益怒。

訓 韓已に李鎰の敗を聞き大に怖れ、而して猶ほ望を申砮に屬す。毎日騎有り、馳せて都門に入る。民迎へ問ふ。對へて曰く「申總兵死せり。關白の軍將に來らんとす」と。都城大に擾る。王、世子と夜駕して平壤に奔

り、急を明に告ぐ。王子を遣はして兵を諸道に徴さしむ。都元帥金命元・副元帥申恪を留め、舟師を以て漢江を扼せしむ。命元・清正至ると聞き、疑兵を措いて遁る。清正江に抵る。舟の渡るべき無し。立つて北岸を望む。と之を久しうして笑つて曰く「敵舟に幾有り。是れ兵無きなり」と。善く涸ぐ者をして、往いて其の舟を取らしめて以て渡る。五月四日都城の南大門に至る。兵有り門を守る。其の旗幟を視るに、皆小西氏の號なり。蓋し行長、驪川を渡り、敵將元蒙を走らせ、先だつこと一日東大門より入る。王已に遁れたり。清正益々怒る。

通釋 韓は早くも李鎰の敗を聞いて大に恐れたが、まだ申位に望をつないであつた。晦日に騎兵が城門を馳せ入つた。人民が迎へて戦況を尋ねた。答へて曰ふには「申指揮官は討ち死した。關白の軍が追付け来るのであらう」と。都中大變な騒ぎになつた。王と世子とは夜、駕に乗つて平壤に逃げ、明に危急を知らせた。一方王子を遣つて諸道に於て兵を募らせた。王は都元帥の金命元と副元帥の申恪とを留めて舟軍で漢江を固めておかせた。命元は清正が來たと聞いて疑兵を配置して逃げて終つた。清正は川邊まで來て見た。渡るべき舟がない。立つたまま、やゝ暫し北岸を物色してゐたが、やがて笑つて曰ふには「敵の舟に鴨がある。つまり軍隊がないからだ」と。泳ぎの達者な者に向岸まで行つて其の舟をとつて來させて渡つた。五月四日、都城の南大門まで來た。その門を兵士が守つてゐた。その旗指物を見ると、皆小西氏の紋章であつた。思ふに行長は驪川を渡つて敵將元蒙を驅逐し、清正より一日前に東大門から入城したのである。王はとうに逃げて終つてゐた。清正は益々腹を立てた。

平壤(平安) ○都城(京城は支那式に都の周圍に城壁があつて、それに東) ○疑兵(敵をまどはす爲めに設ける) ○驪川(京畿)

居十餘日、諸將皆至。秀家自居國都、使諸將各圖進取。金命元退守臨津、呼申恪、恪

不從、獨屯楊州。命元怒、恪違節度、請王誅之。會咸鏡南道兵使李憚來援、恪與浮田氏兵戰、大破之。而命元遂斬恪。王聞捷、遽赦之。不及、乃遣申砮及韓應寅助命元守津北。我兩先鋒與長政合兵、軍津南相持十餘日。伏精兵而伴卻。砮欲追之。其裨將劉克良止之。不聽而渡。應寅亦濟。遇伏驚走。三將還擊、大破之。擒砮及克良。其兵死傷若溺者萬餘人。命元應寅走歸平壤。我軍乃濟。至安城驛、乃探圖定軍所向。行長得平安道、清正得咸鏡道、而長政得黃海道。皆引兵北入。而韓將李洸、尹國馨、金晬、以全羅、忠清、慶尙三道兵五萬騎入援王城。至龍仁。見我兵壘山上挑戰。我兵不出。已而瞰其懈、出擊、大破之。

訓讀 居ること十餘日、諸將皆至る。秀家自ら國都に居り、諸將をして各進取を圖らしむ。金命元退いて臨津を守り、申恪を呼ぶ。恪從はず、獨り楊州に屯す。命元、恪の節度に違ふを怒り、王に之を誅せんと請ふ。會咸鏡南道の兵使李憚、來りて恪を援く。浮田氏の兵と戦ひて大に之を破る。而して命元遂に恪を斬る。王、捷を聞いて遽に之を赦す。及ばず。乃ち申砮及び韓應寅を遣はし、命元を助けて津北を守らしむ。我が兩先鋒、長政と兵を合せて津南に軍し、相持すること十餘日。精兵を伏せて伴り卻く。砮、之を追はんと欲す。其の裨將劉

克良之を止む。聽かずして渡る。應寅も亦濟る。伏に遇ひて驚き走る。三將還り撃つて大に之を破り碇及び克良を擒にす。其の兵の死傷し若しくは溺る、者萬餘人。命元、應寅、走つて平壤に歸る。我が軍乃ち濟り、安城驛に至り、乃ち圖を探りて軍の向ふ所を定む。行長は平安道を得、清正は咸鏡道を得、而して長政は黃海道を得たり。皆兵を引いて北に入る。而して韓將李洸、尹國馨、金暉、全羅、忠清、慶尙三道の兵五萬騎を以て、入りて王城を援けんとし、龍仁に至る。我が兵の山上に壘するを見て、戰を挑む。我が兵出です。已にして其の懈るを敵ひ、出で撃つて大に之を破る。

それから十餘日經つと諸將が皆到着した。秀家は自ら京城に陣を置き、諸將に銘々進軍占領を圖らせた。命元は退いて臨津を固め、申恪を呼んだ。恪はその命令に従はずに一人楊州に兵を駐めてゐた。命元は恪が規律に違ふのを怒つて王に彼を誅せんことを請うた。丁度その時咸鏡南道の兵使李暉が恪を援けに來たので兵を合せて浮田氏の軍と戦ひ大に之を破つた。而して命元は遂に恪を斬つた。王は捷報を聞いて急に赦免の命を發した。間に合はなかつた。そこで申恪と韓應寅をやつて、命元を助けて臨津の北を守らせた。我が兩先鋒加藤・小西は、長政と兵を合せて臨津の南に陣取り、對陣すること十餘日に及んだ。我が軍では精兵を隠して退却して見せた。碇は追ひかけようとした。その副將の劉克良がそれを止めた。きかないで渡つた。應寅の軍も渡つた。伏兵にぶつかつて驚いて逃げた。加藤・小西・淺野の三將は引き返して攻め大に破つて碇と克良とを生捕した。敵兵で死傷したり、溺れた者は萬餘人に達した。命元と應寅とは平壤に逃げ返つた。そこで我が軍は全部渡り、安城驛まで行つて、くじを引いて軍の向ふ方向を定めた。行長は平安道に當り、清正は咸鏡道に當り、長政は黃海道に當つた。そこで皆夫々兵を引きつれて北に向つた。所が韓の大將、李洸、尹國馨、金暉が全羅・忠清・慶尙の三道の

兵五萬騎を率ゐて王城を救はうといふので、龍仁までやつて來た。そして我が兵が山上に壘を構へてゐるのを見て戰を挑んだ。我が兵はそれに應じなかつた。その中に韓軍の油斷を見すまして、壘から出で撃つて大に之を破つた。

臨津・楊州・龍仁(京畿道) ○安城(黃海道)

當是時、自國都至釜山數十城、烽火相應、皆爲我兵所守、以與行營通聲息。秀吉乃遣石田三成、增田長盛、大谷吉隆、引游軍六萬赴援。伊達政宗亦請而往。三奉行入韓、宣令褒功。

此時に當り、國都より釜山に至るまでの數十城、烽火相應じ、皆我が兵の守る所と爲り、以て行營と聲息を通す。秀吉乃ち石田三成・増田長盛・大谷吉隆を遣はし、游軍六萬を引いて赴き援けしむ。伊達政宗も亦請うて往く。三奉行韓に入り、令を宣べ功を褒す。

この當時、國都から釜山までの間の數十城は、全部我が兵に守られ、烽火を擧げて合圖をし合ひ、那古耶の大本營と通信を交した。秀吉はそこで石田三成・増田長盛・大谷吉隆の三人に豫備隊六萬を率ゐて援けに行かせた。伊達政宗も願ひ出て出かけた。上記の三奉行は韓に入つてから、秀吉の命令を傳へ宣べ、功を褒賞した。

行長既徇平安、至大同江、遣書於平壤、復召李德馨使平調信、玄蘇相見江中、招降

之議不諧二人曰若主第導我伐明不則併夷滅之乃還六月韓王留左相尹斗壽元帥命元守平壤而自走寧邊欲入咸鏡開清正在此焉乃走義州令右相柳成龍發兵益於命元固守以俟明援兵命元與行長等夾江相持伺我兵稍怠夜遣精兵濟襲之行長叱衆起令義智絕其後擊破韓兵韓兵亂淺而走行長曰是可亂也舉軍從之斗壽命元棄守走

訓 行長既に平安を徇へ、大同江に至つて書を平壤に遣り、復、李德馨を召し、平調信・玄蘇をして、江中に相見て、之を招き降さしむ。議諸はず。二人曰く「若が主、第我を導いて明を伐て。不らざれば則ち併せて之を夷滅せん」と。乃ち還る。六月、韓王、左相尹斗壽・元帥命元を留めて、平壤を守らしめ、而して自ら寧邊に走り、咸鏡に入らんと欲す。清正在りと聞き、乃ち義州に走る。右相柳成龍をして兵を發して命元に益し、固く守りて以て明の援兵を俟たしむ。命元、行長等と江を夾みて相持す。我が兵の稍怠るを伺ひ、夜、精兵を遣はし濟つて之を襲はしむ。行長、衆を叱して起ち、義智をして其の後を絶たしめ、撃つて韓兵を破る。韓兵淺きを亂つて走る。行長曰く「是れ亂るべきなり」と。舉軍之に従ふ。斗壽・命元、守を棄て、走る。

通 行長は最早平安道をすつかり平げて終ひ、大同江に至つて手紙を平壤にやつてまた李德馨を呼びよせ、平調信と玄蘇をして大同江の江上で會見して韓王を招き降さうとした。併し相談は纏まらなかつた。二人が曰ふには「貴方の主君は唯だ日本軍を案内して明を伐てばよい。それが不承知なら一緒に滅してやる」と。そいつて返つて来た。六月、韓王は左相尹斗壽と元帥命元をして平壤を守らせ、自分は寧邊に走り咸鏡道に入らうとした。清正が居ると聞いて義州に逃げた。右相の柳成龍をして軍を出して命元に加勢し、嚴重に平壤を守つて明の援兵の来るまで支へさせた。命元は行長等と大同江を挟んで對陣してゐた。我が兵がいくらか気が緩んだのを偵察し、夜精兵を遣はし、我が陣を襲はせた。行長は部下を怒鳴り散らして激勵し、義智をして敵の後方連絡を絶たせ、韓兵を打ち破つた。韓兵は淺瀬を渡つて逃げた。行長が曰ふには「これは渡ることが出来る」と。全軍敵を追うて河を横切つた。斗壽・命元は守備を放擲して遁走した。

語釋 大同江・寧邊・義州(平安道)

行長入城得韓積粟十餘萬石使使還趣國都諸將欲與俱西曰太閤志主伐明今已取平壤平壤以西莫復支者自鴨綠江至明北京不過百餘里吾之全軍卷甲趨之使彼不及備可以得志矣秀家與三奉行答曰全羅江原二道未定我未可深入我水軍將循全羅而北會于黃海然後水陸並進是萬全之策也乃分諸將守國都平壤間諸城大友義統守鳳山黑田長政守白川小早川隆景守開城以備應援

訓 行長城に入り、韓の積粟十餘萬石を得たり。使をして還つて國都の諸將を趣さしめ、與俱に西せんと欲して曰く「太閤の志は明を伐つを主とす。今已に平壤を取る。平壤以西復支ふる者莫し。鴨綠江より明の北京に

至る、百餘里に過ぎず。吾の全軍甲を巻いて之に趨き、彼をして備ふるに及ばざらしめば、以て志を得べし」と。秀家、三奉行と答へて曰く「全羅・江原の二道未だ定まらず。我れ未だ深く入るべからず。我が水軍將に全羅に循ひて北黄海に會せんとす。然る後に水陸並び進む、是れ萬全の策なり」と。乃ち諸將を分ちて、國都・平壤間の諸城を守らしむ。大友義統は鳳山を守り、黒田長政は白川を守り、小早川隆景は開城を守り、以て應援に備ふ。

行長は城に入つて、韓の積み蓄へた兵糧米十餘萬石を分捕つた。使を後方へやり、國都京城にある諸將を促さしめて一緒に西に向はうと思つて曰ふには「太閤の志は明を伐つのが主である。今すでに平壤を取つた。平壤から西はもう持ちこたへる者はあない。そして鴨綠江から明の北京までは百餘里に過ぎぬ。我が全軍が鐵を巻き擔いで急行し、敵をして防備の暇を與へないやうにすれば立派に目的を遂げることが出来る」と。秀家は奉行と共に答へて曰ふには「全羅と江原の二道がまだ平定せぬ。我が軍はまだ深入りすべき時機ではない。又我が水軍は今や全羅道の岸に沿つて、北方黄海に會するはづである。それを俟つて水陸相並んで進んだならば、これが萬々過ちなき方法である」と。そこで諸將を手分けて、京城と平壤の間の諸城を守らせることにした。大友義統は鳳山を守り、黒田長政は白川を守り、小早川隆景は開城を守つて應援に備へた。

鳳山・白川(黄海道) ○開城(京畿道)

行長日、望水軍至。水軍諸將既發釜山、與慶尙右水使元鈞戰破之、遂出全羅。藤堂高虎聞韓、候船在唐島、以飛船赴之、奪其百餘艘、上島焚虜營。全羅水軍節度使李舜臣、以勝、鐘、鬪、艦、數千艘、在巨濟洋。諸將集飲于毛利勝信、營議進戰。脇坂安治曰、「先以大船巨炮挑戰、然後奪其船。加藤嘉明曰、「是劫而去之、非挑而奪之。挑而奪之者、宜以小船示弱、及敵近決戰、不則太閤謂水軍將士不欲戰也。」安治曰、「此事至重、一敗則陸軍亦不能振。子胡猖狂乃爾。」嘉明怒。高虎居間和解。勝信曰、「諸公受命於千里海外、忠告不隱、務利公事。太閤多良臣如此、何憂於戰。」因侑酒。酒數行、九鬼嘉隆曰、「今夜三鼓解纜、旦日進戰、船之大小隨宜耳。」嘉明潛起如廁、招其軍吏先期而進、比曉以走舸三艘直衝敵列、艦奪其二十艘。諸將繼進。舜臣卻我軍、追之入洋中。舜臣乃縱左右翼、以巨楨擊碎我船。來島康親死之。安治苦戰亡其衆、而退舜臣。因屯閑山、以距我水軍。我水軍是以不能合陸軍。陸軍亦未遂能進也。

行長日に水軍の至るを望む。水軍の諸將既に釜山を發し、慶尙右水使元鈞と戰つて之を破り、遂に全羅に出づ。藤堂高虎、韓の候船唐島に在りと聞き、飛船を以て之に赴き、其の百餘艘を奪ひ、島に上り虜營を焚く。全羅水軍節度使李舜臣、鐵艦鬪艦數千艘を以て巨濟洋に在り。諸將毛利勝信の營に集飲して進戰を議す。脇坂

安治曰く「先づ大船巨砲を以て戦を挑み、然る後に其の船を奪はん」と。加藤嘉明曰く「是れ劫して之を去らしむるなり。挑んで之を奪ふに非ず。挑んで之を奪ふ者は、宜しく小船を以て弱を示し、敵の近づくに及んで決戦すべし。不らずんば則ち太閤、水軍の將士は戦を欲せずと謂はん」と。安治曰く「此事至重、一たび敗れば則ち陸軍も亦振ふ能はず。子、胡ぞ猖狂乃ち爾」と。嘉明怒る。高虎、間に居て和解す。勝信曰く「諸公命を千里の海外に受け、忠告して隠さず、務めて公事に利す。太閤、良臣多きこと此くの如し。何ぞ戦を憂へん」と。因つて酒を侑む。酒數行、九鬼嘉隆曰く「今夜三鼓纜を解いて、旦日、進み戦ひ、船の大小宜しきに隨はんのみ」と。嘉明、潜に起つて厠に如き、其の軍吏を招き、期に先だちて進み、曉くる比走舸三艘を以て直に敵の列艦を衝き、其の二十艘を奪ふ。諸將繼ぎ進む。舜臣卻く。我が軍之を追うて洋中に入る。舜臣乃ち左右の翼を縦ち、巨煩を以て我が船を撃碎す。來島康親之に死す。安治苦戦し、其の衆を亡ひて退く。舜臣因つて閑山に屯し、以て我が水軍を距ぐ。我が水軍是を以て陸軍に合する能はず。陸軍も亦未だ遂に進む能はざるなり。

行長は毎日水軍の到着を待つてゐた。水軍の諸將士はその以前すでに釜山を出發し、慶尙右水使の元鈞と戦つて之を敗り、いよく全羅道の海上に出た。慶尙高虎は韓の偵察船が唐島に居ると聞き、早舟をつれてそこに急行し、敵の百餘艘を分捕り、島に上つて敵の陣屋を焼き拂つた。全羅水軍節度使の李舜臣は戰船數千艘を率ゐて巨濟洋にあつた。諸將は毛利勝信の陣屋に會合酒宴をして進み戦ふべき方法を相談した。脇坂安治が曰ふには「先づ大船と大砲とで戦を挑んだ後でその船を奪ひ取らう」と。加藤嘉明が曰ふには「それは恐怖を與へて逃がして終ふことになる。戦を挑んで敵を奪ふ方法ではない。本當に挑んで奪ひ取らうといふには、小さい舟を出してこちらの弱さを見せ、敵が近づいて来た時決戦するが宜しい。さうでもしなければ太閤は水軍の將士

は戦を嫌がつてゐると思はれるだらう」と。安治が曰ふには「此は非常に大切な事であつて、一度敗け軍になつたら陸軍の方もその影響を受けて活動ができなくなる。それを貴公は何故さう無鐵砲な事を言はれるのか」と。嘉明は腹を立てた。高虎が間に入つて二人を仲直りさせた。勝信が曰ふには「諸公は海外千里も遠方の土地に征討の命を受けられ、互に腹にためずに忠告し合ひ、力めて公事に利益あらしめんとせられてゐる。太閤殿下にはかくの如く良臣が多い。故に戦に就ては何も憂ふる所はない」と。さういつて酒をすゝめた。酒が數回座を廻ると九鬼嘉隆が曰ふには「今夜十二時に纜を解いて出發し、明日になつたら進んで戦ひ、船の大小はその時の便宜によつて定めよう」と。嘉明はそれを聞いてそつと立つて厠に行き、部下を呼んで約束の時刻より先きに進み、早船三艘で眞直敵の列艦に突き進んでその中二十艘を奪つた。諸將がそれに續いて進み、夜明頃に及んだ。舜臣は退却した。我が軍はそれを追うて洋上に出た。そこで舜臣は左右の翼に包圍され、大砲を放つて我が軍の船を撃ち碎いた。來島康親はそれが爲めに討死した。安治は苦戦し、その部下を失つて退いた。舜臣はそれに乘じて閑山島に錠泊して我が軍を拒いだ。我が水軍は平壤の陸軍と合することが出来なくなつた。陸軍もその爲めに遂に進むことができなかった。

唐島・巨濟洋・閑山(慶尙) ○三鼓(今の午後十二時)

明主翊鈞聞秀吉兵入韓則恐會其國西北邊有亂大將李如松率諸軍屯寧夏國都兵寡明主召其大臣問韓當援否大臣曰和窺明久矣而明之屏在韓韓先被和

兵而明不援韓且折而入和。和韓爲一分利於明合兵戮力以出遼東則勢如建瓴水于屋矣。顧韓民畏和兵而心不服焉。我遣一將助韓王以招聚之因其力以捍禦東北。是名以明援韓而其實以韓援明也。明何患於和哉。明主從之遣其將祖承訓史儒算將援韓而下書於琉球暹羅爲侵和之勢以縻秀吉使其勿航海西北嚮而大廳有疾謂秀吉已航海也憂疑疾篤秀吉聞之馳歸觀之至則已薨。

訓 明主翊鈞秀吉の兵韓に入ると聞いて則ち恐る。會其の國の西北邊に亂有り。大將李如松諸軍を率ゐて寧夏に屯し國都兵寡し。明主其の大臣を召し韓の當に援くべきか否かを問ふ。大臣曰く「和、明を窺ふこと久し。而して明の屏は韓に在り。韓先づ和兵を被りて明援けざれば、韓且に折れて和に入らんとす。和韓一と爲り、利を明に分ち、兵を合せ力を戮せ、以て遼東に出でば、則ち勢、飢水を屋に建すが如し。顧ふに韓民、和兵を畏れて心に服せず。我れ一將を遣はし、韓王を助けて以て之を招聚し、其の力を因つて以て東北を捍禦せん。是れ名は明を以て韓を援け、而して其の實は韓を以て明を援くるなり。明何ぞ和を患へんや」と。明主之に従ふ。其の將祖承訓史儒算を遣はし、將に韓を援けんとして、書を琉球暹羅に下し和を侵すの勢を爲し、以て秀吉を縻し、其をして海を航して西北に嚮ふ勿らしむ。而して大廳疾有り。秀吉已に海を航すと謂ふや、憂疑して疾篤し。秀吉之を聞き、馳せ歸りて之を觀す。至れば則ち已に薨せり。

通 明國の天、翊鈞は秀吉の軍隊が韓に入つたと聞いたので恐れをなした。丁度その時、明國の西北の邊境に亂があつた。大將の李如松が諸軍を率ゐて寧夏に屯してゐたので、都には兵が少なかつた。明主は大臣を召して、韓を救つてやるが好いかどうかと問うた。大臣が曰ふには「日本は久しく明を覗つてをります。そして明の防禦地は韓であります。韓が先づ日本兵に攻められて明が援けなかつたなら、韓は氣勢挫けて日本に加擔するでせう。日本と韓が同盟をして明國から利益を分ち取らうと致すことに定め、兵を合せ力を合せて遼東に勢揃ひしたならば、その勢は瓶の水を屋根の上からひつくり返すやうなものでありませう。(その勢が急で而かも容易に出来ること)考へて見ますに、韓の人民は日本兵を恐がつてゐるのであつて、心から服従してゐるわけではありますまい。私は一人の大將をやり韓王を助けることにして人民を呼び集め、その力で我が東北の邊境を防禦したいものです。名義上は明が韓を援けることになり、實質に於ては韓をして明を援けしめることになるのです。さうすれば日本のことは少しも心配する必要はありません」と。明はその意見に従つた。そこで指揮官祖承訓と史儒算とをやつて韓を助けることになつた。先づ手紙を琉球暹羅に送つて日本を攻める様子をさせ、秀吉が海を渡つて西北に進まぬやうに牽制を試みた。所が秀吉の母大廳が病氣にかつた。秀吉が最早海を渡つたこと、思ひ、心配し疑ひ重態に陥つた。秀吉はそれを聞き、見舞の爲め馳せ歸つた。歸つて見るともう大廳は薨じて終つてゐた。

語釋 飢水(瓶は瓦の名。飢水は屋根の瓦の上から流れる水) ○縻(つなぎ止め) ○西北嚮(朝鮮に向ふ)

當是時承訓儒算既入韓二將皆遼東勇將數與胡戰有功甚輕和人和人前掠明

疆者皆海盜、甲仗敵惡。明人狃見之、以爲豐臣氏兵亦如此也。於是至嘉山、問韓人曰：「平壤和兵、無乃走乎？」曰：「否。」承訓舉酒祝曰：「天使我成大功也。」進舍順安、營未定。行長偵知、夜遣輕卒劫其營、營亂。乃笑曰：「此虜亦易與耳。」明日自往與明軍戰于安定。旗幟偉麗、人馬皆被鬼頭獅面。明馬駭。行長麾兵蹂之、儒算下馬鬪、中丸斃。時霖雨。我兵迫、明人於淖、擊慶之。承訓挺身而走。行長因投書韓王曰：「王盍導我伐明。明當我兵、猶羊群放一虎、王所知也。今遼東既無明隻騎、而我舟師十餘萬、又來自西海。未知大駕將復何逃也。」當是時、韓猛將精兵多在咸鏡道、而爲清正所阻、不能來援韓王。

訓 是の時に當り、承訓、儒算、既に韓に入る。二將は皆遼東の勇將、數、胡と戰つて功有り。甚だ和人を輕んず。和人の前に明疆を掠する者は皆海盜、甲仗敵惡なり。明人之を狃見し、以爲らく豊臣氏の兵も亦此くの如きなりと。是に於て、嘉山に至り、韓人に問うて曰く「平壤の和兵乃ち走る無らんか」と。曰く「否」と。承訓酒を擧げ祝して曰く「天、我をして大功を成さしむるなり」と。進んで順安に舍す。營未だ定らず。行長偵知し、夜輕卒を遣はして、其の營を劫す。營亂る。乃ち笑つて曰く「此の虜も亦易し易きのみ」と。明日、自ら往いて明

の軍と安定に戰ふ。旗幟偉麗。人馬皆鬼頭獅面を被る。明の馬駭く。行長兵を麾いて之を蹂ましむ。儒算、馬を下りて鬪ひ、丸に中つて斃る。時に霖雨す。我が兵、明人に淖に迫り、擊つて之を斃にす。承訓身を挺んで、走る。行長因つて書を韓王に投じて曰く「王盍ぞ我を導いて明を伐たざる。明の我が兵に當る、猶ほ羊群に一虎を放つごときは、王の知る所なり。今、遼東既に明の隻騎なし。而して我が舟師十餘萬、又西海より來る。未だ大駕將に復何くに逃れんとするを知らざるなり」と。是の時に當り、韓の猛將精兵、多く咸鏡道に在り。而して清正の阻つる所と爲り、來つて韓王を援くる能はず。

通 この當時、承訓、儒算の二人は既に韓に入つてゐた。この二人は共に遼東の勇將で、度々北方蠻族とも戰つて功をあげた。頗る日本人を輕蔑してゐた。前に日本人で明の沿岸に掠奪を働いた者は皆海賊で、甲冑武器などは皆やぶれた粗末なものであつた。明人はそれを見つけてゐるので、豊臣氏の軍隊もそんなものだらうと想像してゐた。さて彼らは嘉山に到着して韓人に問うて曰ふには「平壤の日本兵は逃げて終ひはせんか」と。すると「否」といふ返事なので、承訓は酒盃をあげて祝つて曰ふには「天が俺に大手柄をさせてくれるわい」と。進んで順安に泊つた。まだちやんとした陣屋も決まらなかつた。行長はさぐつて様子を知り、夜身輕な兵卒を遣はしてその陣營を威かした。敵營は恐れ亂れた。それで笑つて曰ふには「この敵も大した奴ではない」と。翌日自分から出陣して明の軍と安定で戰つた。その旗指物は大きく美しく、人は鬼の面を馬は獅子の面を被つてゐた。明の馬は恐れて動かなくなつた。行長は兵に號令してそれを縦横に撃つてかゝらせた。儒算は動かなくなつた馬から下りて戰つたが銃丸に中つて死んだ。その頃丁度長雨であつた。我が兵は明人をぬかるみに追ひつめ、自由を失つた所を討つて皆殺にした。承訓は辛くも身一つで逃げ走つた。行長はそこで手紙を韓王にやつて曰ふには、

「王は何故我が案内をして明を伐たうとせぬのであるか。明が我が軍に當る様は、丸で羊群に一匹の虎を入れた様なもので、到底お話にならぬのは王のよく承知の所だ。今や遼東にはもう明の一騎も居らぬ。而も我が舟軍十餘萬が又西海からやつて来ることになつてゐる。王は一體どこに逃げ終せる心算であられるのか」と。その當時、韓の猛將精兵は多く咸鏡道に居つた。清正に邪魔をされて韓王を援けに来ることができなかつた。

嘉山・順安・安定(平安)

清正之入咸鏡道也、虜安城民三人使前導。二人辭。清正立斬之。其一人懼從之。至永興、聞二王子遁咸鏡北道、則大喜、留直茂、賴定、守永興、而自以其輕兵日行數百里。至鐵嶺、踰而北。北道兵使韓克誠、以六鎮、曠騎逆清正于海汀倉。北兵善射、憑平地馳突。我軍多步兵、不利。卻會日暮、收入倉內。韓兵沓至圍之。矢下如雨。清正排倉粟爲城、發銃拒之。應手斃千餘人。韓兵退、上鐵嶺而陣。欲待旦戰。清正夜分兵數千、環敵而伏。旦大霧。克誠將下嶺、而我兵四面齊起、天破之。追北至鏡城、又大破之。遂擒克誠、縱火焚城。

清正の咸鏡道に入るや、安城の民三人を虜にして先導せしむ。二人、辭す。清正立ちどころに之を斬る。

其の一人懼れて之に従ふ。永興に至り、二王子咸鏡北道に遁ると聞き、則ち大に喜び、直茂・賴定を留めて永興を守らしめ、而して自ら其の輕兵を以て日に行くこと數百里、鐵嶺に至り、踰えて北す。北道兵使韓克誠、六鎮の曠騎を以て清正を海汀倉に逆ふ。北兵善く射、平地に憑つて馳突す。我が軍歩兵多し。利あらずして卻く。會日暮れ、收めて倉内に入る。韓兵、沓至して之を圍む。矢下ること雨の如し。清正倉粟を排して城と爲し、銃を發して之を拒ぐ。手に應じて千餘人を斃す。韓兵退き、鐵嶺に上りて陣し、且を待つて戰はんと欲す。清正夜、兵數千を分ち、敵を環りて伏す。日大に霧ふる。克誠將に嶺を下らんとす。而して我が兵四面より齊しく起り、大に之を破り、北ぐるを追うて鏡城に至り、又大に之を破り、遂に克誠を擒にし、火を縱つて城を焚く。

清正が咸鏡道に入ると、安城の民三人を捕へて、之に道案内をさせた。二人は之を拒んだ。清正はすぐさま斬つて捨てた。すると残る一人は懼れをなして命に従つた。永興に行つて二王子が咸鏡北道に遁げたと聞き、清正は大いに喜び、直茂・賴定を残して永興を守らせ、自ら部下の輕兵を率ゐて日ごとに數百里を急行し、鐵嶺に着き又其處を踰えて北進した。北道兵使韓克誠は六鎮の騎射隊を率ゐて清正を海汀倉に逆へ撃つた。北兵は弓を射ることは上手で又平地を恃んで馳け廻り突き進むのであつた。我が軍は之に反して歩兵が多かつた。我が軍は利あらずして退いた。丁度日が暮れたので兵を收めて倉内に入った。韓兵が重り合つて押寄せ來り我を取り圍んだ。矢は雨の様降つた。清正は倉の米俵を積んで城を築き銃を放つて之を拒いだ。手に應じて千餘人を斃した。そこで韓兵も退いて鐵嶺に上つて陣を敷き、明けるのを待つて戰はうとした。清正は夜中に、數千の兵隊を分けて敵を取り巻いて兵を隠した。あくる朝大霧が降つた。敵將克誠が嶺から下りようとした。すると我が兵は四方から一齊に起つて大に之を破り、逃げるのを追うて鏡城に至り、又大に打ち破り、遂に克誠を捕へ、火をつけて城

を焚き拂つて終つた。

語釋 永興・鐵嶺・鏡城(或鏡) ○曠騎(馬上弓を射る騎兵隊)

聞ニ二王子在會寧府、驅而赴之。府韓極北也。行五十日至焉。府使鞠景仁懼、拘二王子、使人來乞降。且曰、「府内食盡、王子不食三日。願賜之食。」清正許之、欲自入城。將校皆諫曰、「吾窺府内、虜人填咽。我以寡兵入、恐有變也。」清正曰、「虜何能爲。吾已失王。不可又失王子。即有變、吾與王子決死。毋憾也。」乃與十餘騎入城。令饋者數十人、人執一器隨而入。韓人危疑、張弓環清正。清正叱之、辯其無他。韓人不能解。清正自開襟、當箭取印於懷、印紙示是。韓人捨弓拜。於是清正拘王子及其大臣黃赫・金貴榮等、使人護送之鏡城。

訓讀 二王子會寧府に在りと聞き、驅つて之に赴く。府は韓の極北なり。行くこと五十日にして至る。府使鞠景仁懼れ、二王子を拘へ、人をして來つて降を乞はしむ。且つ曰く「府内食盡き、王子食はざること三日。願はくば之に食を賜へ」と。清正之を許し、自ら城に入らんと欲す。將校皆諫めて曰く「吾れ府内を窺ふに、虜人填咽す。我れ寡兵を以て入らば、恐らくは變有らん」と。清正曰く「虜何ぞ能く爲さん。吾れ已に王を失ふ。又王子を失ふべからず。即し變あらば吾れ王子と死を決せん。憾毋きなり」と。乃ち十餘騎と城に入る。饋者數十人をして人ごとに一器を執り、隨つて入らしむ。韓人危疑し、弓を張つて清正を環る。清正之を叱し、其の他無きを辯す。韓人解する能はず。清正自ら襟を開いて箭に當り、印を懷より取り、紙に印して是に示す。韓人弓を捨て、拜す。是に於て、清正、王子及び其の大臣黃赫・金貴榮等を拘へ、人をして之を鏡城に護送せしむ。

通釋 二王子が會寧府に居ると聞いたので、馬を驅つて其地へ向つた。會寧府と云ふのは朝鮮の北端である。五十日も掛つてやつと到着した。府使鞠景仁は懼れて二王子を拘へ置き、人を派して降服を乞はしめた。そして曰ふには「府内では食糧が盡き、王子も三日間食を取られない。どうぞ願はくは王子に食を與へて下さい」と。清正は之を許し、自身で城中に入らうと思つた。すると將士連は皆諫めて、曰ふには「吾々が府内の様子を窺ひ見るに、虜人がいつばいに詰つて居ります。それなのにこちらで少數の兵を以つて入つたならば、或ひは變事が起るでせうから、御止めなさい」と。清正が曰ふのに「何、虜共は何が出来るもんか。自分は先きに國王を取り逃した。今又王子を取り逃すことはどうしても出来ないのだ。若し異變あらば、自分は王子と死を決する。さすれば死んでも心残りはないのだ」と。そこで十餘騎を引きつれて城内に入つた。又食物を送る者數十人をも、各人に一つづゝの器を持たせて一緒に城内に入らせた。韓人は危ぶみ疑ひ、弓を張つて清正をおつ取り圍んだ。清正は之を叱責して他意無きことを辯解した。それが韓人には通じなかつた。そこで清正は自分の襟を開いて箭の前に立ち塞がり、印判を懷より取出して紙に押しつけて見せた。すると初めて韓人は清正であることを知り、弓を捨て、清正を拜した。是に於いて清正は王子及び其の大臣黃赫・金貴榮等を拘へ、人をして之を鏡城に護送せしめた。

會寧府(威鏡) ○開襟(胸を矢先に當て、敵を矢先に見せしめ、胸を矢先に當て、敵を矢先に見せしめ) ○印紙(別意なき證を示す)

乃問景仁曰「朝鮮北境盡於此乎」對曰「然」曰「北鄰何國」曰「元良哈」清正乃以八千人進入其境攻一城拔之既夜下令曰「勿釋甲」夜半胡騎大至我兵力戰走之清正曰「虜不意我至我一捷足以報太閤矣」乃收其貨寶引兵南還胡騎躡之清正自殿而退終至海濱西南望得高山韓捕虜曰「富士岳也」清正下馬免胄而拜謂其騎曰「自吾辭太閤謂日西北行矣今望岳於西南覺吾行遠遠也」乃歸二十日至鏡城

訓讀 乃ち景仁に問うて曰く「朝鮮の北鏡、此に盡くるか」と。對へて曰く「然り」と。曰く「北隣は何の國ぞ」と。曰く「元良哈」と。清正乃ち八千人を以て進んで其の境に入り、一城を攻めて之を拔く。既にして夜なり。令を下して曰く「甲を釋くこと勿れ」と。夜半、胡騎は大に至る。我が兵力戰して之を走らす。清正曰く「虜我が至るを意はず。我が一捷、以て太閤に報ずるに足れり」と。乃ち其の貨寶を收め、兵を引いて南に還る。胡騎之を躡す。清正自ら殿して退く。終に海濱に至り、西南に望んで高山を得たり。韓の捕虜曰く「富士岳なり」と。清正馬を下り、胄を免いで拜し、其の騎に謂つて曰く「吾れ太閤に辭してより、日に西北に行く」と謂へり。今、岳を西南に望む。吾が行の遠遠なるを覺ゆ」と。乃ち歸り、二十日鏡城に至る。

と。「それでは北の隣の國は何と云ふ國か」と又問うた。「元良哈と申します」と答へた。そこで清正は八千人をつれて進んで其の境に入り、一城を攻め落した。其の内に夜になつた。清正は陣中に令して曰ふには「鏡をぬいではならぬ」と。夜半に胡騎が多數押寄せた。我が兵力戰して之を蹴散らした。清正が曰ふには「虜共は乃公が來るとは思ひ設けなかつたのだ。今我れ一たび捷つたことは太閤に報告するに十分だ」と。そこで其の城の寶物を取り上げ、兵を引き隨へ、南を指して還つた。胡騎が後を追ひ掛けて來た。清正は自ら部隊の後方にさがつて退いた。終に濱邊に至つて西南を望むと一つの高山を見つけた。韓の捕虜が「あれは日本の富士山です」と言つた。清正は馬から下りて胄をぬいで仰ぎ拜み、其の騎馬に向つて曰ふには「自分は太閤殿下に暇乞ひしてから、毎日西北の方に向つて進んだと思つてゐた。が、今富士山を西南の方向に望む。して見ると我が一行の遠くへ來たことが分る」と。そこで歸路に着き、二十日目に鏡城に到着した。

元良哈(朝鮮と地隔てゐるので之を疑ふものが多い。一説) ○一城(宛部) ○海濱(北青) ○富士岳(これは傳稱にて事實ではない)

八月、韓王自義州遣李贊李元翼來攻平壤者再行長輒擊卻之。王亦聞清正已略定咸鏡、恐其與行長并力來襲也、益告急於明。明既得承訓、敗聞、舉朝震驚。大司馬石星說明主曰「秀吉兵乘勝而遠鬪、未可與爭鋒。且寧夏未平、復有事於遼東。不若且議和以紓禍也」因薦沈惟敬。惟敬越人、慧黠有辯口。遊燕、與燕倡家僕鄭四善、鄭

四嘗在對馬。惟敬以故略知和事。徵幸富貴。其友袁茂嘗納女於星。星因知惟敬。召而與語。大悅。遂薦之。於是明主以惟敬為遊擊將軍。多資金帛。往說我軍。投書平壤。卑辭乞和。行長與宗義智見惟敬於城北。曰。明即欲和。宜使使濟海。因徵數條。惟敬盡順其意。曰。歸取報。五十日復來。乃請界平壤西北十里。和韓俱不相踰。行長許而遣歸。告狀於秀家。

訓讀 八月、韓王、義州より李資、李元翼を遣はし、來つて平壤を攻むること再びす。行長輒ち撃つて之を卻く。王亦清正已に成鏡を略定すと聞き、其の行長と力を併せて來り襲ふを恐る、や、益々急を明に告ぐ。明既に承訓の敗聞を得、舉朝震驚す。大司馬石星、明主に説いて曰く「秀吉の兵、勝に乗じて遠く鬪ふ。未だ與に鋒を争ふべからず。且つ寧夏未だ平がず。復遼東に事あり。且く和を議して以て禍を紓べんに、かざるなり」と。因つて沈惟敬を薦む。惟敬は越人、慧黠にして辯口あり。燕に遊び、燕の倡家の僕鄭四と善し。鄭四嘗て對馬に在り。惟敬、故を以て略和事を知り、富貴を徵幸す。其の友袁茂、嘗て女を星に納る。星因つて惟敬を知る。召して與に語り、大に悦び、遂に之を薦む。是に於て、明主、惟敬を以て遊擊將軍と爲し、多く金帛を資し、往いて我が軍に説かしめ、書を平壤に投じ、辭を卑くして和を乞ふ。行長、宗義智と惟敬を城北に見る。曰く「明即し和を欲せば、宜しく使をして海を渡らしむべし」と。因つて數條を徵す。惟敬、數條を請ひて曰く「一、

つて報を取り、五十日にして復來らん」と。乃ち平壤の西北十里を界とし、和韓俱に相踰えざるを請ふ。行長許して遣歸し、狀を秀家に告ぐ。

譯 八月、韓王は義州から李資・李元翼を遣はして、平壤を攻めに寄越すこと兩度に及んだ。行長はたちまち之を撃退して終つた。王も亦清正が已に成鏡を征服したと聞き、従つて清正が行長と力を併せて來り攻めるのを恐れ、益々急を明に告げ知らせた。明はとつて承訓の敗報を聞いて、朝廷を擧げて一同震へ驚いたのであつた。大司馬石星は明の王に説いて曰ふには「秀吉の軍は勝に乗じて遠く進んで鬪つてゐます。まだ、相手になつて鋒を争ふべきではありません。その上に寧夏がまだ平定しませぬ。復遼東方面に事件を起すので御座います。これは考慮を要す可きでありまして且らく和平を議して禍をのばしのがれるのが最上の手段であります」と。因つて沈惟敬を推薦した。惟敬は越の人、その性質は狡猾で小才があり、辯舌のなかく、上手な男であつた。燕の地に遊び其處の遊廓の下僕鄭四といふ者と仲が善かつた。その鄭四は前に對馬に居たことがあつた。従つて惟敬はその爲めに大體日本の事を知り、あわよくば富貴を得んと願ふ心があつた。其の友人袁茂は嘗て娘を石星の側女にした。因つて石星は惟敬を知つたのである。召して相共に語り、大いに投合する所あり、遂に之を推薦したのである。是に於て明主は惟敬を遊擊將軍と爲し、澤山な金帛を資らせて、來つて我が軍に説かしめ、書面を平壤に送つて辭を卑くして和を乞うたのである。行長は宗義智と城北で惟敬と面接した。そして曰ふには「明が若し和睦を願ふならば、使者を立て、海を渡つて直接に本營に來るやうにせよ」と。そこで和睦の條件數個條を示して要求した。惟敬は盡く行長等の意に順つて曰ふには「一旦歸國して返事を貰ひ受け、五十日たつてもう一度參りませう」と。因つて平壤の西北十里を界として、日本も朝鮮も俱に其の界を踰えない様に請うた。行長

は此の申出でを許可して歸らしめ、此の状況を秀家に報告した。

義州(平安)

於是、我兵在平壤者、不復西下。而韓兵竊發諸道、沈岱者募兵朔寧、計復都城。秀家攻而斬之。鄭湛邊應井亦聚兵全州、筑紫廣門自慶尙入全羅、與湛應井戰熊嶺、斬之。而全州未下。九月、應井弟應星敗石田三成于馬灘、元豪敗蜂須賀家政于龜尾浦、遂攻毛利高政于春川。高政伏兵擒豪、遂定江原。鍋島直茂相良賴定在永興、取德原、咸興等七城、移守咸興。清正自鏡城以諸俘虜還、至蓮下。會韓兵二萬、扼梁養山。清正擊破之、走其將梅天。直茂賴定迎之、相見于橋中、賀其無恙。時已十月矣。清正返軍安邊、乃修全山、橘州諸城、相與協心、按據韓人。

是に於て我が兵の平壤に在る者、復西下せず。而るに韓兵は竊に諸道を發し、沈岱なる者、兵を朔寧に募り、都城を復せんと計る。秀家攻めて之を斬る。鄭湛・邊應井も亦兵を全州に聚む。筑紫廣門、慶尙より全羅に入り、湛・應井と熊嶺に戰つて之を斬る。而して全州未だ下らず。九月、應井の弟應星、石田三成を馬灘に敗り、元豪、蜂須賀家政を龜尾浦に敗り、遂に毛利高政を春川に攻む。高政兵を伏せて豪を擒にし、遂に江原を定む。鍋島直茂、相良賴定、永興に在り。德原・咸興等の七城を取り、移つて咸興を守る。清正、鏡城より諸俘虜を以て

還り、蓮下に至る。會々韓兵二萬、梁養山を扼す。清正、擊つて之を破り、其の將梅天を走らす。直茂・賴定、之を迎へ、橋中に相見え、其の恙無きを賀す。時已に十月なり。清正、軍を安邊に返し、乃ち全山・橘州の諸城を修め、相與に心を協はせて韓人を按據す。

そこで我が兵の平壤に在る者は、復西に下らなかつた。而るに韓兵は竊かに諸道を發し、沈岱といふ者朔寧で兵を募り集め、都城を回復することを計畫した。秀家は之を攻め殺して終つた。鄭湛・邊應井も亦兵を全州から募集した。筑紫廣門が慶尙から全羅に入り、湛・應井と熊嶺に戰つて之を斬つた。併し全州は未だに降服しなかつた。九月、應井の弟應星は石田三成を馬灘に敗り、元豪は蜂須賀家政を龜尾浦に敗つて、遂に毛利高政を春川に攻めた。高政は伏兵を設けて豪を擒へ、遂に江原道を略定した。鍋島直茂・相良賴定の二人が永興に居つた。德原や咸興等の七城を攻め取り、移つて咸興を守つて居た。清正是鏡城から多くの生捕をつれて還り、蓮下まで来た。すると韓兵二萬人が梁養山を保ち守つて居るのに出會つた。清正是擊つて之を破り、其の將梅天を潰走せしめた。直茂・賴定は清正を迎へて橋中といふ所で會見し、其の無事であつたことを祝賀した。その時はもう十月に入つてゐた。清正是軍を安邊に返し、そこで全山や橘州の諸城を修理し、相與に心を合せて韓人を鎮め安んじ、守りに就いて居た。

朔寧(京畿) ○全州・熊嶺(全羅) ○馬灘・龜尾浦・春川・江原(江原) ○永興・德原・咸興・蓮下・梁養山・橘中・安邊・全山・橘州(咸鏡)

當是時、諸將稟事秀吉、使舸交於海中。是月、秀吉復奏請赴行營。天子詔曰、征戎之

事一任將佐勿輕濟海。秀吉拜謝而行。十一月直茂以三千人與韓將李希得兵三萬戰于咸興北走之。斬首千餘級。清正盡收咸鏡。二十二管遂議自北道長驅入遼東。未果。行長亦以惟敬過期不至乃怒。下令軍中曰。皆修行具。吾將飲馬鴨綠江也。義州聞之。荷擔而立。韓王飛書告明。

訓讀 是の時に當り諸將事を秀吉に稟す。使舸海中に交る。是の月秀吉復奏請して行營に赴く。天子、詔して曰く「征戎の事は一に將佐に任じ、輕がるしく海を濟る勿れ」と。秀吉、拜謝して行く。十一月、直茂三千人を以て、韓將李希得の兵三萬と咸興の北に戰つて之を走らす。斬首千餘級。清正盡く咸鏡の二十二管を收め、遂に北道より長驅して遼東に入るを議す。未だ果さず。行長も亦惟敬の期を過ぎて至らざるを以て乃ち怒り、令を軍中に下して曰く「皆行具を修めよ。吾れ將に馬に鴨綠江に飲はんとす」と。義州之を聞き、荷擔して立つ。韓王書を飛ばして明に告ぐ。

通釋 是の時に當つて諸將は事情を秀吉に申傳へた。その使者の早船が海上で頻りに行き違つた。是の月、秀吉は再び天皇に奏上してお許を請ひ那古耶の行營に出掛けた。天皇は詔して仰せらるゝに「えびす征伐の事は一切大將どもに任せ、輕しく海を渡つたりせぬやうに」と。秀吉拜謝して西下した。十一月、直茂は三千の兵を率ゐて韓將李希得の兵三萬と咸興の北方で戦ひ、之を敗北せしめた。斬つた首級が千餘もあつた。清正は咸鏡

も亦惟敬が約束の期を過ぎてもやつて来ないので怒つて命令を軍中に下して曰ふには「一同出發の用意をせよ。吾はこれから鴨綠江の水を馬に飲ませようとするのだ」と。義州の者は此の事を聞いて荷物を背負つて立ち上り逃げ支度をした。韓王は書面を飛ばして明に告げ知らせた。

北道 (朝鮮北方) ○過期 (五十日を)

明群臣議曰。惟敬說不可信。秀吉殊無退兵意。曩者以暑濕取敗。今天寒馬肥。宜出兵也。翊鈞猶豫未決。懸令有能獻奇計。復東藩者。購萬金。封伯爵。襲之子孫。莫敢應者。衆推少司馬宋應昌曰。應昌去歲上書言秀吉必來。是知兵矣。翊鈞遂拜應昌爲都御史。經略東北。劉黃裳袁黃爲贊畫。而選將兵者。李如松稱材武天下無雙。會其平寧夏而旋。則拜爲大將。率六將軍。東拒秀吉。期以十一月發北京。獨大司馬猶持前議。復遣惟敬至平壤。伺秀吉意。惟敬留平壤城中。與行長密定議。以去。而如松等大兵已至遼東。惟敬要之於路。曰。媾將成矣。和人約棄平壤界大同江而退。如松方銳意立功。弗憚惟敬言。欲執而斬之。應昌等說曰。宜舍此因怠敵而襲之。如松從之。率渡鴨綠。會降虜爲我耳目者。爲韓相所摘發。皆就拘縛。以故不知明軍至。

訓讀 明の群臣、議して曰く「惟敬の説、信すべからず。秀吉殊に兵を退くるの意なし。曩者には暑濕を以て敗を取る。今、天寒く馬肥ゆ。宜しく兵を出すべきなり」と。翊鈞、猶豫して未だ決せず。令を懸く、「能く奇計を獻じ、東藩を復する者有らば、萬金に購ひ、伯爵に封じ、之を子孫に襲がしめん」と。敢て應ずるもの莫し。衆、少司馬宋應昌を推して曰く「應昌は、去歲、上書して秀吉必ず來るを言ふ。是れ兵を知るなり」と。翊鈞、遂に應昌を拜して都御史と爲し、東北を經略せしむ。劉黃裳、袁黃、贊畫と爲り、兵に將たるものを選ぶ。李如松、材武天下無雙と稱す。會々其の寧夏を平げて旋る。則ち拜して大將と爲し、六將軍を率ゐて、東のかた秀吉を拒がしむ。期するに十一月を以てして北京を發せんとす。獨り大司馬、猶ほ前議を持し、復惟敬を遣はして平壤に至りて秀吉の意を伺はしむ。惟敬、平壤の城中に留り、行長と密に議を定め以て去る。而して如松等の大兵已に遼東に至る。惟敬之を路に要して曰く、「嬌將に成らんとす。和人平壤を棄て、大同江を界として退かんと約す」と。如松方に意を功を立つるに鋭くし惟敬の言を憚ばず。執へて之を斬らんと欲す。應昌等説いて曰く「宜しく此を舍し、因つて敵を怠らしめて之を襲ふべし」と。如松、之に従ひ、率ゐて鴨綠を渡る。會々降虜の我が耳目と爲る者、韓相の摘發する所と爲り、皆拘縛に就く。故を以て、明軍の至るを知らず。

通釋 明の群臣は評議して曰ふには「惟敬の説く所は信じ難い。秀吉は格別兵を退ける意志はないやうに思はれる。前に明軍は暑くて濕氣多くそれが爲めに敗けを取つた。今は秋の末で、氣候は寒く馬も元氣だ。此の際宜しく出兵すべきである」と。然るに明主朱翊鈞は愚圖々々して決心がつかなかつた。命令を制札場に掛けて曰ふには「能く奇計を獻じて朝鮮を恢復する者があるならば、萬金を與へ伯爵に封じ、そして子孫を永く相續させるであらう」と。併して之に應じて、策を獻ずる者は無かつた。翊鈞は少司馬宋應昌を推舉して曰ふには「曩

昌は昨年上書して秀吉がきつと攻め來ると豫言しました。是れは實に兵を知るものであります」と。翊鈞も遂に此の應昌を迎へて都御史となし、東北部を經略させた。劉黃裳、袁黃の二人は贊畫の官に任じ、兵に將となるべき者を選ぶことになつた。所が李如松は人物と言ひ、武勇と言ひ、天下に並ぶものがないと稱されてゐた。其の李如松がその時丁度寧夏を平げて凱旋した。そこで之を拜して大將となし、六人の將軍を率ゐて東の方秀吉の軍を拒がせることとした。そして十一月を以て北京を發足しようとしてゐた。然るに只大司馬石星は尙ほ前の意見を維持し、再び惟敬を平壤に遣つて秀吉の意中をさぐらしめた。惟敬は平壤の城中に留り、行長と秘密に相談を定めて立ち去つた。其の内に如松の大軍は已に遼東に到着した。惟敬は之を途中に待ち受けて曰ふには「和睦は今出來かゝつて居る。日本人は平壤を棄て、大同江を境界にして兵を退ける約束をした」と。如松は時方に功名を樹てたいと切りに希望して居たので、惟敬の言葉を憚ばなかつた。惟敬を執へて之を斬つて終はうと思つた。應昌等が之を止めて曰ふには「此を許し因つて敵を油斷させ、不意に襲うて打ち破るのが宜いでせう」と。如松もこの議に従ひ、軍を引きつれて鴨綠江を渡つた。其の時丁度降參した朝鮮人で我が軍の手先となつて居た者が、朝鮮の宰相に依つてそれを見破られ、皆縛られて終つた。そんな譯で知らせて呉れるものが縛られてゐるので、我が軍では明兵が來たのを一寸も知らなかつたのである。

語釋 東藩(朝鮮を) ○袁黃(袁了) ○前議(和睦) ○韓相(柳成)

二年正月朔、如松至肅寧、使裨將查大受先往順安。大受使人來告曰「沈遊擊至、和議成矣。行長喜亦使一將以二十人會順安。大受誘與飲酒、伏起。二十人搏戰亡、其

三人走還平壤。行長大驚。丹波人内藤如安爲行長侍史、冒小西氏稱、飛驒守。於是行長命如安往詰如松。如松慰解遣還。而六日以諸軍薄平壤。行長與宗義智等急修守備、馳使告急於鳳山。使者未歸。如松已以先鋒攻含毬門。我兵擊卻之。其夜出襲李如栢營。不利。

訓讀 二年正月朔、如松、肅寧に至り、裨將查大受をして先づ順安に往かしむ。大受人をして來り告げしめて曰く、「沈遊擊至り、和議成る」と。行長喜び、亦一將をして二十人を以て順安に會せしむ。大受誘ひて與に酒を飲む。伏起る。二十人、搏戦して、其の三人を亡ひ、走つて平壤に還る。行長、大に驚く。丹波の人内藤如安、行長の侍史と爲り、小西氏を冒し、飛驒守と稱す。是に於て行長、如安に命じ、往いて如松を詰らしむ。如松、慰解して遣り還す。而るに六日、諸軍を以て平壤に薄る。行長、宗義智等と急に守備を修め、使を馳せて急を鳳山に告ぐ。使者未だ歸らず。如松已に先鋒を以て含毬門を攻む。我が兵撃つて之を卻く。其の夜出で、李如栢の營を襲ふ。利あらず。

通釋 二年正月元日、如松は肅寧に來り、副將查大受を先づ順安に往かしめた。大受は人をして我が軍に來り曰はしめるには「沈遊擊將軍がやつて來て、講和の約束が出来上りました」と。行長は喜んで、亦一將をして二十人をつれて順安で會見させることにした。大受は誘つて一緒に酒を飲んだ。忽ち伏兵が起つた。二十人は組討ちして戦ひ、其の内の三人を失つたが、逃げて平壤に還つた。行長は大いに驚いた。丹波の人内藤如安といふ者

は、行長のお側の書き役となつて、小西の姓を名乗り、飛驒守と稱してゐた。そこで行長はこの如安に命じて、往つて李如松を詰責させた。如松は之を慰めなだめて還した。而るに六日諸軍を率ゐて平壤に薄つて來た。行長は宗義智等と急き守備を堅めると共に、使を馳らせて急を鳳山に告げた。その使者がまだ歸着しない。その内にもう如松は先鋒部隊を率ゐて含毬門を攻めた。我が兵は之を撃退した。そして其の夜城を出て李如栢の陣屋を襲うた。併しうまく行かなかつた。

語釋 遊擊(遊擊) ○侍史(書佐、前卒などと同じ) ○肅寧(順安) ○沈遊擊(沈惟敬は遊擊將軍) ○一將(逸見) ○鳳山(黃海) ○含毬門(平壤城門の名)

其明、明軍大至。如松攻小西門、如栢攻大西門、吳惟忠、駱尙志攻北門、祖承訓攻南門。承訓欲立奇功、償前敗。知我易韓人也、令其兵皆尙韓裝、故踏踞不進。行長以爲韓人也、專距西北、自率銃手擊卻如松。如松益用大礮、火箭、毒煙蔽城。我兵殊死戰。承訓則脫韓裝、露明甲、鼓譟而登。行長驚急、分兵拒之。而西北卽陷。行長退保牡丹臺。明軍四面攀堞、我兵力拒、刀槍攢垂、堞如蝟毛。明兵死傷數千人、不能拔。退營城外。行長將木戶某說曰、鳳山兵不來援、吾以孤城抗大敵、終不可支。盍退合於諸將。

以圖再舉。行長然之。即夜潛率衆出城。至江。江冰方合。蹈而渡。至鳳山。大友義統已遁之國都。黑田長政在白川。聞敗。引兵迎行長。代殿而退。明軍不敢追躡。終至國都。韓人聞之。所在竝起。以應明軍。

其の明、明軍大に至る。如松、小西門を攻め、如栢、大西門を攻め、吳惟忠、略尙志、北門を攻め、祖承訓、南門を攻む。承訓、奇功を立て、前敗を償はんと欲す。我が韓人を易るを知り、其の兵をして、皆韓装を尙へ。故に踏阻して進まざらしむ。行長以て韓人と爲し、専ら西北を拒ぎ、自ら銃手を率ゐて、撃つて如松を卻く。如松、益大礮、火箭を用ひ、毒烟、城を蔽ふ。我が兵殊死して戦ふ。承訓、則ち韓装を脱ぎ、明甲を露し、鼓諫して登る。行長驚き、急に兵を分つて之を拒ぐ。而して西北即ち陥る。行長退き、牡丹臺を保つ。明軍、四面より堞を攀づ。我が兵、力め拒ぎ、刀槍攢り垂る。堞、蟬毛の如し。明兵の死傷數千人、抜くこと能はず。退いて城外に營す。行長の將木戸某、説いて曰く「鳳山の兵、來り援けず。吾れ孤城を以て大敵に抗す。終に支ふべからず。盍ぞ退いて諸將に合し、以て再舉を圖らざる」と。行長之を然りとし、即夜、潛に衆を率ゐて城を出で、江に至る。江冰、方に合す。踏んで渡り、鳳山に至る。大友義統、已に遁れて國都に之く。黒田長政、白川に在り。敗を聞き、兵を引いて行長を迎へ、代り殿して退く。明軍、敢て追躡せず。終に國都に至る。韓人之を聞き所在竝び起つて、以て明軍に應ず。

を攻め、祖承訓は南門を攻めた。承訓は奇功を立て、前の敗戦の埋合せをしようと思つてゐた。我が軍が朝鮮人を輕視してゐることを知つたので、部下の兵隊全部に、鎧の上に朝鮮服を着させて故意に愚圖くためらつて進ましめない様にさせた。行長は朝鮮人と思ひ込んで専ら西北方面を拒ぎ、自ら小銃隊を率ゐて如松を撃退した。如松は益々大礮や火矢を用ひて射つたので濛々たる烟が城を蔽うた。我が兵は死を決して戦つた。承訓は此の隙に部下の着てゐた朝鮮服を脱がせ、明軍の鎧を露はして、陣太鼓を打ち鳴らし、喊聲を揚げて登つて來た。行長打ち驚いて急ぎ兵を分けて之を拒いだ。其の内に西北方面が陥つて終つた。行長は後退して牡丹臺に立て籠つた。すると明軍は四面から、城の物見の垣に攀ぢ登つて來た。我が兵は力を盡して守り拒ぎ、垣の下へ刀や槍を集め垂れた。物見の垣に針鼠の毛の様に突き出た。明軍は之に觸れて死傷する者が數千人もあつたので、遂に此處を抜くことは出来なかつた。そこで退き下つて城外に陣取つた。行長の將木戸某なる者行長に説いて曰ふには「鳳山の援兵が來ません。吾々は孤城を以て大敵に對抗してゐます。終には此の城も支へることは出来ませんまい。どうして退いて諸將の軍と合し、再舉をお圖りにならないのですか」と。行長は此は尤もなことだと思ひ、其の夜直に潛に衆を率ゐて城を出で、大同江まで來た。河の水が丁度氷つて居た。そこで之を踏んで渡りやがて鳳山に着いた。すると大友義統は已に國都に遁れて行つた後である。黒田長政は白川に居て此の敗を聞き、軍隊をつれ行長を迎へに來て、行長に代つて後部を守り乍ら退いた。明軍は敢て之を進撃しなかつた。終に國都に到着した。韓人は此の戦の様子を聞いて、至る所一齊に竝び起つて、明軍に呼應した。

牡丹臺(都城を少し) ○擲垂(突を落さん爲めに群り集) ○白川(黃海)

宋應昌等謀曰「秀吉將帥皆萃王城。而加藤清正者懸孤軍在咸鏡。聲聞不通。可虛喝而取也。」使辯士馮仲纓以譯說。清正曰「和無故攻韓。韓告急於明。明皇帝大怒。遣大兵救韓。復平壤。復開城。遂復國都。擒浮田小西。盡逐其兵。令琉球暹羅諸國壓和境。而足下猶守韓。欲爲誰乎。皇帝聞足下高義。使使臣爲報告之。爲足下計。莫若速返韓王子。收軍歸和。否則明軍四十萬。驅韓兵而東。直萃於安邊。足下雖欲服。明得乎。清正使侍史答之曰「清正知奉國命而戰。不知聽明令而和也。歸語明主。我有敵甲凋兵。近苦無事。貴國來伐。已聞命矣。而咸鏡之途險阨。騎不可比行。卒不得成列。兵之來。日一二萬而已。吾迎而擊之。日殺一萬。四十日殲之。日殺二萬。二十日殲之。既殲而西。指度遼破燕。奉大駕於海東。清正可以復命矣。」仲纓走歸。

訓讀 宋應昌等謀つて曰く「秀吉の將帥、皆王城に萃る。而るに加藤清正是孤軍を懸けて咸鏡に在り。聲聞通せず。虚喝して取るべきなり」と。辯士馮仲纓をして、譯を以て清正に説かして曰く「和、故なくして韓を攻む。韓、急を明に告ぐ。明の皇帝、大に怒り、大兵を遣はして韓を救ひ、平壤を復し、開城を復し、遂に國都を復し、浮田・小西を擒にして、盡く其の兵を逐ひ、琉球、暹羅の諸國をして和境を壓せしむ。而るに足下、

ほ韓を守り、誰が爲めにせんと欲するか。皇帝、足下の高義を聞き、使臣をして、爲めに之を報告せしむ。足下の計を爲すに、速に韓の王子を返し、軍を收めて和に歸るに若くは莫し。否ざれば則ち明軍四十萬、韓兵を驅つて東し、直に安邊に萃らん。足下、明に服せんと欲すと雖も、得んや」と。清正、侍史をして之に答へしめて曰く「清正、國命を奉じて戦ふを知り、明の令を聽いて和するを知らざるなり。歸つて明主に語げよ。我に敵甲凋兵有り。近ごろ事無きに苦しむ。貴國來り伐つは、已に命を聞けり。而るに咸鏡の途、險阨、騎、比行すべからず。卒、列を成すを得ず。兵の來る、日に一二萬のみ。吾れ迎へて之を撃ち、日に一萬を殺さば、四十日にして之を殲さん。日に二萬を殺さば、二十日にして之を殲さん。既に殲して西に指し、遼を度り燕を破り、大駕を海東に奉ぜん。清正以て復命すべし」と。仲纓、走り歸る。

通釋 宋應昌等は相謀つて曰ふには「秀吉の大將共は皆王城に集つて居る。加藤清正是一軍だけで懸け離れて咸鏡道に居る。音信不通の状態に置かれて居る。だから之を空おどしに脅かして打ち取ることが出来る」と。辯士馮仲纓を使はし、通譯官を以て清正に説き付けて曰ふには「日本は何等理由もなく韓を攻めた。そこで韓國は急を明に告げた。明の皇帝は大に怒られ、大兵を派遣して韓を救ひ、平壤を恢復し、開城を取り戻し、遂に國都をも恢復して、浮田・小西の兩大將を生擒り、其の兵を全部追つ拂ひ、又琉球や暹羅の諸國に頼んで日本の國境を壓迫させた。それなのに足下は今猶ほ韓土に踏み止まつてゐる、が、一體誰の爲めに忠義を盡さうと思つて居られるのか。我が明の皇帝は足下の義に堅い心を聞し召され、私を遣はして足下の爲めに之を報告させられたのである。それで足下の爲めに此の際最もよい計は早速韓の王子を返し、軍隊を收めて日本へお歸りになることである。さもなければ明の四十萬の大軍は韓兵を驅り立て、東に向ひ、直に安邊に集まるだらう。其の時になつ

てから、足下が明に降服しようと思つても、最早遅いだらう」と。そこで清正は傍付きの書役をして之に答へしめて曰ふには「清正は日本の國命を奉じて戦ふことだけは知つて居るが、明國の命令に従つて和睦することは知らぬ。歸つて明主に語れ。こちらにはお粗末ながら甲冑もあるし武器もある。近頃は無事に苦しんで居る所だ。そちらでやつて來ることはもう承知した。しかし威鏡道の途は狭く険しく、騎兵は並んで行くことは出來ぬ。歩卒も列を作つて進むことは出來ぬ。だから君の方の兵がやつて來るのは、精々一日に一萬か二萬だらう。之を迎へ撃つて一日に一萬を殺したら、四十萬の全軍は四十日で皆殺しに出来る。又一日に二萬を殺せば二十日で皆殺した。之を皆殺しにした後で西に向つて遼東を過ぎ、燕を打ち破り、そして明王を生捕つて日本に連れ歸らう。斯くてこそ清正は國命にお答へすることが出来る次第ぢや」と。仲纒は驚き走り歸つて行つた。

語釋 涓兵(武器) ○燕(北京は昔の燕國の地)

當是時、明軍乘勝、鼓行而東。國都將吏令大同以東諸城撤守來會。諸城皆聽命。獨小早川隆景與毛利秀包立花宗茂弗肯、曰「吾輩竭力報國固在今日。且明軍勝而驕、易與耳。」三奉行促之甚急。乃退未至王城三十里而軍。明軍進入開城、遂渡臨津。查大受爲其先鋒、值宗茂于礪石嶺。宗茂擊破之、斬百餘人。如松乃盡引其軍而至。隆景以三萬人邀擊于碧蹄館。大戰良久。宗茂與秀包橫擊之。如松初以火器襲平壤、一戰得志、謂和兵不足復畏。乃輕進不具銃礮。以短兵接戰。我軍兵銳、刃利。縱橫揮擊、人馬皆倒。莫敢當其鋒。我兵呼聲動天、遂大破明軍、斬首一萬、殆獲如松。追北至臨津、擠明兵于江。江水爲之不流。如松痛哭徹夜、聚敗軍、退入坡州。韓將相請其再進、不肯。

是の時に當り、明軍、勝に乗じ鼓行して東す。國都の將吏、大同以東の諸城をして、守を撤して來り會せしむ。諸城皆命を聽く。獨り小早川隆景、毛利秀包、立花宗茂と肯せずして曰く「吾が輩力を竭し國に報ゆる、固より今日に在り。且つ明軍は勝ちて驕る。與し易きのみ」と。三奉行之を促すこと甚だ急なり。乃ち退いて、未だ王城に至らざること三十里にして軍す。明軍進んで開城に入り、遂に臨津を渡る。查大受、其の先鋒と爲り、宗茂に礪石嶺に値ふ。宗茂撃つて之を破り、百餘人を斬る。如松乃ち盡く其の軍を引いて至る。隆景三萬人を以て碧蹄館に邀撃し、大戰すること良久し。宗茂、秀包と、横に之を撃つ。如松、初め火器を以て平壤を襲ひ、一戦して志を得、謂へらく「和兵復畏るゝに足らず」と。乃ち輕しく進んで、銃礮を具へず、短兵を以て接戦す。我が軍は兵銳く刃利し。縱横に揮ひ撃ち、人馬皆倒る。敢て其の鋒に當る莫し。我が兵の呼聲天を動し、遂に大に明軍を破り、斬首一萬、殆んど如松を獲んとす。北ぐるを追うて臨津に至り、明兵を江に擠す。江水之が爲めに流れず。如松、痛哭して夜を徹す。敗軍を聚め、退いて坡州に入る。韓の將相其の再び進むを請ふ。肯せず。是の時明軍は勝ちに勢づいて、大鼓を打ち鳴らして東へ進んだ。國都に居つた大將や軍吏は大同以東

の諸城をして守を解いて國都に來り集る様に命令を發した。從つて諸城の軍は皆命令に従つた。たゞ小早川隆景は毛利秀包や立花宗茂と共にその命令を肯かないで曰ふには「吾が輩が力を竭して國の爲めに報いるのは、もとより今日のやうな場合に於てなされるべきだ。それに明の軍勢は勝つて心驕りたかぶつて居る。相手にし易い。自分はこの際退軍などするものか」と。三奉行がきびしく撤退を促した。仕方なく退いて未だ王城まで達しない、其の手前三十里の所に軍を止めた。明軍は進んで開城に入り、遂に臨津を渡つた。查大受が其の先鋒となつて進み、宗茂の軍と礪石嶺で出會つた。宗茂は之を撃破して百人餘りの明兵を斬り捨てた。そこで如松は其の軍全部をつれてやつて來た。隆景は三萬人を率ゐて碧蹄館で迎へ撃ち、稍々久しく大に戦つた。宗茂と秀包とは側面から敵を撃つた。如松は初め銃砲などの火器を以て平壤を攻め、一戦して勝利を博したので、思ふには「日本兵は格別畏れるにも當らない」と。そこで今度は輕卒に進み、鐵砲や大砲を具へなかつた。刀や槍を持つて、間近く押寄せ、戦ふのであつた。併し我が軍は兵は鋭く、刃は實に切れ味がよい。縦横に揮ひ撃つと、人も馬も皆倒れた。我が軍の銳鋒に當つて來ようとするものもなかつた。我が兵の勇敢な掛聲は天も震ふばかりに轟き渡つて、遂に大江に至り、明兵を其の河の中へ押し落した。河の水は之が爲めに流を遮ぎられる位であつた。如松は非常に泣き悲しんで夜を明した。敗軍を引きまゝとめて坡州に退いた。韓の大將や大臣連がもう一度進んで呉れと願つた。併し承知しなかつた。

三奉行(石田三成、堀田) ○礪石嶺・碧蹄館・坡州(京畿)

時天雨冰釋。如松託言坡州多泥不可爲營遂退入東坡。二月、猶雨、明馬多病斃。我兵縱火而進。如松退入開城遣人還明稱疾請代。而韓人寇我者不衰。我兵在幸州者、亦爲韓將權慄所敗。秀家等乃使使召清正。清正平橘中寇、斬首虜三千餘級。與直茂、賴定、皆之都城。明兵相驚曰「清正自北道繞襲平壤、扼我歸路。」如松大懼、留諸將守臨津、而自退入平壤。

訓讀 時に天雨ふり氷釋く。如松、坡州は泥多く、營を爲すべからずと託言し、遂に退いて東坡に入る。二月、猶ほ雨ふり、明の馬多く病んで斃る。我が兵、火を縱つて進む。如松、退いて開城に入り、人を遣はして明に還らしめ、疾と稱して代を請ふ。而るに韓人の我に寇する者衰へず。我が兵幸州に在る者、亦韓將權慄の敗る所となる。秀家等乃ち使をして清正を召さしむ。清正、橘中の寇を平ぐ。斬首虜三千餘級。直茂・賴定と、皆都城に之く。明兵相驚いて曰く「清正、北道より繞つて平壤を襲ひ、我が歸路を扼す」と。如松、大に懼れ、諸將を留めて臨津を守らしめ、而して自ら退いて平壤に入る。

通釋 其の時、雨が降つて氷が釋けた。如松は坡州は泥沼が多く、陣屋を築くことが出来ないとかこつけ、遂に退いて東坡に入った。二月になつてもやはり雨が續き、明の馬は随分病死した。我が兵は火をつけて敵の陣地を焼きながら進んだ。如松は退いて開城に遁げ込み、人を遣はして明に還らしめ、病氣だと言ひ立て代理する人を差し廻すように請はしめた。然るに韓人の我に仇するものは、少しも衰へなかつた。我が兵で幸州に在つた者

も亦韓將權慄に敗られた。秀家等はそこで使をやつて清正を召し寄せさせた。折から清正は橋中の賊を平げた。首を斬ること三千餘。大勝利で直茂・頼定などと一緒に皆都城に向つた。明兵共は相驚いて曰ふには「清正は北道から廻つて平壤を襲ひ、我々の歸り路をおさへふせぐのだ」と。如松は大に懼れをなし、諸將を留めて臨津を守らせ、自分は退いて平壤に逃げ込んだ。

【諸將】 東坡(京畿) ○辛州(忠清)

秀吉使毛利秀元・加藤光泰・細川忠興等、七將赴援。三月、攻晉州。晉州城險。韓王之奔、置其重器、以精兵二萬守之。七將皆大敗、退入都城。都城傍有龍山倉。我兵仰食焉。查大受李如梅、潛兵火倉。而金命元等軍臨津南、絶我糧道。已而我與明軍皆大疫。三奉行以糧竭欲退守釜山。光泰曰「糧竭寧食砂。國都不可棄也。清正亦爭之曰「吾以孤軍破強胡數萬。明韓兵何足爲意。何不奪其糧。三成曰「公宜往奪。不得取助於人。清正曰「諾。即夜、以手兵襲明軍、奪糧而還。」

【訓讀】 秀吉、毛利秀元・加藤光泰・細川忠興等の七將をして赴き援けしむ。三月、晉州を攻む。晉州の城は險なり。韓王の奔るや、其の重器を置き、精兵二萬を以て之を守らしむ。七將皆大に敗れ、退いて都城に入る。都城の傍に龍山倉あり。我が兵、食を仰ぐ。查大受・李如梅、兵を潛めて倉を火く。而して金命元等、臨津の南に軍

し。我が糧道を絶つ。已にして我れ明軍と皆大に疫す。三奉行、糧竭くるを以て、退いて釜山を守らんと欲す。光泰曰く「糧竭くれば、寧ろ砂を食はん。國都は棄つ可からざるなり」と。清正も亦之を争うて曰く「吾れ孤軍を以て強胡數萬を破る。明韓の兵、何ぞ意と爲すに足らん。何ぞ其の糧を奪はざる」と。三成曰く「公宜しく往いて奪ふべし。助を人に取るを得ず」と。清正曰く「諾」と。即夜、手兵を以て明軍を襲ひ、糧を奪つて還る。

【通釋】 秀吉は毛利秀元・加藤光泰・細川忠興などの七人の大將をやつて赴き援けさせた。三月、晉州を攻めた。晉州城は元來險固であつた。前に韓王が逃げ出す時に其の大切な器を藏ひ込んで、精兵二萬人を以て之を守らせたのである。七將は皆大敗北して、退いて都城に入った。都城の傍には龍山倉といふ米倉があつた。我が兵は此處から兵糧の供給を仰いで居たのである。すると查大受・李如梅は兵を潜めて倉に火をつけて焼いてしまつた。そして金命元等は臨津の南に陣取り、我が軍の糧道を絶ち切つた。さうかうして居る内に我が軍も明の軍も大いに疫病の流行に悩まされた。三人の奉行等は兵糧が無くなつたので、退いて釜山を守らうと思つた。光泰が曰ふのに「兵糧が無くなつたら寧ろ砂でも食はう。決して國都を抛棄してはならない」と。清正も亦反對して言ふには「自分は孤立無援の軍隊を以て強い胡ども數萬を破つたのだ。明韓の兵は實際恐るゝに足りない。なぜ敵の兵糧を奪ひ取らないのだ」と。すると三成が曰ふのに「それでは貴公が出發して取つて來たら宜いだらう。併し人に助勢を請うてはならぬぞ」と。清正が曰ふには「いかにも承知した」と。其の夜すぐ手勢をつれて明軍を襲ひ、兵糧を奪つて返つて來た。

時如松使沈惟敬計和。惟敬赴北京。報曰「秀吉欲封日本國王。如足利氏故事耳。」因

與石星定議來韓都城厚賂行長曰太閤歸韓俘則割慶尙全羅忠清三道封爲王
 行長等素不學不諳封王故事以爲王於明之謂也欲許之已而知其非惟敬巧彌
 縫之清正不可其議行長與三奉行皆懷歸乃報秀吉曰明人欲尊殿下爲皇帝秀
 吉即許和惟敬請解都城兵諸將乃焚城更殿而東如松乃肯進韓相柳成龍請尾
 擊之乃遣李如栢等萬餘人觀我陣整不致逼諸將至慶尙起蔚山東萊金海巨濟
 等十八屯以埃秀吉令明主以孫鑛代宋應昌遣劉綎吳惟忠等分守星州居昌諸
 城而使謝用梓沈一貫沈惟敬來謁秀吉于行營秀吉饗明使者還之遣小西如安
 與偕放還清正所俘二王子大臣以下以大友義統不救行長罰奪其封遂令在韓
 諸將屠晉州以償前敗

訓 時に如松、沈惟敬をして和を計らしむ。惟敬、北京に赴き、報じて曰く「秀吉、日本國王に封する、足利氏の故事の如きを欲するのみ」と。因つて石星と議を定め、韓の都城に來り、厚く行長に賂ひて曰く「太閤、韓の俘を歸さば、則ち慶尙、全羅、忠清の三道を割き、封じて王と爲さん」と。行長等素より不學、封王の故事を諳んぜず。以爲へらく「明に王たるの謂なり」と。之を許さんと欲す。已にして其の非を知る。惟敬、巧に之を解

縫す。清正其の議を可かず。行長、三奉行と、皆歸るを懷ひ、乃ち秀吉に報じて曰く「明人、殿下を尊んで皇帝と爲さんと欲す」と。秀吉即ち和を許す。惟敬、都城の兵を解かんと請ふ。諸將乃ち城を焚き、更々殿して東す。如松乃ち肯て進む。韓相柳成龍、之を尾撃せんと請ふ。乃ち李如栢等萬餘人を遣はし、我が陣の整ふを觀て、敢て迫らず。諸將、慶尙に至る。蔚山・東萊・金海・巨濟の十八屯を起して、以て秀吉の令を埃つ。明主、孫鑛を以て宋應昌に代らしめ、劉綎・吳惟忠等を遣はし、分つて星州・居昌の諸城を守らしめ、而して謝用梓・沈一貫・沈惟敬をして、來つて秀吉に行營に謁せしむ。秀吉、明の使者を饗して之を還し、小西如安を遣はして與に偕にし、清正の俘ふる所の二王子大臣以下を放還せしむ。大友義統、行長を救はざりしを以て、罰して其の封を奪ひ、遂に在韓諸將をして、晉州を屠つて以て前敗を償はしむ。

通 其の時、如松は沈惟敬に和睦のことを計らせた。惟敬は北京に行つて報告して曰ふには「秀吉は足利氏の先例のやうに、日本國王に封じて貰ひ度いと、思つて居るのです」と。そこで石星と相談をきめ、韓の都城に來て行長に澤山の賄賂を贈つて曰ふには「豊太閤が韓の捕虜を返して下さるなら、慶尙・全羅・忠清の三道を差し上げて王様に封じませう」と。行長等は元來一片の武將にすぎないので深い學問は無く、王に封するといふ故事など知つてゐない。王に封するとは、つまり明の王様になることだと思ひ込んだ。だから惟敬の言を承諾しようと思つた。その内に其の誤りを悟つた。惟敬は上手に程よく、そこを取り繕つて居た。清正は何としても、其の議を聞入れようとはしなかつた。行長と三人の奉行とは皆日本に歸りたくなり、秀吉に報じて曰ふには「明の者共は殿下を尊んで、皇帝に戴かうと欲して居ります」と。秀吉は早速和睦することを許した。惟敬は都城の兵を解除せられんことを願つた。そこで諸將は城を燒いて、更るゝ後詰めになつて東に向つた。そこで、如松は肯

へて進出して来た。韓相の柳成龍が日本軍の背後から攻撃したいと申し出た。そこで李如栢等一萬餘人を遣はして見たが、我が陣立の立派に整つて居るのを見て強ひて逼らうともしなかつた。諸將は慶尙道に着いた。蔚山・東萊・金海・巨濟などの十八個所の屯所をこしらへて、秀吉の命令の來るのを俟つた。明主は孫鏜を以て宋應昌に代らせ、劉綎・吳惟忠等を遣はして、分つて星州や居昌の諸城を守らせ、又謝用梓・沈一貫・沈惟敬などの使者をして、秀吉と那古耶の行營に於て謁見させた。秀吉は明の使者を御馳走して之を返し、小西如安を遣はし一緒に明に同行させ、清正が捕へた二王子大臣其他を放ちかへした。又大友義統は鳳山で行長を救はなかつたので、其の罰として領地を取り上げ、遂に在韓の諸將に命令して、晋州を屠り倒して、前の敗北を償ふやうに言ひ渡した。

金海・居昌(慶尙道) (其封前)

六月、諸將合兵圍晋州。城兵益熾。我軍填濠蒙竹楯仰攻。城上矢石如注。清正造龜甲車、牛革包之、載以死士、穿城足樓櫓崩折。清正與黑田長政先登。諸將繼之、斬城將徐禮元、金千鎰等、虜六萬餘人。夷城池而還。醜禮元首獻之行營、仍屯故地。韓王大驚、訴之明。李如松令沈惟敬來見、行長曰：「公等許和、未十日有晋州之事、何也？」行長怒曰：「汝請和而明兵入韓、者益衆、何也？」惟敬語塞。去至北京、請石星召還如松以下、獨留劉綎、吳惟忠等萬人。

六月、諸將兵を合せて晋州を圍む。城兵益々熾なり。我が軍、濠を填め、竹楯を蒙りて仰ぎ攻む。城上、矢石注ぐが如し。清正、龜甲車を造り、牛革もて之を包み、載するに死士を以てし、城足を穿つ。樓櫓崩折す。清正、黒田長政と先登す。諸將之に繼ぎ、城將徐禮元・金千鎰等を斬り、六萬餘人を虜にし、城池を夷げて還る。禮元の首を醜し、之を行營に獻じ、仍故地に屯す。韓王大に驚き、之を明に訴ふ。李如松、沈惟敬をして、來つて行長に見えしめて曰く「公等許和を許す。未だ十日ならざるに、晋州の事有るは何ぞや」と。行長怒つて曰く「汝、和を請うて、明兵の韓に入る者益々衆きは何ぞや」と。惟敬、語塞る。去つて北京に至り、石星に請ひ、如松以下を召還し、獨り劉綎・吳惟忠等萬人を留む。

六月、諸將は兵を一緒にして晋州を取り圍んだ。城中の兵は益々勢が盛であつた。我が軍は城の周圍の濠を埋め、竹製の楯を蒙りて、城の上に見て攻め寄せた。城の上から矢や石などが降り注ぐやうに飛んで來た。清正は堅い板を以て龜の甲に似せた車を作り、牛の皮でもつて此の車を覆ひ包み、それに決死隊の兵を載せ、城の根に穴を掘らせた。城の樓臺や物見櫓などが崩れ折れてしまつた。清正は黒田長政と共に先頭に立つて登つて行つた。諸將も之につゞき、城將徐禮元・金千鎰等を斬り捨て、六萬餘人を皆殺しにし、又城や濠を押し潰して平らな地面として引き返し、禮元の首を鹽漬にして秀吉の陣屋へ送り、相も變らず故の屯所に陣取つて居た。韓の王は非常に驚いて、之を明に訴へ知らせた。李如松は沈惟敬をして來つて行長と會見させて曰ふには「已に和睦を許された。まだ十日も経たぬ内に晋州の事件が勃發したのはどうしたわけか」と。行長は怒つて曰ふには「お前の方で先きに和睦を請ひながら、明兵の韓に入る者が益々多くなつて行くのは何ういふ理由だ」と。惟敬はさすがにグツと言ひ詰つた。去つて北京に歸り、石星に頼んで如松以下を召しかへし、只劉綎・吳惟忠等一萬人だけ

を留めることにした。

明主疑如安不取納。舍之遼東。秀吉亦以如安久不還。意惟敬欺。己日夜謀議軍事。黑田孝高私語同僚曰。吾聞外征諸將有威無恩。所過無不殘滅。夷民逃匿。野毋青草。是得其地。果何益哉。且聞兩先鋒爭功相鬪。法令牴牾。衆莫知所從。而浮田宰相不能制之。夫浮田非統御之才也。能堪此任者。非德川則前田。若孝高而已。秀吉側聽而首肯之。已而大召諸將會議。行臺曰。朝鮮之事。如今日狀。則何時定乎。乃公不可不自往也。吾留家康使守吾邦。無復所顧慮焉。今舉國內兵。雖少猶可得三十萬。因顧諸將曰。利家汝將五萬。曰。氏郷汝亦將五萬。吾親將十五萬。爲中軍。左右汝二人。掃蕩朝鮮。直入于明。疾具兵艦。吾意決矣。

訓 明主、如安を疑ひ、敢て納れず。之を遼東に舍す。秀吉も亦如安久しく還らざるを以て、惟敬、己を欺くと意ひ、日夜軍事を謀議す。黒田孝高私に同僚に語つて曰く「吾れ聞く、外征の諸將、威有つて恩無く、過ぐる所殘滅せざる無く、夷民逃匿し、野に青草母しと。是れ其の地を得るも、果して何の益ぞや。且つ聞く、兩先鋒、功を争ひて相鬪き、法令牴牾し、衆、從ふ所を知る莫し。而して浮田宰相、之を制する能はずと。夫れ浮田は、

統御の才に非ざるなり。能く此の任に堪ふる者は、徳川に非ざれば、則ち前田、若しくは孝高のみ」と。秀吉、側聽して之を首肯す。己にして大に諸將を召し、行臺に會議す。曰く「朝鮮の事、今日の狀の如くば、則ち何れの時にか定まらん。乃公自ら往かざる可からず。吾れ家康を留めて吾が邦を守らしめば、復顧慮する所無けん。今、國內の兵を擧ぐれば、少しと雖も、猶ほ三十萬を得べし」と。因つて諸將を顧みて曰く「利家、汝五萬に將たれ。曰く氏郷、汝も五萬に將たれ。吾れ親ら十五萬に將として中軍と爲り、汝二人を左右にし朝鮮を掃蕩し、直に明に入らん。疾く兵艦を具へよ。吾が意決せり」と。

通釋 明主は如安を疑つて敢て聞き納れようとしなかつた。之を遼東に留めて置いた。秀吉も亦如安が長く歸らないので、惟敬が自分を欺したのだと悟り、日夜軍事を謀つて、相談に耽つた。黒田孝高は私に同役の者と語つて曰ふには「外征の諸將は武威はあるが、恩顧を施すこと更に無く、攻め行く所は皆そこなひ滅すことばかりなので夷の民は逃げ匿れ、野山も青草がないほどに荒れ果ててしまつたと聞いて居る。これでは其の土地を取つたとして何の利益にもならない。尙ほ聞く所に依れば清正・行長の兩先鋒が功を争つて互ひに鬪き合ひ、軍事の法令は相違つて人々從ふ所を知らない。そして浮田宰相は之を制御することが出来ないのださうだ。元來浮田氏は人を統べ抑へる才能は乏しい人だ。能く此の任に務め堪へることの出来る者は徳川公でなければ前田氏だ。或ひは斯く申す自分位ひのものだ」と。秀吉はそれとなく聽き知つて、成程さうかと肯いた。其の内に秀吉は大に諸將を召し集め、假本營に會議を開いた。秀吉は曰ふのに「朝鮮征伐の事が、今日のやうな状態ならば、結局何時になつたら收まることだらう。斯くなる上は余自ら乗り出さずばなるまい。余は家康を留めて我が國を守らしめて置けば、あとの心配は更でない。今國中の兵隊を全部募つたら、少くとも、猶ほ三十萬は得られるだらう」と。

因つて諸將を顧みて曰ふには「利家、お主は五萬人に大將となれ」と。又曰ふのに「氏郷、お主も又五萬人に大將となれ。余は自ら十五萬人に將となつて中央部隊を率ゐ、お主等二人を左右兩翼として、朝鮮を綺麗さつぱり薙ぎ掃つて眞直に明に攻め入らう。早く軍隊輸送の船を具へる。余の決心は定まつたぞ」と。

德川公弗憚謂利家氏郷曰「二公擢于群中。榮執大焉。僕少小事弓馬。今雖老矣。猶足以當一面。何居守爲。二公幸推轂之。彈正少弼進曰。德川公勿復言。臣視殿下近狀。彼爲野狐所憑。爾秀吉佛然扣刀而踞曰。吾爲狐憑。有說乎。無說則死。少弼對曰。有說也。饒使無說。臣固不辭死。且如臣等頭。雖到十百。何足惜乎。顧天下纔定。瘡痕未愈。人人希休息無爲。而殿下乃興無故之軍。以殘暴異域。使我父子兄弟暴骸骨於海外。哭泣之聲四聞。加之漕轉賦役之相因。所在盡爲荒野。當是之時。殿下一舉趾。則六十州之寇賊雷動風起。雖有德川公。安得鎮定之乎。是其所以願外征。爾。臣恐殿下舟師未達釜山。而根本之地。已爲他人所據。是勢之最易觀者。使殿下有平昔之心。豈有不察於此。不察於此。故謂之狐憑耳。鄙語曰。『鼈欲啖人。反啖於人。』殿下之謂也。」

下之謂也。

德川公憚ばす。利家・氏郷に謂つて曰く「二公群中に擢んでらる。榮執か焉より大なる。僕、少小より弓馬を事とす。今老いたり。雖も、猶ほ以て一面に當るに足る。何ぞ居守を爲さん。二公、幸に之を推轂せよ」と。彈正少弼進んで曰く「德川公、復言ふこと勿れ。臣、殿下の近狀を視るに、彼れ野狐の憑る所と爲りしのみ」と。秀吉、佛然として刀を叩へて跪いて曰く「吾れを狐憑となすは、説有るか。説無ければ則ち死せん」と。少弼對へて曰く「説有るなり。饒使説なきも臣固より死を辭せず。且つ臣等の頭の如きは、十百を到ると雖も、何ぞ惜むに足らんや。願ふに天下纔に定り、瘡痕未だ愈えず。人人、休息無爲を希ふ。而るに殿下は乃ち故なきの軍を興し、以て異域を殘暴し、我が父子兄弟をして骸骨を海外に暴さしむ。哭泣の聲四もに聞ゆ。之に加ふるに漕轉賦役の相因る、所在盡く荒野となる。是の時に當り殿下一たび趾を擧ぐれば、則ち六十州の寇賊、雷動風起せん。德川公有りと雖も、安んぞ之を鎮定するを得んや。是れ其の外征を願ふ所以のみ。臣恐る、殿下の舟師未だ釜山に達せずして、根本の地、已に他人の據る所と爲らん。是れ勢之最も觀易き者。殿下をして平昔の心有らしめば、豈に此に察せざる有らん。此に察せず、故に、之を狐憑と謂ふのみ。鄙語に曰く『鼈人を啖はんと欲し、反つて人に啖はる』と。殿下の謂なり」と。

德川家康は之を喜ばなかつた。利家・氏郷に向つていふには「お二人は大勢の中から抜き出されなすつた。誠に面目此の上もござらぬ。併し拙者とても弱年より弓馬を業とする士である。今年を取つたと言へ、猶ほ一面を引き受けて戦ふことは出来る。どうしてこちらに留まつて守つて居るやうなことを致さうや。御兩所に

は何卒取り持つて、出陣出来るやうに計つて下されよ」と。すると彈正少弼(淺野長政)が進み出て曰ふには「徳川殿、もう何もお言ひ召さるな。拙者が此の頃の殿下の御様子を見ると、どうも殿下は狐にでもつかれてゐられるやうです」と。秀吉はサツト顔色を變へて怒り、おつ取り刀で膝頭をついて曰ふには「乃公が狐につかれたとは何んといふ譯か。若しその譯がなければ討ち首だぞ」と。少弼は答へて曰ふには「無論譯がございます。よし言譯が出来ないにしても、私は固より死を惜しむものでは御座いませぬ。それに私共の首などは、十や百切つた所で何の惜しいことがありませう。さて思ふに、今、天下はやつと平定したばかりで、人民の傷手もまだ全治しませぬ。人々は只只休息して事なからんことをのみ希つて居る状態です。然るに殿下は却つて理由のない軍をおこして外國を荒し廻り、我が國の父子兄弟をして骸骨を海外に曝らさしめておいでになる。今その泣き叫ぶ歎きの聲は四方八方に起つてゐます。おまけに運漕のこと、租税とが一緒になつて割當てられたので、至る所盡く荒野と變り果てました。此の際、殿下が一度足をあげて朝鮮へお出掛けなられたら、日本六十州の一揆は雷の如く動き風の起る様に吹き捲つて騒動することです。たとひ徳川公が居残つてをられても、どうして之を鎮めおさへることが出来ませうや。さればこそ徳川公も外征を願はれるわけ合ひのものです。私は恐れるのであります。殿下の軍勢がまだ釜山にも達せられない内に根據地日本が已に他人の手に奪はれて終ひませう。是は最も見易い天下の大勢で、若し殿下をして昔のやうな心持がおりなさらば、どうしてこの位のことを見抜かれないことはない筈です。之を察しないから狐につかれたと申し上げたまで、ございます。俗間の諺に『鼯が人を食はうとて、却つて人に食はれて終ふ』と申してゐます。此はとりもなほさず殿下のことを申すので御座います」と。

推輓(あとより押し、前より曳く。)

秀吉益々怒曰「狐乎、鼯乎、吾且舍諸以臣罵君、不可舍也。將拔刀斬之。利家氏郷進擁之曰「臣等在此。苟欲行誅戮、不必勞親手。因斜睨少弼曰「可去矣。少弼乃徐起還舍。待罪數日。有上變事者、肥後、賊梅北、舉兵取佐敷城。秀吉大驚、急召少弼、謝曰「吾甚慚於汝也。命汝兒幸長爲大將、往定肥後。因命徳川公以其將本多忠勝助之。未發、肥後人斬梅北來獻。乃止。命少弼按定其國、滅韓成卒。」

秀吉益々怒つて曰く「狐か、鼯か、吾れ且く諸を舍く。臣を以て君を罵る、舍す可からざるなり」と。將に刀を抜いて之を斬らんとす。利家・氏郷、進んで之を擁して曰く「臣等此に在り。苟も誅戮を行はんと欲せば、必ずしも親手を勞せず」と。因つて少弼を斜睨して曰く「去る可し」と。少弼乃ち徐に起つて舍に還る。罪を待つこと數日。變事を上る者あり、肥後の賊梅北、兵を擧げて佐敷城を取ると。秀吉、大に驚き、急に少弼を召し、謝して曰く「吾れ甚だ汝に慚づるなり。汝の兒幸長に命じて大將と爲し、往いて肥後を定めしめん」と。因つて徳川公に命じ、其の將本多忠勝を以て之を助けしむ。未だ發せず。肥後の人梅北を斬つて來り獻す。乃ち止む。少弼に命じて其の國を按定せしめ、韓の成卒を滅す。

通釋

秀吉は益々怒つて曰ふには「狐であらうが、それは暫らく論じない。兎にも角にも臣

下の身分を以て主君を罵ることは差し許すこと罷りならぬ」と。すんでのことに抜刀して之を斬らうとした。利家と氏郷は進み寄つて秀吉を抱き止めて曰ふには「私共がこゝに居ります。若し本統に殺すと思召しますならば、必ずしもお手づからなさらずともよろしうございませう」と。そこで少弼を横に睨みつけて曰ふは「そこを去れ」と。そこで少弼は静かに起ち上つて陣屋に返つて行つた。少弼は數日罪を待つてゐた。肥後の賊、梅北といふ者が兵を擧げて佐敷城を取つたといふ變事を報するものがあつた。秀吉は大層驚き、急に少弼を召し呼んで謝まつて曰ふには「余は甚だお前に恥入る。お前の倅幸長に命じて、大將となし肥後を鎮定に遣はすであらう」と。因つて徳川公家康に命令して徳川公の大將本多忠勝をして之を助けさせた。まだ出發しなかつた。肥後の人が梅北の首を斬り、獻上して來た。そこで此の軍の出立は中止した。少弼に命じて肥後を安んじ定めさせ、又韓の守備兵も減らすことにした。

佐敷城(肥後)

八月、淺井氏復生男秀吉大喜、使前田利家攝軍事、而自歸大阪。命所生男幼字棄丸、長曰秀頼、韓王乃敢歸都城。清正喪其俘、心甚不懌。又知和議必不成、十一月進攻安康、大破之。虜尤畏清正、呼曰鬼上官。時韓野多尸、虎豹群至。我將士留戍者因大獵之、殺獲無數。其尤大者以獻焉。三年正月、大城于伏見、興卒二十五萬人。將帥萬石以上皆助役。三月、秀吉與秀次及徳川前田諸將遊吉野。四月、浴有馬溫泉。是年、加藤光泰卒。初石田三成以韓都之議不合、隙光泰甚深、遂毒之也。嗣子貞泰猶幼。徙邑美濃、以甲斐賜淺野氏。

訓 八月、淺井氏復生男を生まむ。秀吉大に喜び、前田利家をして軍事を攝せしめ、而して自ら大阪に歸る。生む所の男に幼字を棄丸と命じ、長じて秀頼と曰はしむ。韓王乃ち敢て都城に歸る。清正其の俘を喪ひ心甚だ懌ばす。又和議の必ず成らざるを知り、十一月、進んで安康を攻め、大に之を破る。虜尤も清正を畏れ、呼んで鬼上官と曰ふ。時に韓の野に尸多く、虎豹群り至る。我が將士の留戍する者、因つて大に之を獵し、殺獲無數なり。其の尤も大なる者を檻し以て獻す。三年正月、大に伏見に城き、卒二十五萬人を興す。將帥の萬石以上は皆役を助く。三月、秀吉、秀次及び徳川前田の諸將と吉野に遊び、四月、有馬の溫泉に浴す。是の年、加藤光泰卒す。初め石田三成、韓都の議合はざるを以て、光泰と隙する甚だ深く、遂に之を毒するなり。嗣子貞泰猶幼し。邑を美濃に徙し、甲斐を以て淺野氏に賜ふ。

通 八月、秀吉の寵妾淺井氏はまた男の子を産んだ。秀吉は大に喜んで、前田利家をして軍事を代理させて自分は大阪に歸つた。そして産れた所の其の男の子に幼名を棄丸と名附け、成長後は秀頼と呼ばせた。韓の王は和議の成るのを信じて、強ひて都城に歸つた。清正は先に捕へた二王子と大臣を放免したので心中甚だ面白くなかつた。又和睦のことは成立しないものと知つたので、十一月に、進んで安康を攻めて大に之を破つた。朝鮮

人は中でも清正を一番畏れて、鬼上官と呼んでゐた。其の頃朝鮮の野には死骸が澤山ころがって居たので、虎や豹が群れ集まつて来た。韓に留り守つて居た日本の將卒は、此の虎や豹を澤山獲つて、殺したり生捕つたり、殆んど無数であつた。そして其の内一番大きな奴を檻に入れて秀吉に献上した。三年の正月、大々的に伏見に城を築き、人夫は二十五萬人を使つた。一萬石以上の封地を持つて居る大名には皆工事に助勢させた。三月、秀吉は秀次や徳川・前田の諸將と一緒に吉野山に遊び、四月には有馬温泉に入浴した。この年加藤光泰が死んだ。初め石田三成は、韓の國都に於て議論が合はなかつたので、随分光泰と不仲になつてゐたが、遂に之を毒殺して終つたのである。其の嗣子貞泰はまだ幼少であつた。其の封邑を美濃國に移し、甲斐は淺野氏に賜はるることとなつた。

當是時韓成未撤韓王數促明定和十月明主召如安石星命沿道供帳十二月至燕星就拜於其館待以王公禮厚賂之使曲成其媾如安諾之居數日明主延見之如安騎而入至闕衛士呵下之如安昂然不下入見明主明主令諸將相大臣會于左闕悉問秀吉意如安所答勉副星意明乃定封王議遣正使李宗誠副使楊方亨以沈惟敬爲導惟敬缺望且難星曰前約七事今止封冊事必不成星弗聽如安與三使皆發

訓 是の時に當り、韓の成未だ撤せず。韓王、數々明を促して和を定む。十月、明主、如安を召す。石星、沿道に命じて供帳せしむ。十二月、燕に至る。星就いて其の館に拜し、待つに王公の禮を以てし、厚く之に賂ひ、曲げて其の媾を成さしむ。如安之を諾す。居ること數日、明主之を延見す。如安騎して入り、闕に至る。衛士呵して之を下す。如安昂然として下らず。入つて明主を見る。明主、諸將相大臣をして左闕に會せしめ、悉く秀吉の意を問ふ。如安答ふる所、勉めて星の意に副ふ。明乃ち封王の議を定め、正使李宗誠、副使楊方亨を遣はし、沈惟敬を以て導と爲す。惟敬、缺望し且つ星を難じて曰く「前に七事を約す。今封冊に止めば、事なす成らざらん」と。星聽かず。如安三使と皆發す。

通釋 此の當時、韓の守備はまだ撤しなかつた。韓王は何度も明國に催促して、和睦が早く成立するやうにして戴き度いと願つた。十月、明主は遼東に留めて置いて如安を呼び戻した。石星は道筋に命じて充分に接待させた。十二月、北京に到着した。石星はわざ／＼出掛けて其の旅館で面會し、王公に對する禮儀を以て待遇したり、澤山の賄賂を贈つたりして、無理にも和睦が成り立つ様に頼んだ。如安は之を承諾した。數日待つて居ると、明主がいよく面會することになつた。如安は馬に乗つて宮門を入つた。門番の役人は叱りつけて馬から降りした。如安は鼻高々と威張つて降りようとはしなかつた。そのまゝ通りすぎて、遂に御殿に入つて明主に面會した。明主は將軍や宰相や大官連を左闕に召し集めて、いよく秀吉の意中を問ひ聞かした。如安は出来る丈け石星の思惑に副ふ様に答へた。そこで明は王に封するといふ相談を決定して、正使李宗誠、副使楊方亨を派遣し、又沈惟敬を案内役とするに決した。すると惟敬は之を満足に思ひ、且つ石星を非難して曰ふには「前には七ヶ條を約束した。今封王の一事だけでは、此の談判はきつと成立しないだらう」と。併し石星は言ふことを

聞かなかつた。如安は三人の使者と共に發足した。
語釋 七事(俘を歸すこと。地を割くこと。入貢すること。)

四年二月、蒲生氏郷卒。幼子秀行嗣。尋徙之下野、以會津封上杉景勝。三月、伏見城成。秀吉徙居、以畷、明使者置淺井氏于淀。世呼淀君。淀君既生秀頼、而秀次無避位之意。以故秀吉城伏見、欲以讓秀次、而予秀頼以大阪也。秀次爲人頑放、其留守聚樂、淫虐日甚。漁色、不論貴賤。右大臣晴季、女新寡、而有孤女。秀次并取母子、嬖之上皇崩而數日、出獵、手刃近臣、夜出、戕行人、自櫓上、銃人爲戲、至欲剖孕婦。世呼曰殺生關白。以殺生、與攝政音相近也。田中吉政爲其傳、數諫之。乃託事遠吉政。

訓讀 四年二月、蒲生氏郷、卒す。幼子秀行嗣ぐ。尋いで之を下野に徙し、會津を以て上杉景勝を封す。三月、伏見城成る。秀吉徙り居り、以て、明の使者を俵つ。淺井氏を淀に置く。世、淀君と呼ぶ。淀君既に秀頼を生む。而して秀次位を避くるの意無し。故を以て秀吉伏見に城き、以て秀次に譲り而して秀頼に予ふるに大阪を以てせんと欲するなり。秀次人と爲り頑放、其の聚樂に留守するや、淫虐日に甚だし。色を漁するに貴賤を論ぜず。右大臣晴季の女、新に寡となりて孤女有り。秀次、母子を并せ取りて之を嬖す。上皇崩じて數日なるに、出で、獵し手づから近臣を刃し、夜出で、行人を戕し、櫓上より人を銃して、戲し、至るに欲するに、

世呼んで殺生關白と曰ふ。殺生と攝政と、音相近きを以てなり。田中吉政、其の傳たり。數々之を諫む。乃ち事に託して吉政を遠ざく。

通釋 四年の二月、蒲生氏郷が死んだ。まだ年齒のゆかない秀行が嗣いだ。間もなく之を下野に國替へし、會津には上杉景勝を封じた。三月伏見城が落成した。秀吉はこゝに移り住み、そして明の使者を待つて居た。淺井氏を淀に住ませた。世間の人は之を淀君と呼んだ。淀君は既に秀頼を産んだ。而るに秀次には位を避ける意志がなかつた。そこで秀吉は伏見の城を築いて之を秀次に譲り、そして秀頼には大阪城を興へようと思つたのである。元來秀次の人物といふものは我儘でだらしがなく、聚樂第に留守して居た時などは、色に耽り人を虐げることと日増しに甚だしくなつた。女色を漁る時は身分の貴い賤いなどは考へて居らなかつた。右大臣晴季の娘が其の頃夫に死なれて寡婦となり、一人の娘の子があつた。秀次は此の母子を一緒に召して妾とし寵愛した。正親町上皇がお崩れになつた時でも、五六日も立たぬ内に狩に出かけ、その上、手づから近臣を殺したり、夜は邸を抜けて通行人を斬つたり、又物見櫓の上から鐵砲で人を撃ち殺してなぐさみとしたり、遂には孕み女の腹を剖いて見度いといふまでに至つた。それで世間では殺生關白と綽名するやうになつた。つまり殺生と攝政とは音が相似て居るからであつた。田中吉政は秀次のお守役であつた。度々之を諫めた。そこで何とか事にかこつけて吉政を遠ざけて終つた。

語釋 上皇(正親町天皇、文祿二年崩御。)

秀吉之再赴行營也、外議以爲秀次當代行、而殊無行意。黑田孝高說之曰、殿下之

いづれも皆聞き納れなかつた。そうかうして居る内に、關白秀次が謀叛をするといふ噂が立つた。秀吉は之を捨てて置いた。秀頼が産れると、秀次は後嗣を廢されるのではないかと疑つて、益々不安に思つて居た。石田三成・増田長盛は秀次と仲が悪かつた。秀吉のお氣に入らうと思つて、度々秀次を讒言した。

外議(一般の) ○相撃(出入多き故故と)

初常陸介木村重茲、有寵於秀吉、而爲三成奪其寵、乃結於秀次。秀次自知取怨多也、每出遊、輒具鎧仗、又厚贈諸侯伯而與之誓。三成、長盛、因證其有反形。七月、秀吉使三成、長盛及前田玄以就詰問之。秀次大駭、獻誓書七通。秀吉意稍解。翌夜、重茲乘婦人車入聚樂、盡漏而出。三成偵知、以告比曉。秀次促德川氏、嗣子使朝參、欲因劫爲質。嗣子走歸、伏見。毛利氏亦獻秀次所擬誓書。秀吉大怒、使使召秀次。秀次愛將吉田修理、請假萬人、夜襲伏見。弗聽。遂赴謁。不許見。命放之高野、附僧興山監守焉。興山南征時、首納款者也。於是奏請削秀次在身官爵、廢爲庶人。三成勸遂殺之。潛諷興山、促其自裁。秀吉遂遣福島正則、就賜死。然冀興山乞其命也。正則還、獻秀次首。秀吉愕然曰、山僧無情。三成請而梟之。京師併其妻兒、姬妾三十餘人皆斬之。

瘞之一坎、名曰畜生冢。

初め常陸介木村重茲、秀吉に寵有りしが、三成に其の寵を奪はる。乃ち秀次に結ぶ。秀次自ら怨を取ることを多きを知るや、出遊する毎に輒ち鎧仗を具へ、又厚く諸侯伯に贈つて之と誓ふ。三成、長盛、因つて其の反形有るを證す。七月、秀吉、三成、長盛及び前田玄以をして、就いて之を詰問せしむ。秀次大に駭き、誓書七通を獻す。秀吉、意稍解く。翌夜、重茲、婦人の車に乗つて聚樂に入り、漏を盡して出づ。三成偵知して告ぐ。曉くる比、秀次、德川氏の嗣子を促して、朝參せしめ、因つて劫して質と爲さんと欲す。嗣子、走つて伏見に歸る。毛利氏も亦、秀次の擬する所の誓書を獻す。秀吉、大に怒り、使をして秀次を召さしむ。秀次の愛將吉田修理、萬人を假り、夜、伏見を襲はんと請ふ。聽かず。遂に赴き謁す。見ゆるを許さず。命じて之を高野に放ち、僧興山に附し監守せしむ。興山は南征の時、首として款を納れし者なり。是に於て、奏請して、秀次在身の官爵を削り廢して庶人と爲す。三成遂に之を殺すを勸め、潛に興山に諷し、其の自裁を促す。秀吉遂に福島正則を遣はし、就いて死を賜はらしむ。然れども興山の其の命を乞ふを冀ふ。正則還り秀次の首を獻す。秀吉、愕然として曰く、「山僧無情」と。三成請うて之を京師に梟し、其の妻兒、姬妾三十餘人を併せて皆之を斬り、之を一坎に瘞め、名づけて畜生冢と曰ふ。

初め常陸介木村重茲は秀吉に寵せられて居たが、後に其の寵を三成に取られてしまつた。そこで秀次の方へ附くこととなつた。秀次は人に大分怨まれて居ることに氣が附いて、外に出て遊ぶ時にはいつも鎧や兵器を用意して守り、又諸大名に澤山物を贈つて、恩を施し、之と結托するのであつた。三成と長盛は之を利用して其

の謀叛の證據とした。七月、秀吉は三成、長盛及び前田玄以をやつて、詰り問はせた。秀次は非常に驚いて誓ひの書面七通を差出した。秀吉の心は少し解けた。然るに其の次の夜、重成は目立たぬ様に婦人の車に乗つて聚樂第に入り、真夜中になつて引き上げた。三成は忍びの者を放つて此の事を知り、秀吉に傳へた。夜明け頃になつて秀次は徳川氏の世嗣秀忠に催促して御殿に参上させ、そのまゝ脅しつけて人質に取らうとした。秀忠は走つて伏見に逃げ歸つた。すると毛利氏でも亦秀次から推しつけた誓書の下書きを差し出した。秀吉は非常に怒つて、使をやつて秀次を呼ばせた。秀次が日頃大事に目をかけて居た大將吉田修理は、一萬の軍勢を借りて、夜、伏見を襲撃しませうと願つて見た。秀次は許さなかつた。遂に出かけて秀吉にお目にかゝりに行つた。秀吉は對面を許さなかつた。秀吉は命令して高野山に追放し、僧侶の興山といふ者に預けて監督させた。此の興山といふのは、秀吉の紀州征伐の時に一番最初に内通したものであつた。そこで秀吉は朝廷に願つて、秀次の身に附いて居る、官位や爵を取り上げて、平民に落した。三成は遂に之を殺さんことをすゝめ、潛かに興山にさとして、秀次に自殺を催促させた。秀吉は遂に福島正則をやつて死を賜はらせた。併し秀吉の心の内では興山が命乞ひをするだらうと念じ願つて居た。正則は歸つて秀次の首を獻上した。秀吉は吃驚して、「さて、高野の坊主は無情なものだ」と嘆いた。三成は願つてその首を京都で曝しものにし、妻、子、妾三十餘人皆一緒に斬り殺して、一つの穴に埋め、畜生家と名附けた。

畜生家 畜生は禽獸をいふ。鄙み懸んでかく名づく。隋文帝が太子廣を罵つて畜生といつたことから人を罵るとき畜生といふ。

毀聚樂第、徙諸邸第于伏見、召賞吉政、分秀次、地予福島正則、以清洲、味良、木村、重成

以下、重成有遺腹子、曰重成。其母嘗乳養秀賴、以故秀吉召祿重成、任長門守、以隸於秀賴。三成既誅重成、遂誣伊達最上氏黨秀次、有匿名書、曰伊達最上欲分豐臣而霸。秀吉笑曰、是怨家所爲耳、乃皆釋之。淺野左京大夫、書記芹川藤助者、亡命歸三成。三成使僞作舊主通聚樂書上之、因發兵圍淺野氏。前田利家爲白其冤。秀吉捕鞠藤助、得實、乃還於淺野氏。磔之。先是大納言秀俊卒。秀俊亦昏暴、嘗觀蜻螟瀑命、左右自投于湫。左右與之俱沒、無嗣。國除、以郡山予增田長盛、以藤堂高虎爲今治城主。

聚樂を毀ち、諸邸第を伏見に徙し、召して吉政を賞し、秀次の地を分ち、福島正則に予ふるに清洲を以てし、木村重成以下を誅夷す。重成に遺腹の子有り、重成と曰ふ。其の母嘗て秀賴を乳養す。故を以て、秀吉召して重成に隸し、長門守に任じ、以て秀賴に隸す。三成、既に重成を誅し、遂に伊達、最上氏、秀次に黨すと誣ゆ。匿名の書有り、曰く「伊達、最上、豐臣を分つて霸たらんと欲す」と。秀吉笑つて曰く「是れ怨家の爲す所のみ」と。乃ち皆之を釋す。淺野左京大夫の書記芹川藤助といふ者、亡命して三成に歸す。三成、僞つて舊主聚樂に通ずる書を作らしめて之を上り、因つて兵を發して淺野氏を圍む。前田利家、爲めに其の冤を白す。秀吉、藤助を捕鞠して、實を得たり。乃ち淺野氏に還して、之を磔せしむ。是より先き、大納言秀俊卒す。秀俊も

亦昏暴、嘗て蜻螟の瀑を觀、左右に命じて、自ら湫に投ぜしむ。左右之と俱に没す。嗣なし。國除かる。郡山を以て増田長盛に予へ、藤堂高虎を以て今治の城主と爲す。

聚樂第は打ち毀し、他の邸宅は全部伏見に移し、元秀次のお守役であつた吉政を召し出してそれを褒めて秀次の所領であつた地を分ち與へ、福島正則には清洲を興へ、そして木村重茲以下、秀次の家來を殺して終つた。重茲には死後子供が生れ重成と言つた。其の母が前に秀頼に乳を與へたことがあつた。それ故秀吉は、重成を召し抱へて祿をやり、長門守に任命して、秀頼の部下につけた。三成は既に重茲を殺したが、遂に伊達・最上の兩氏も秀次に味方したと偽り告げた。偶々名前を隠した書附が出たが、それには「伊達・最上の二氏が、豊臣の地を分けて、天下に大將とならうとして居る」と書いてあつた。秀吉は之を見て笑つて曰ふには「これは伊達・最上に怨のある者の仕事だ」と。誰も咎めなかつた。淺野左京大夫の書記で芹川藤助といふ者は、國を逃れて三成の處へ來た。三成は此の者に、舊主の淺野が秀次と氣脈を通じた手紙を偽作させて、之を秀吉に奉り、因つて兵を發して淺野氏を取り圍んだ。前田利家は、淺野の爲めに其の無實の罪であることを申し立てた。秀吉は藤助を捕へて責め立て、實を吐かした。そこで藤助は淺野氏に返して磔の刑にかけさせた。是より先き、大納言秀俊が死んだ。秀俊も亦心暗く亂暴な性質であつた。或る時蜻螟の瀧を見に行つて、左右のお附きの者に命じて、自分から池に飛び込ませた。左右の近臣は秀俊と一緒に飛込んで溺死した。秀俊には後嗣が無かつた。所領は取り上げられた。郡山を増田長盛に與へ、藤堂高虎を今治城主とした。

蜻螟瀧(大和吉野山の山中にある) ○湫(壺) ○郡山(大) ○今治(豫)

當是時、明三使已入韓境、疑懼不敢進。請我撤兵。諸將不得已、約戍于釜山、未肯濟海。歸李宗誠、貴族子弟、日夜思歸。惟敬因欲逐而代之。慶長元年正月、小西行長歸告和成、惟敬私從之。以地圖、兵書、蟒服及燕代、良馬三百匹、獻秀吉而去。惟敬曰、「和成敗矣。秀吉、兵將來執我輩。」四月、宗誠遁去。楊方亨問計於惟敬。惟敬曰、「有兩語。汝慎記之。舉我大明奉承日本而已。明主遂以方亨爲正使。惟敬副之。多出金帛資惟敬。齎封冊促往。因令韓發使。韓以和議未固、依違不從。獨使黃慎、朴弘長從之。刻日發。」

是の時に當り、明の三使已に韓境に入り、疑懼して敢て進まず。我に兵を撤せんと請ふ。諸將已むことを得ず、戍を釜山に約し、未だ海を濟つて歸るを肯んぜず。李宗誠は貴族の子なり。日夜歸るを思ふ。惟敬因つて逐うて之に代らんと欲す。慶長元年正月、小西行長、歸つて和の成るを告ぐ。惟敬私に之に従ひ、地圖・兵書・蟒服及び燕代の良馬三百匹を以て、秀吉に獻じて去る。宗誠を怱れしめて曰く、「和敗れたり。秀吉の兵、將に來つて我が輩を執へんとす」と。四月、宗誠遁れ去る。楊方亨、計を惟敬に問ふ。惟敬曰く、「兩語有り。汝、慎んで之を記せよ。我が大明を擧げて、日本に奉承せんのみ」と。明主、遂に方亨を以て正使と爲し、惟敬を之に副とし、多く金帛を出して惟敬に資し、封冊を齎し促し往かしめ、因つて韓をして使を發せしむ。韓、和議未だ固からざるを以て、依違して從はず。獨り黃慎・朴弘長をして之に従はしめ、日を刻して發す。

是の時に當つて、明の使者三名は既に朝鮮の國境に入つたが、疑ひ懼れて強ひて進まうとはしなかつた。日本に撤兵して貰ひ度いと請うた。諸將は已むを得ず、兵を釜山に一纏めにしたが、併しまだ海を渡つて歸るといふことは承知しなかつた。李宗誠は貴族の出であつた。だから日夜國へ歸りたいばかり思つて居た。それで惟敬は之を逐ひ返して自分が正使にならうと考へた。慶長元年正月、小西行長が日本へ歸つて和議が成立したのを報告した。其の時惟敬は私に之に従ひ來り、地圖・兵書・王侯の禮服及び燕・代地方産の名馬三百頭などを秀吉に献上して立ち去つた。宗誠を脅して曰ふのに「和睦の事は失敗に歸しました。秀吉の兵は今にもやつて來て我れ等を捕へようとして居ます」と。四月、宗誠は逃げ歸つた。副使の楊方亨が計書を惟敬に相談した。惟敬の曰ふのに「只二言ある丈けです。君はよく氣を留めて覺えて居られよ。即ち、我が大明國を擧げて、日本の命を受けただけのことです」と。明主は遂に方亨を以て正使となし、惟敬を副使とし、澤山金帛を出して惟敬に持つて來させ、又皇帝の詔書を持つて、急ぎ立てる様にして出發させ、因つて又韓國にも使を出すやうに言つた。韓は和議がまだ確かりしたものでないので、ためらつて従はなかつた。只黃慎と朴弘長をして従はしめることとし、やがて日を決めて出立した。

三使(李宗誠、楊方亨、沈惟敬) ○蟒服(大蛇の章ある服で、王侯の禮服) 天子の服には龍を畫く)

五月、秀吉以秀頼朝見詔叙秀頼從三位、任右近衛中將。六月、明韓使者濟海。我諸將乃留兵釜山而凱旋。行長、清正、秀吉、秀頼、夫人、席地而坐。目清正呼其幼字曰阿虎、若

伏見。秀吉不許見。乃就増田長盛請申救。長盛曰：子宜謝於治部。清正曰：吾死不能。乃歸第。命七月、京畿大風、震地、大震。伏見城壞、壓死數百人。清正曰：吾寧犯罪、不可坐視。乃從卒二百、入省。秀吉與夫人席地而坐。目清正呼其幼字曰阿虎、若來何速。清正因前訴冤、畫地而語、陳其軍勞。秀吉願謂夫人曰：彼肥皙丈夫、今至自朝鮮。何驚且悴也。乃命守其門。三成以下踵至、不得入。有傳命者、特納三成。清正大聲令其卒曰：使短小佞豎入。旦日、秀吉召見清正、推問海外戰狀、泣下曰：阿虎襁褓育於我。乃類我也。遂愛遇如故。

五月、秀吉、秀頼を以て朝見す。詔して秀頼を從三位に叙し、右近衛中將に任ず。六月、明韓の使者海を濟る。我が諸將乃ち兵を釜山に留めて凱旋す。行長、清正を嫉む。清正、三成に惡しく、而して行長之に善し。與俱に之を譖す。清正伏見に至る。秀吉見るを許さず。乃ち増田長盛に就いて申救を請ふ。長盛曰く「子、宜しく治部に謝すべし」と。清正曰く「吾れ死すとも能はず」と。乃ち第に歸つて命を俟つ。七月、京畿大に風震し、地大に震す。伏見城壞れ、壓死數百人あり。清正曰く「吾れ寧ろ罪を犯すとも、坐視すべからず」と。乃ち卒二百を從へ入つて秀吉を省る。秀吉、夫人と地に席して坐し、清正を目し、其の幼字を呼んで曰く「阿虎、若來ること何ぞ速なる」と。清正因つて前んで冤を訴へ、地に畫いて語り、其の軍勞を陳す。秀吉願みて夫人

に謂つて曰く「彼れ肥哲の丈夫。今朝鮮より至る。何ぞ驚く且つ悴するや」と。乃ち命じて其の門を守らしむ。三成以下踵いで至る。入るを得ず。命を傳ふる者有り、特に三成を納れよと。清正大聲其の卒に令して曰く「短小の佞豎をして入らしめよ」と。且日、秀吉清正を召見して海外の戦狀を推問し、泣下つて曰く「阿虎は襦袢より我に背はる。乃ち我に類するなり」と。遂に愛遇すること故の如し。

五月、秀吉は秀頼をつれて天皇に拜謁した。天皇のお言葉に依つて、秀頼は從三位に叙せられ、又右近衛中將に任せられた。六月、明と韓の使者が海を渡ることになつた。我が諸將は兵を釜山に留め置いて凱旋した。行長は清正を嫉み憎んだ。清正は三成と仲が悪く、行長は三成と仲が善かつた。行長と三成は連合して清正をそしつた。清正は伏見に來た。秀吉は對面を許さなかつた。そこで増田長盛の所へ行つて申し開きをして救けて呉れと頼んだ。長盛は「君は治部(三成)に誂びたらよからう」と言つた。すると清正が曰ふのに「それは死んでも出来ない」と。屋敷に歸つて何分のお仕置を待つて居た。七月、京畿地方で大風が砂を巻き上げて暗くなり、大きな地震が起つた。伏見城は崩れ、潰されて死んだ者が數百人もあつた。すると清正は曰ふに「自分は此の際寧ろ罪を犯すとも、ぢつと見て居るわけにはゆかない」と。そこで二百人の卒を從へつれて、城に入つて秀吉を見舞つた。此の時秀吉は夫人淺野氏と共に地に席を敷いて坐つて居た。清正を見付けて、其の幼名を呼んで曰ふには「虎之助か。お前はマア早く來たではないか」と。清正はそこで進み出て無實の罪を訴へ、土の上山川や軍勢配置の圖を描いて、在鮮當時の苦勞を述べた。秀吉は夫人を顧みて曰ふには「あれは肥つて色白の男であつた。今朝鮮から歸つて來た。何と色は黒く、やつれて居るではないか」と。そこで門の固めをさせた。三成以下の家

早く入れよと言つた。清正は大聲を張り揚げて其の部下に命じて曰ふには「あのちつぽけな、悪る賢い男を入れろ」と。翌日秀吉は清正を召し呼んで海外の戦況を問ひ、色々其の話を聞いて、遂に涙を流して曰ふには「虎之助は赤坊の時から乃公に育てられた。だから乃公に良く似て居るのぢや」と。遂に寵愛すること昔のまゝであつた。

【註】 龜(土ふるごと。即ち大風)

時震仍不止。德川公夜率兵入衛。秀吉曰「不知皇宮何如。吾當與卿省焉。」乃遽出。從者未屬。德川公以其兵擁之而行。道路昏黑。德川公從者有掣其袖者。公不敢顧。秀吉談笑而行。脫刀授之曰「吾老矣。覺刀之重矣。以煩卿也。」公不敢執。乃授井伊直政。已而秀吉從兵踵至。遂入朝。還過方廣寺前。見大佛倒裂。罵曰「我爲若不憚勞費。將使若濟度衆生。今己身且不能保。何負我也。」因呼弓射之。還乃修伏見城。更作牙城于木幡山。

【訓】 時に震仍止まず。德川公、夜、兵を率ゐて入衛す。秀吉曰く「皇宮の何如を知らず。吾れ當に卿と省るべし」と。乃ち遽に出づ。從者未だ屬せず。德川公、其の兵を以て之を擁して行く。道路昏黑、德川公の從者、其の袖を掣く者あり。公敢て顧みず。秀吉、談笑して行く。刀を脱して之に授けて曰く「吾れ老いたり。刀の重

きを覺ゆ。以て卿を煩さん」と。公敢て執らず。乃ち井伊直政に授く。已にして秀吉の從兵踵いで至る。遂に入朝す。還るとき方廣寺の前を過ぎ、大佛の倒裂を見、罵つて曰く「我れ若の爲めに勞費を憚らず。將に若をして衆生を濟度せしめんとす。今己の身すら且つ保つ能はず。何ぞ我に負くや」と。因つて弓を呼んで之を射て還る。乃ち伏見城を修め、更に牙城を木幡山に作る。

通釋 其の時地震はまだ止まなかつた。徳川公家康は夜兵を率ゐて城に入つて守つた。秀吉が曰ふのに「皇居の方は如何あらせられるだらう。貴殿と一緒に御見舞申さねばならん」と。急に出かけることになつた。從者がまだ出揃はなかつた。徳川公は其の兵を以て秀吉を護つて行つた。途中、あたりは眞暗であつたので、徳川公の從者はそつと公の袖を引いて、合圖をする者があつた。徳川公は顧みもしなかつた。秀吉は談笑しながら進んで行つた。刀を取り外し徳川公に持たせて、曰ふには「一年を取つたもんだ。刀が重くて叶はぬ。どうか御苦勞でも持つて下されよ」と。徳川公は強ひて持たうとはしなかつた。井伊直政に渡した。その内に秀吉の從兵も來た。そして遂に入朝した。歸り途に方廣寺の前を通ると、大佛が倒れて壞れてゐるのを見たので、罵つて曰ふには「自分はお前のために、これまで随分夫人の勞力や色々の費用を惜しまなかつた。それはお前に諸々の生あるものを、救つてもらはうとしたのであつたからである。今自分の身一つすら保つことが出來てゐない。何と我が望みに背くものではないか」と。そこで弓を取り寄せ、之を射つて歸つた。それから伏見城を修理し、更に本丸を木幡山に作つた。

語釋 擊其袖(秀吉を殺せようといふ心づける爲め)に家康の袖を引張つたのである。

八月、明・韓使者共至界浦二十九日、造伏見。秀吉使柳川調信責韓使者曰「吾收兵而汝國未獻三道。今又不使王子來謝再造之恩。乃遣微者辱我。我不許汝入見。二使因行長謝弗聽。九月二日、使毛利氏列兵仗。延明使者入城。諸將帥皆坐。頃之、秀吉開帳而出。侍衛呼叱。二使愕伏。莫敢仰視。捧金印。冕服。膝行而進。行長助之畢禮。

訓讀 八月、明・韓の使者、共に界浦に至り、二十九日、伏見に造る。秀吉、柳川調信をして、韓の使者を責めしめて曰く「吾れ兵を收むれども、汝の國未だ三道を獻ぜず。今又、王子をして來つて再造の恩を謝せしめず。乃ち微者を遣はし我を辱かしむ。我れ汝の入見するを許さず」と。二使、行長に因つて謝す。聽かず。九月二日、毛利氏をして兵仗を列ね、明の使者を延いて城に入らしむ。諸將帥、皆坐す。頃くして、秀吉、帳を開いて出づ。侍衛、叱と呼ぶ。二使、愕伏し、敢て仰ぎ視る莫し。金印・冕服を捧げ、膝行して進む。行長、之を助けて禮を畢ふ。

通釋 八月、明と韓との使者が連れ立つて界浦に到着し、二十九日、伏見にやつて來た。秀吉は柳川調信をして韓の使者を責めさせて曰ふには「此方は兵を纏めて還つたのに、お前の國ではまだ約束の三道を獻上してよこさぬ。それに今又、王子をして來つて國家再建の恩を謝せしむることをさせない。それどころか、つまらない者

を使ひに寄越して我を侮辱した仕打ちである。余はお前方の入つて来て余に對面するを許さないぞ」と。二人の使者は小西行長に頼んで陳謝した。秀吉は承知しなかつた。九月二日、毛利氏をして武器を持った兵士を列らべて警固せしめ、明の使者を延き入れて城中へ導いた。諸將帥が皆坐つてゐる。暫らくすると秀吉が帳を開けて出て来た。お附きの護衛が「シツ／＼」と制止の掛聲をした。二人の使者は懼え伏し、敢て仰き視ることが出来ないう有様であつた。二人は黄金の印と冠と装束とを捧げ持つて、膝でにぢり乍ら進んで行つた。行長は彼等を助けてこの延見の禮を濟ませた。

○二使（後の二使は明の二人の使者。） 慶長（後水尾天皇） ○使者（明使は正使楊方亨、副使沈惟敬、韓使は黃慎、朴弘長） ○三道（慶尚・全羅） ○再造（再生、再建の意、一度取つたものを返して元々通りにしてやつたから）

三日、饗使者既罷。秀吉戴冕被袈衣、使德川公以下七人各被其章服、召僧承兌讀冊書。行長私囑之曰、「冊文與惟敬所說或有齟齬者。子且諱之。承兌不敢聽。乃入讀冊于秀吉之傍。至曰封爾爲日本國王。秀吉變色立脫冕服。拋之地。取冊書扯裂之。罵曰「吾掌握日本欲王。則王何待髡虜之封哉。且吾而爲王。如天朝何。乃召行長、誚讓曰「汝敢欺罔我、以爲我邦之辱。吾將併汝與明使者皆誅殺之。」行長股栗、諉罪於三奉行。出書讀數通爲證。承兌亦欲解之。事雖得止。而秀吉怒未釋。

三日、使者を饗し、既にして罷む。秀吉、冕を戴き、袈衣を被り、徳川公以下七人をして、各々其の章服を被らしめ、僧承兌を召し、冊書を讀ましむ。行長、私に之に囑して曰く「冊文、惟敬の説く所と、或は齟齬せるもの有らん。子、且く之を諱め」と。承兌敢て聽かず。乃ち入り、冊を秀吉の傍に讀む。爾を封じて日本國王と爲すと曰ふに至つて、秀吉、色を變じ立ちどころに冕服を脱し之を地に抛ち、冊書を取つて之を扯裂し、罵つて曰く「吾れ日本を掌握す。王たらんと欲せば則ち王たり。何ぞ髡虜の封を待たんや。且つ吾にして王と爲らば、天朝を如何せん」と。乃ち行長を召し、誚讓して曰く「汝敢て我を欺罔し、以て我が邦の辱を爲す。吾れ將に汝と明の使者とを併せて、皆之を誅殺せんとす」と。行長、股栗し、罪を三奉行に諉し、書讀數通を出して證と爲す。承兌も亦、之を欲解し、事雖に止むを得たり。而して秀吉の怒未だ釋けず。

翌三日、明の使者を饗應し、それも終つた。秀吉は明から貰つた冠を戴き、長い衣を身につけて徳川公家康以下七人の人々をして各々禮服を衣させ僧の承兌を召して明から持つて来た封冊の書面を讀ませた。行長がこつそり承兌に依頼して曰ふのに「封冊の文が沈惟敬の曰ふ所と或は食ひ違つた所があるかも知れぬ。そこは貴公一つ飛ばせて讀まないやうにして戴きたい」と。承兌が左様なことは眞平御免と承け入れなかつた。そこで座に入り、封冊の文を秀吉の傍で讀んだ。文中の「お前を封じて日本國王にして遣はず」といふ所へ來ると、秀吉の形相、見る／＼變り、其の場で冠も裝束も脱ぎ棄て、それを地に擲げつけ、其の封冊の文書を取り上げてズタ／＼に引き裂き、罵つて曰ふのに「余は今日日本を手中に收めてゐる。王にならうと思へば今でも王になれるのだ。何んで毛唐等から封せられるのを待たうや。それに余が王となつたら、日本の天子様を何うしよう」と曰ふのだ。馬鹿めが」と。そこで行長を招び、そしり責めて曰ふのに「其の方は余を欺し失せて、我が日本

に恥辱を與へ居つた。余は其の方と明の使者とを一緒にして皆誅殺して終ふつもりだ」と。行長は慄へ上つて、この罪を三人の奉行になすりつけ、手紙を數通出して其の證據とした。承兌も亦之を助けて辯解してやつたので、誅殺の事はやつと止められることとなつた。併し秀吉の怒はそんな事では中々解けなかつた。

註釋 袷衣（一説に袷は袷の訛ならん） ○七人（家康・秀俊・利家・秀家） ○章服（其位に應じ） ○冊書（前位封祿を與へ） ○扯裂（扯、裂く義。晋シ） ○髻慶（明人を罵つて） ○諉（すりつけ）

即夜命加藤清正・大谷吉隆・石田三成・増田長盛・逐明・韓使者賜資糧遣歸使謂之曰「若亟去告而君我將再遣兵屠而國也遂下令西南四道發兵十四萬人以明年二月悉會故行臺柳川調信私囑黃慎曰「太閤意已決矣速獻三道使王子來謝不則貴國復被禍矣惟敬猶疑其虛喝已而見沿道治兵狀則大驚奔去」

訓讀 即夜、加藤清正、大谷吉隆、石田三成、増田長盛に命じて、明・韓の使者を逐ひ、資糧を賜ひて遣歸せしめ、之に謂はしめて曰く「若亟に去り、而の君に告げよ。我れ將に再び兵を遣はし、而の國を屠らんとす」と。遂に令を西南四道に下し、兵十四萬人を發し、明年二月を以て、悉く故の行臺に會せしむ。柳川調信、私に黃慎に囑して曰く「太閤の意已に決せり。速に三道を獻じ、王子をして來り謝せしめよ。不らずんば則ち貴國復禍を被らん」と。惟敬、猶ほ其の虛喝を疑ふ。已にして沿道の兵を治むる狀を見て、則ち大に驚き奔り去る。

を與へ、本國へ歸らせた。そして使者に言はしめて曰ふのに「お前等は早く歸つて、お前等の君に告げよ。余は再び汝等の國を攻め屠らうとしてゐる」と。遂に命令を西南四道に下し、兵十四萬人を繰り出し、來年二月迄に悉く前の那古耶の行營に集まらせた。柳川調信が私に黃慎に言ひ含めて曰ふのに「太閤の心は早や決まつて終つた。早く三道を獻上し、王子をして謝りに來させよ。さもないと、また君の國は禍を受けねばならぬ」と。惟敬はやはりまだ空らおどしだと疑つてゐた。其の内に途筋で出兵準備をしてゐる様を見て、大に驚き奔り去つた。

秀吉初養夫人姪秀秋爲子出嗣小早川氏於是爲大將以浮田秀家毛利秀元副之以黑田孝高充其參謀以清正行長充其先鋒使行長立功自償諸將皆前役所遣已諳海外事宜以故秀吉不復親出自居伏見遙授方略置吏于那古耶以司諸道糧運

訓讀 秀吉初め夫人の姪秀秋を養つて子と爲し、出して小早川氏を嗣がしむ。是に於て以て大將と爲し、浮田秀家・毛利秀元を以て之に副とし、黒田孝高を以て其の參謀に充て、清正・行長を以て其の先鋒に充て、行長をして功を立て、自ら償はしむ。諸將は皆前役に遣はす所、已に海外の事宜を諳んず。故を以て秀吉復親ら出でず、自ら伏見に居り、遙に方略を授け、吏を那古耶に置き、以て諸道の糧運を司らしむ。

通釋 秀吉は初め夫人淺野氏の姪の秀秋を養つて、自分の後嗣息子としたが、後に小早川氏を嗣がせることに

した。そこで此の秀秋を以て大將とし、浮田秀家・毛利秀元を副將と、黒田孝高を參謀に充て、清正・行長を先鋒と定めて、行長をして功を立て、自ら今回の罪を償はせることにした。これ等の諸將は皆前の戦に出陣して居るので、もう海外の事状は既に語記して居た。それ故秀吉は自分が出かけることはやめて、伏見の城中に留つて遠くから指圖をすることとし、役人を那古耶に置いて、諸國の兵糧の運搬を司らしめた。

二年正月、明使者至、明伴報。秀吉受封拜舞、和議全成。因私貫海外珍寶、號爲日本幣物。已而吳越將吏上變、告曰「秀吉先鋒加藤清正、已擁二百艘上機張矣。明主因詰方亨得實、乃請惟敬。惟敬漸謝、因曰「秀吉責韓而已矣。不久將去。明不信、乃戒東北守備、復大募兵、遣邢玠、楊鎬、麻貴、楊元、劉縱、董一元等、率而東下。諸將皆以智勇聞其國者也。」

二年正月、明の使者明に至り、伴り報す。「秀吉封を受けて拜舞し、和議全く成る」と。因つて私に海外の珍寶を貫し號して日本の幣物と爲す。已にして吳越の將吏變を上り、告げて曰く「秀吉の先鋒加藤清正、已に二百艘を擁して機張に上る」と。明主因つて方亨を詰り、實を得、乃ち惟敬を詰む。惟敬漸謝し、因つて曰く「秀吉韓を責むるのみ。久しからずして將に去らんとす」と。明信せず。乃ち東北の守備を戒め、復大に兵を募り、邢玠、楊鎬、麻貴、楊元、劉縱、董一元等を遣はして將に去らんとす」と。

二年の正月、明の使者は明に歸り着き、嘘を報告した。秀吉は封を受けて小躍して喜び拜し、和睦の相談は全部纏りました。そこで秘に海外の珍らしい品物を買ひ集めて、日本から奇越した贈物だと稱した。それから間もなく吳越の將吏が變事を傳へて告げていふには「秀吉の先鋒加藤清正は既に二百艘の軍艦をつれて機張に上陸しました」と。明王は方亨を責めて本統のことを知つた。そこで惟敬を問ひ詰めた。惟敬は恥ぢ入つて詫言を信用しなかつた。そこで東北の守備を固め、再び大に兵を募り、邢玠、楊鎬、麻貴、楊元、劉縱、董一元等の將士を派して、其の兵を率ゐて東に向はせた。此等の諸將は智勇を以て明國中て名高い人々であつた。

賞(買ひ取る)

我兩先鋒已濟海、并其成兵、行長軍釜山。清正自機張攻梁山、陷之、軍于西生浦。韓人懲創前役、逃竄駭散。清正榜諭之曰「太閤命吏責問朝鮮王、屯兵東邊、以俟其報。汝民各安其居、勿敢擾亂。」二月、孝高奉秀秋至釜山、因山海之勢、列壘寨、聯舟艦、以爲根據之地、出令禁暴掠。而諸道望風潰奔。時韓地荒廢、無糧可因。我海運亦未達。諸將以故不輒進。聲言朝鮮獻三道如約、乃止不復深入。

我が兩先鋒已に海を濟り、其の成兵を并せ、行長は釜山に軍す。清正は機張より梁山を攻めて之を陷

れ、西生浦に軍す。韓人、前役に懲創し、逃竄駭散す。清正勝し之を諭し曰く「太閤、更に命じて、朝鮮王を責問し、兵を東邊に屯し以て其の報を俟つ。汝民、各其の居に安んじ、敢て擾亂すること勿れ」と。二月、孝高、秀秋を奉じて釜山に至り、山海の勢に因り、壘寨を列ね、舟艦を聯ね、以て根據の地と爲し、令を出して暴掠を禁す。而して諸道、風を望んで潰奔す。時に韓の地荒廢し、糧の因る可き無し。我が海運も亦未だ達せず。諸將、故を以て軌く進まず。朝鮮、三道を獻する、約の如くせば、乃ち止りて復深く入らずと聲言す。

我が兩先鋒は、既に海を渡つて、朝鮮に踏み入り、其處に留つて守つて居た所の兵を合併して、行長は釜山に陣取つた。清正は機張から梁山へ進んで、之を陥れ、そして西生浦に陣取つた。朝鮮人は前の戦にこり／＼して居るので、逃げかくれたものもあるし、驚いて何處かへ行つて終ふものもあつた。そこで清正は立札をして諭すには「太閤は役人に命じて朝鮮王に責め問はせらるゝことあつて、それで兵を東部に駐め其の返事を待つて居るのだ。故に汝等人民はいづれも自分の處に安心して止まつて居れ。決して騒ぎ立てたりするな」と。二月、孝高は秀秋を奉じて釜山に着き、山や海の形勢を見計らつて、とりでを連ね、舟をならべ、そこを根據地と定め命令を出して亂暴をしたり、掠奪をやつたりするのを禁じた。すると諸道は、却つて此の様子に畏れて、崩れ潰え逃げうせた。當時、朝鮮では土地が荒れ果て、食糧を得ることが出来なかつた。又味方の海上からの運搬物もまだ到着しなかつた。それで諸將は容易に進むことをしなかつた。そして朝鮮が約東通り三道を獻上するならば、兵を止めて、もう深入りはしないと云ひ觸らした。

韓王使李元翼守鳥嶺、而自奔海州。告急於明。明君臣歸罪於石星、奪其官、且議曰

「割地之議、出於惟敬之託言。忠清韓之府藏、全羅慶尙韓之門戶、皆其重地、而明之海路亦恃爲藩屏焉。今予之秀吉、秀吉以爲取韓犯明之資、彼之舟帆、晨發夕至、天津登萊、非明之有也。因有惟敬使往、更爲說以弭和兵。清正行長使人返告韓、不獻地。秀吉報曰、當埃韓穀熟、進入全羅、以攻諸城、必攻破而後已。且戒行長等曰、前使我不得志者、全羅水軍也。此行必報之。」

韓王、李元翼をして鳥嶺を守らしめ而して自ら海州に奔り、急を明に告ぐ。明の君臣、罪を石星に歸し其の官を奪ひ、且つ議して曰く「地を割くの議、惟敬の託言より出づ。忠清は韓の府藏、全羅慶尙は韓の門戸なり。皆其の重地にして、明の海路も亦、恃んで藩屏と爲す。今之を秀吉に予へば、秀吉以て韓を取り明を犯すの資と爲さん。彼の舟帆、晨に發し夕に至り、天津・登萊は、明の有に非ざるなり」と。因つて惟敬を宥し、往いて更に爲めに説いて和兵を弭めしむ。清正・行長、人をして返つて韓の地を獻せざるを告げしむ。秀吉報じて曰く「當に韓の穀の熟するを俟ち、進んで全羅に入り以て諸城を攻むべし。必ず攻め破つて後に已めん」と。且つ行長等を戒めて曰く「前に我をして志を得ざらしめしは、全羅の水軍なり。此の行必ず之に報ぜよ」と。

韓王は李元翼に鳥嶺を守らせ、そして自身は海州に逃げて、急を明に知らせた。明の君臣は、罪を石星に歸し、其の官職を奪ひ取り、又相談して曰ふには「元來朝鮮の地を日本へやるといふ相談は、惟敬の一時の便

宜から出た話である。忠清道は朝鮮の財物の集まる處、全羅慶尙の二道は朝鮮の入口である。共に朝鮮としては重要な土地であり、明の海路も亦此等の土地を離れとも恃んである大事な處である。今之を秀吉に與へたならば、秀吉は朝鮮を取つたり、明を攻めたりする根據とするだらう。彼の船が朝に朝鮮を出たら、夕方には明に着く。さうするともう天津や登萊などは、明國の所有ではなくなつて終ふ」と。そこで仕方がないので惟敬を許し、更に日本軍へ遣つて、色々辯解して軍隊を引上げる様に言はせた。清正と行長は人を秀吉の處へやつて、朝鮮が土地を獻上しないことを報告させた。秀吉は通知を出して曰ふには「朝鮮の穀物が熟するのを待つて、それから全羅に進み、段々諸城を攻めるやうにいたせ。きつと攻め落して終へ」と。そして行長等を戒めて曰ふには「前の戦で思ふ様にならなかつたのは、全羅の水軍のためであつた。今度は是非之に仕返しをせよ」と。

海州 (直隸省) ○天津 (支那の地名) ○登萊 (山東省)

惟敬在_ニ南原_ニ明主數責_ム其效_ヲ韓人亦指_シ目_シ之曰_ク是左右賣_ル國反覆之臣也。罔_レ明欺_キ和而使_シ韓受_ル其弊_ヲ惟敬大窘_ニ又聞_ク石星已_ニ下獄_ニ則恐_レ因度以爲_テ行長主_シ和_ト清正主_シ戰_ト不若_ク先退_ル清正_ト因遣_テ書_ヲ清正_ニ曰_ク三國媾_和將歸_シ無爲_ニ而足_ニ下勸_メ太閤_ニ敗_レ之_ヲ明主命_ジ邢總督_ニ以精銳_ヲ七十萬_ヲ將首_ニ擊_シ足_ニ下_ニ速請_ヒ和_ヲ弭_シ兵_ヲ不然禍_ヲ不旋踵_ニ清正答書_曰吾每病_ク朝鮮_ノ兵_ハ羸弱_ニ不足_ニ與_ニ敵_ニ今當_リ明軍_ニ作_ス一_ハ快戰_ヲ吾所_願已_ニ惟敬得_テ書_ヲ不_{知_ラ所_{爲_ス乃_チ因_テ}}

行長欲_シ投_テ歸_ル於_ニ我行長許_ス之_ヲ邢玠在_ニ遼東_ニ聞_ク之_ヲ曰_ク彼入_リ日本_ニ必爲_テ我腹_ニ心害_ス者_{ナリ}乃令_テ楊元伏_シ三千人_ヲ要_シ其走_ル路_ヲ捕_メ之_ヲ尋被_テ誅_ス而我與_テ明遂_ニ絶_ス

訓 惟敬南原に在り、明主數其の效を責む。韓人も亦之を指目して曰く「是れ左右、國を賣る反覆の臣なり。明を罔ひ和を欺き而して韓をして其の弊を受けしむ」と。惟敬大に窘む。又石星已に獄に下ると聞き則ち恐れ、因つて度つて以爲へらく「行長は和を主とし、清正は戰を主とす。先づ清正を退くるに若かず」と。因つて書を清正に遣つて曰く、「三國媾和し、將に無爲に歸せんとす。而るに足下太閤に勸めて之を敗る。明主、邢總督に命じ、精銳七十萬を以て、將に首として足下を撃たしめんとす。足下速に和を請ひ兵を弭めよ。然らずんば、禍、踵を旋さす」と。清正答書して曰く「吾れ毎に朝鮮の兵は羸弱にして、與に較ぶるに足らざるを病ふ。今、明軍に當り一快戰を作すは、吾が願ふ所のみ」と。惟敬、書を得て爲す所を知らず。乃ち行長に因つて我に投歸せんと欲す。行長之を許す。邢玠、遼東に在り。之を聞いて曰く「彼れ日本に入らば、必ず我が腹心の害を爲す者なり」と。乃ち楊元をして、三千人を伏せ、其の走路を要して之を捕へしむ。尋いで誅せらる。而して我れ明と遂に絶つ。

通釋 惟敬は南原に居た。明主は幾度も幾度も早く良い結果を得たいと催促して來た。韓人も亦惟敬を指し見て曰ふには「此の男はどちらにも巧いことを言つて、國を賣る、全く節操のない家來だ。一方では明に嘘をつき、一方では日本を欺して、そして朝鮮にそのとばしりを與へるのだ」と。惟敬は非常に苦しい立場に陥つた。又石星が既に獄に下されたと聞いて恐れを抱き、そこで計つて思ふには「行長は和睦を主とし、清正は戰を主

として居る。故に先づ清正をのけて終ふのがよい方法だ」と。因つて手紙を清正にやつて曰ふには「三國は和睦の相談が出来て、間もなく平和にならうとした。所が、貴殿は太閤に勸めて折角の和睦を破つた。それで明主は刑總督に命じて、強い七十萬の兵を率ゐ、第一に貴公を撃たしめようとして居る。貴公は早く和睦を願つて戦をやめなさい。若しさうでないといふ禍は立ちどころに來るでせう」と。清正は返事をやつて曰ふには「自分はいつ朝鮮の兵が弱すぎて、くらべものにならないのを残念に思つて居る。今、明の軍隊に當つて痛快に戦ふのは、自分の願ふ所だ」と。惟敬は此の手紙を受けて、どうしたらいいかわからなくなつた。そこで行長に頼んで日本に逃げ込めんと考へた。行長は此のことを許した。刑珍は遼東に居た。此の話を聞いて曰ふには「彼が日本に行つたなら、きつとこちらの病根をなす者である」と。そこで楊元に三千人の部下をつけて、これをひそませ、逃げ路に待ち受けて捕へさせた。ついで殺して終つた。かくて日本は明國と全く交通を絶つことゝなつた。

語釋 南原(全羅道)

明軍已至全羅。楊元在南原。陳愚衷在全州。韓將元鈞在閑山。唐島。水陸相援以守。全羅。七月、我水軍諸將議攻唐島。藤堂高虎、脇坂安治、先發。韓以數百艘逆擊。高虎、安治親揮槍力戰。加藤嘉明後至。遇敵一大艦。艦上列卒、張弓持滿。擬之。嘉明拔刀躍入其艦。敵不敢發。嘉明立斬數人。遂奪其艦。諸將因奮擊。大破之。元鈞收兵守

閑山。而明將楊鎬、麻貴等繼至。韓令鈞進擣釜山。初鈞與李舜臣並將水軍。行長間使人告韓曰。清正首敗。構吾深嫉之。今孤軍先濟。宜襲執之。韓王乃命鈞舜臣。舜臣不肯。鈞劾其逗留。王召舜臣下之獄。鈞於是獨將。及受此命。不得不自進。乃合水路諸軍赴釜山。

訓讀 明軍已に至る。楊元は南原に在り。陳愚衷は全州に在り。韓將元鈞は閑山・唐島に在り。水陸相援け以て全羅を守る。七月、我が水軍の諸將、議して唐島を攻む。藤堂高虎・脇坂安治、先づ發す。韓、數百艘を以て逆へ撃つ。高虎・安治、親ら槍を揮つて力戦す。加藤嘉明後れ至り、敵の一大艦に遇ふ。艦上に卒を列ね、弓を張り滿を持して之に擬す。嘉明、刀を抜き躍つて其の艦に入る。敵敢て發せず。嘉明立ちどころに數人を斬り、遂に其の艦を奪ふ。諸將因つて奮撃し、大に之を破る。元鈞兵を收めて閑山を守る。而して明將楊鎬・麻貴等、繼いで至る。韓、鈞をして進んで釜山を擣かしむ。初め鈞、李舜臣と、並に水軍に將たり。行長、間に入をして韓に告げしめて曰く「清正、首として構を敗る。吾れ深く之を嫉む。今、孤軍先づ濟る。宜しく襲つて之を執るべし」と。韓王、乃ち鈞・舜臣に命ず。舜臣肯せず。鈞、其の逗留を劾す。王、舜臣を召し、之を獄に下す。鈞、是に於て、獨り將たり。此の命を受くるに及んで、自ら進まざるを得ず。乃ち水路の諸軍を合せて釜山に赴く。

通釋 明の軍隊は既に全羅に着いた。楊元は南原にゐた。陳愚衷は全州に居た。朝鮮の大將元鈞は閑山・唐島に居つた。海軍と陸軍とお互ひに援け合ひ全羅を守つた。七月、日本の海軍の諸大將は、相談して、唐島を攻めた。藤

堂高虎・脇坂安治が先づ出發した。朝鮮では數百艘の水軍を以て迎へ撃つた。高虎や安治は自身で槍を揮ひ、力を盡して戦つた。加藤嘉明は後から來たが、敵の大戦艦に出會つた。其の船の上には兵卒を並べ、弓をいつばいにひき絞つて、こちらを狙つて居た。嘉明は刀を抜いて、其の船に躍り込んだ。敵は弓を射たうともしなかつた。嘉明は忽ち數人を斬り倒し、遂に其の船を占領した。諸將も此によつて奮ひ戦ひ、散々に打ち破つた。元鈞は兵をまとめ閑山を守つた。明の大將楊鎬や麻貴等が後から繼いで到着した。韓では元鈞をして、進んで釜山を突かせた。初め元鈞は李舜臣と一緒に水軍の大將であつた。行長は秘に人をやつて韓に告げしめて曰ふには「清正は首として媾和を破つたのである。自分は深く之を憎んで居る。然るに今孤立の軍を以て第一番に朝鮮に渡つた。之を攻めて生捕つたらよからう」と。そこで韓王は清正を伐つことを鈞と舜臣とに命令した。舜臣は之を聞き入れなかつた。鈞は舜臣が王命があり乍ら留まつて進まぬことを王にあばいた。王は舜臣を呼んで牢屋に入れた。それで鈞が一人で大將となることゝなつた。だから今此の釜山攻撃の命令を受けるに至つては、鈞は自ら進まぬわけにはいかなくなつた。そこで水陸の諸軍を合せて釜山に向つた。

全州(全羅)道

行長聞之、八月、伏兵于加德、以舟兵逆擊于絶影島。會日暮、風濤大起。我軍佯退、鈞縱兵冒濤而進。比至加德、飢渴下舟取飲。伏兵起、行長返之、夾擊大敗鈞軍。鈞逃至巨濟。行長復夜襲之、遂斬鈞。乘勝西向、連陷南海、順天、自豆恥津上陸。而清正兵自

西生浦、歷慶州、入全羅諸城、望其旗曰「鬼上官至矣」。不戰而潰。清正進與行長合攻、黃石城、陷之。守將郭趙宗道等皆死。

行長、之を聞き、八月、兵を加德に伏せ、舟兵を以て絶影島に逆へ撃つ。會日暮れ風濤大に起る。我が軍伴り退く。鈞、兵を縱ち濤を冒して進む。加德に至る比、飢渴し、舟を下つて飲を取る。伏兵起り、行長之に返し、夾撃して大に鈞の軍を敗る。鈞逃れて巨濟に至る。行長、復夜之を襲ひ、遂に鈞を斬り、勝に乗じて西に向ひ、連に南海、順天を陥れ、豆恥津より陸に上る。而して清正の兵は西生浦より慶州を歴て全羅に入る。諸城、其の旗を望んで曰く「鬼上官至る」と。戦はずして潰ゆ。清正進んで行長と合し、黃石城を攻めて之を陥る。守將郭趙宗道等皆死す。

行長は之を聞いて、八月、兵を加德島にかくして置き、別に小舟に乗せた兵で、絶影島まで出て行つて攻撃した。偶々日は暮れ、風と波が非常に高くなつた。我が軍は伴つて退却した。鈞は兵を繰り出し、波を乗り越えて進んで來た。加德島邊まで來て、腹が減つたり、咽喉が乾いたりしたので舟を下つて飲み食ひして居た。伏兵が急に起り、行長も引き返して夾み撃ちして、大いに鈞の軍を破つた。鈞は逃げて巨濟洋に行つた。行長は再び夜になつて之を襲ひ、遂に鈞を斬り殺し、勝つた勢に乗じて、續げざまに南海や順天を陥れ、豆恥津から上陸した。そして清正の兵は西生浦から、慶州を通つて全羅に入つた。諸城の敵兵は其の軍旗を見て曰ふには「鬼上官が來た」と、戦はないで崩れた。清正は進んで行長と一緒に、黃石城を攻めて之を陥れた。城の

守將郭越や趙宗道等は此の時皆討死した。

加徳(巨濟島の) ○絶影島(釜山の) ○南海(慶尙道) ○豆恥津(全羅) ○慶州(慶尙道) ○黄石城(全羅)

我軍乃二道竝進。清正從雲峯、浮田秀家繼之。行長從密陽、毛利秀元繼之。兵各五萬。會於南原。韓元帥權慄軍雲峯。望清正軍棄守而逃。我諸將使島津義弘、加藤嘉明、絶全州援路、而合軍入南原。投書楊元約戰期。元高壘深塹、悉衆捍禦。諸將疾攻兩晝夜。已而退兵。窺城兵倦且息、則復進。伏卒一面、而三面填塹、踏藉而登。元在帳中、裸跣走。其所率遼東突騎數千、爭門馳出。伏兵要之、奮刀斫馬足。適月明、明騎莫得脫者。韓將李福男等皆死。我軍進向全州。州民素苦陳愚衷徵求、及聞南原陷、皆遁走。明兵阻之、多爲韓人所傷。愚衷遂棄城走。會麻貴遣牛伯英等援南原、不及。與愚衷合兵、軍于公州。我諸將因糧於全州、終議入國都。

我が軍乃ち二道並に進む。清正是雲峯よりし、浮田秀家之に繼ぎ、行長は密陽よりし、毛利秀元之に繼ぐ。兵各五萬、南原に會す。韓の元帥權慄、雲峯に軍す。清正の軍を望み、守を棄て、逃る。我が諸將、島津義弘、

高し塹を深くし、衆を悉して捍禦す。諸將、疾く攻むること兩晝夜。已にして兵を退く。城兵の倦み且つ息ぶを窺ひ、則ち復進み、卒を一面に伏せて、三面は塹を填め、踏藉して登る。元、帳中に在り。裸跣して走る。其の率ある所の遼東の突騎數千、門を争つて馳せ出づ。伏兵之を要し、刀を奮ひ馬足を斫る。適く月明なり。明騎脱するを得る者莫し。韓將李福男等皆死す。我が軍進んで全州に向ふ。州民素より陳愚衷の徵求に苦しむ。南原陷ると聞くに及び、皆遁れ走る。明兵之を阻み、多く韓人の傷つくる所と爲る。愚衷遂に城を棄て、走る。會く麻貴・牛伯英等を遣はし南原を援く。及ばず。愚衷と兵を合せ公州に軍す。我が諸將、糧に全州に因り、終に國都に入るを議す。

そこで我が軍は二道から竝んで進んだ。清正是雲峯から進み、浮田秀家が其の後につき、行長は密陽から進んで毛利秀元がその後についた。兵力は各五萬であつた。南原で落ち合ふことにした。韓の元帥權慄は雲峯に陣取つて居た。清正の軍勢を遠くから見、守を棄てて逃げ走つた。我が諸將は島津義弘と加藤嘉明をして全州の援兵の來る路を絶たせ、そして軍勢を合せて南原に入り、手紙を楊元の所にやつて、戦の口取を約束した。楊元は城壘を高くし、塹を深め、そして有り丈の兵で防いだ。日本の諸將は手きびしく攻めること二日二晩、それから間もなく一旦兵を退いた。城中の兵が疲れて休んで居るのを見て、再び進み、兵卒を一面にかくし、そして三面は塹を埋め、踏み越えて城壁に登つた。元は其の時帳の中に居た。驚きあわてて、裸素足で逃げ出した。元が率ゐて居た遼東の騎兵數千人も、出口を争つてかけて出た。伏兵が之を待ち伏せして、刀を奮つて馬の足を断ち切つた。丁度其の時は月が照つて居た。明の騎兵に逃れることの出來た者は無かつた。又韓の將李福男等は皆討死した。我が軍は進んで全州に向つた。全州の民は、元來陳愚衷が兵を募つたり、食糧を求めたりす

ること依つて、随分苦しんで居た。南原が既に陥つたと聞いて、皆逃げ走つて終つた。明兵は其の逃げるのを邪魔して、韓人の爲めに却つて多くの者を傷つけられた。愚衷はとう／＼城を棄てて逃げた。丁度其の時麻貴が牛伯英等を遣はして、南原を援けさせた。併しもう間に合はなかつた。だから愚衷と其の兵を合せて公州に陣取つた。我が諸將は食糧を全州から得ることにして、遂に國都に入るといふ相談を進めた。

語釋 雲峯(全羅) ○密陽(慶尙) ○公州(忠清)

韓王聞水陸軍皆敗、謂鳥嶺之守無益也、使李元翼引兵徑出忠清、以沮我軍鋒。復起李舜臣、統三道水軍。舜臣至錦島、與我將菅正陰、遇于碧波亭下。以大礮乘潮來攻。正陰敗死。舜臣因與明水軍將陳璘、軍古今島、以扼我水軍。而我陸軍一隊、以秀元爲將、黑田長政爲先鋒、進迫國都。九月、軍于全義館、擊明將解生于稷山。明將楊登山、牛伯英、來衝我陣。長政將後藤基次、栗山利安、揮槍拒之。殺傷相當。登山、伯英、退與生合、濟川斷橋。我兵絕流而渡、擊走之。明軍復大至。長政將母里友信、原種良等力戰。秀元亦至、擊卻明軍。

軍鋒を沮ましめ、復李舜臣を起して三道の水軍を統べしむ。舜臣、錦島に至り、我が將菅正陰と碧波亭の下に遇ふ。大礮を以て潮に乗じ來り攻む。正陰敗死す。舜臣因つて明の水軍の將陳璘と、古今島に軍し、以て我が水軍を扼す。而して我が陸軍の一隊は、秀元を以て將と爲し、黑田長政を先鋒と爲し、進んで國都に迫る。九月、全義館に軍し、明將解生を稷山に撃つ。明將楊登山・牛伯英、來つて我が陣を衝く。長政の將後藤基次・栗山利安、槍を揮つて之を拒ぐ。殺傷相當る。登山・伯英退いて生と合し、川を濟り橋を斷つ。我が兵流を絶ちて渡り、撃つて之を走らす。明軍復大に至る。長政の將母里友信・原種良等力戰す。秀元も亦至り、撃つて明軍を卻く。

韓王は、水陸の軍が皆敗けたと聞いて、それでは最早鳥嶺の守も無効だと思つたので、李元翼に兵をつけて眞直に忠清道に出て、我が軍の先鋒を遮らせ、李舜臣を再び任用して、三道の水軍を總べ括らせた。舜臣は、錦島に来て、我が將の菅正陰と碧波亭の下で出會つた。大礮を放ちながら、潮時の流に乗つて攻めて來た。正陰は敗れて討死した。そこで舜臣は明の水軍の將陳璘と共に、古今島に陣を構へて、我が海軍を防ぎ止めた。そして我が陸軍の一隊は秀元を大將に戴き、黑田長政を先鋒として國都に向つて迫つた。九月、全義館に陣取り、明將の解生を稷山といふ所で攻めた。明の將楊登山や牛伯英が、やつて來て我が陣を突いた。すると長政の部下の將後藤基次・栗山利安は槍を揮つて、之を防いだ。彼等の殺傷相同じく、五角であつた。登山・伯英は退いて解生の軍と合し、川を渡つて、其の橋を落した。我が兵は流を横切つて渡り、撃つて敵を走らせた。その内に明軍が再び大舉して來た。長政の將、母里友信や原種良等が力を盡して戰つた。秀元も亦到着して、明軍を撃つて退却せしめた。

語釋 錦島(珍島ならんとす) ○碧波亭(珍島の東岸) ○古今島(全羅道の南岸) ○全義館・稷山(忠清)

於是明軍在國都者不敢出我軍亦持重不進天漸寒十月清正退守蔚山行長退守順天諸將連營與釜山相爲聲援明乃遣李如梅來取谷城遂攻毛利秀包于星州不能取秀包亦以兵少退守求禮十一月邢玠入韓聚議都城以爲和兵持重若待秀吉親濟者其志不在小宜及今擊之會明諸道募兵皆至乃分爲三李如梅將左軍高策將中軍李芳春解生將右軍明三十三將與韓七將分屬三軍以楊鎬麻貴統之糧餉火器皆極豐備期以十二月進攻焉我諸將聞之益修城壘清正巡視西生諸寨而留裨將加藤清兵衛與毛利氏援卒俱修蔚山

訓讀 是に於て明軍の國都に在るもの、敢て出でず。我が軍も亦持重して進まず。天漸く寒し。十月、清正退いて蔚山を守り、行長退いて順天を守る。諸將營を連ねて、釜山と聲援を相爲す。明乃ち李如梅を遣はし、來つて谷城を取り、遂に毛利秀包を星州に攻む。取るに能はず。秀包も亦兵少なきを以て、退いて求禮を守る。十一月、邢玠韓に入り、都城に聚議し、以爲へらく、和兵持重して、秀吉の親ら濟るを待つもの、若し。其の志小に在らず。宜しく今に及んで之を撃つべしと。會々明の諸道の募兵皆至る。乃ち分つて三と爲し、李如梅を左軍に將とし、高策を中軍に將とし、李芳春・解生を右軍に將とし、明の三十三將と、韓の七將とを三軍に分屬し、楊鎬・麻貴を以て之を統べしむ。糧餉火器皆極豐備を極め、十二月を以て進攻めんと期す。我が諸將之を聞き、益々城壘を以て之を統べしむ。

城壘を修む。清正西生の諸寨を巡視し、而して裨將加藤清兵衛を留め、毛利氏の援卒と俱に蔚山を修めしむ。**通釋** 是に於て、國都に居た明軍は出ようとしなかつた。我が軍も亦重々しく構へて進まず休戦の状態となつた。此の頃氣候は段々と寒くなつた。十月、清正は蔚山に後退して守り、行長は順天に退いて守つた。そして諸將は陣營を連ねて釜山と互ひに聲援した。明はそこで李如梅を寄越して、谷城を取り、そして遂に毛利秀包を星州で攻めた。併し取ることは出来なかつた。秀包も亦兵が少ないので退いて求禮を守つた。十一月に邢玠が韓に來て國都の城で、諸將と相會して相談を開き考へるには、日本兵は持重して秀吉の親ら朝鮮に渡るのを待つて居るやうだ。其の志は小さいものではない。今の内に之を撃つて終ふのがいゝといふことであつた。其の時丁度明の各地から集めた兵隊が皆到着した。そこで之を三つに分けて、李如梅を左軍の將高策を中軍の將、李芳春と解生とを右軍の將と定め、又明の三十三人の將と韓の七人の將とを三軍に分けて従はせ、楊鎬と麻貴をして之を統べさせた。食糧や鐵砲の類も皆豊富に備へ付けを終り、十二月進軍して攻撃しようとして居た。我が諸將は之を聞いて、益々城壘を堅固にした。清正は西生に在る多くのとりでを見廻りに出かけ、副將の加藤清兵衛を留めて置いて、毛利の援兵と一緒に蔚山の城を修復せしめた。

話釋 谷城(全羅道)

明諸將議曰秀吉諸將清正最勇悍先克清正則餘從風解乃聲向順天以牽行長而諸軍會慶州留高策于彥陽以絕釜山援路而李如梅解生等皆萃于蔚山蔚山

土木未竣。其役卒駭明軍至、入告清兵衛。清兵衛出戰、陷伏大敗、入城嬰守。淺野左京大夫率毛利氏、將太田政信、宍戸元繼等、將往蔚山監役。行至彦陽、與高策夾嶺而舍、未相知也。比曉、我斥兵上嶺、爲明先鋒所獲。我軍乃覺。政信元繼說曰、「衆寡懸絶、不若疾走入蔚山也。」大夫曰、「幸長提兵至此、未觀明人之旗而逃、何面目復見太閤哉。」公等欲走、即走。吾當死於此矣。」乃遣其將太田岡野龜田森島四人、率銃隊進、逆擊明先鋒、卻之。

訓讀 明の諸將議して曰く「秀吉の諸將、清正最も勇悍なり。先づ清正に克たば則ち餘は風に從つて解けん」と。乃ち順天に向ふと聲し、以て行長を牽き、而して諸軍慶州に會し、高策を彦陽に留め、以て釜山の援路を絶つ。而して李如梅・解生等皆蔚山に萃まる。蔚山の土木未だ竣らず。其の役卒明軍の至るに駭き、入つて清兵衛に告ぐ。清兵衛出で、戦ひ、伏に陥りて大に敗れ、城に入りて嬰守す。淺野左京大夫、毛利氏の將太田政信、宍戸元繼等を率ゐ、將に蔚山に往き役を監せん」とす。行いて彦陽に至り、高策と嶺を夾んで舍し、未だ相知らず。曉くる比我が斥兵嶺に上り、明の先鋒の獲る所と爲る。我軍乃ち覺る。政信・元繼説いて曰く「衆寡懸絶、疾く走つて蔚山に入るに若かざる也」と。大夫曰く「幸長兵を提げて此に至り、未だ明人の旗を觀ずして逃る、何の面目あつて復見太閤哉」と。公等欲は走らん、即ち走らば死すべし。乃ち其の將太田・岡野・龜田・森島四人、率銃隊進、逆撃明先鋒、却之。

島の四人を遣はし、銃隊を率ゐて進み、明の先鋒を逆へ撃つて之を卻く。

通釋 明の諸將は相談して曰ふには「秀吉の大將の内、清正が一番勇ましく強い。先づ清正に勝つたならば、あとの軍勢は風に從つて守を解いて逃げるだらう」と。そこで順天に向ふのだといひふらし、行長を牽制し、そして諸軍は慶州に集合し、高策を彦陽に留めて釜山よりの援路を絶ち切らせた。そして李如梅や解生等は皆蔚山に集まつた。然るに蔚山の土木工事はまだ完成しなかつた。其の人夫共が明軍の來たのに驚いて、城に入つて清兵衛に告げ知らせた。清兵衛は城を出て戦つたが、伏兵に引掛つて大敗北をし、城に入つて立て籠つた。淺野左京大夫(幸長)は毛利の將太田政信や宍戸元繼等を率ゐて蔚山に行つて工事を檢分しようとした。彦陽に着いて、高策と山を夾んで宿營したが、まだお互ひには知らないで居た。夜明け頃日本の物見の兵が嶺に上つて明の先鋒に捕へられた。そこで我が軍は初めて明兵が山の向側に居ることを覺つた。すると政信と元繼が説いて曰ふには「彼の大勢と我の小勢とまるでお話になりませんから、早く走つて蔚山に入り込んで終ふのが一番良いと思ひます」と。大夫は「余が兵を率ゐて此處まで來てまだ明軍の旗も見ないで逃げたならば、どの面さげて太閤にお目にかゝれるか。君等は逃げようと思ふならば、勝手に逃げるがよい。自分はどうしても此處で討死をする覺悟だ」と。そこで其の部下の將太田・岡野・龜田・森島の四人をやつて、銃隊を引きつれて明の先鋒を迎へ撃たせ、之を退けた。

大夫在高阜望見策軍踰嶺也。恐其戰沒、使人召還之。不肯奮擊、斃數百人而死之。獨龜田脫歸、獻所獲甲首。且曰、「明兵之衆、望之無際。請君速退。」大夫怒曰、「吾豈聞衆

而退哉。自揚徽號。磨衆而進。將士觀之。爭赴明軍。大夫身被十餘創。猶進不已。龜田力諫。使二從士回其轡。而以刀鞘鞭馬。馬奔蔚山。策兵追躡。岡田某、福永某、返戰而死。清兵衛望見出城。迎入。元繼爲明軍所隔。自間路入島山。島山蔚山別堡也。

訓讀 大夫高阜に在り。策の軍、嶺を踰ゆるを望見す。其の戰没を恐れ、人をして之を召還せしむ。肯せず。奮撃數百人を斃して之に死す。獨り龜田脱れ歸り、獲る所の甲首を獻す。且つ曰く「明兵の衆、之を望むに際無し。請ふ君速に退け」と。大夫怒つて曰く「吾れ豈に衆を聞いて退かんや」と。自ら徽號を掲げて衆を靡きて進む。將士之を觀て、争つて明軍に赴く。大夫身十餘創を被る。猶ほ進んで已まず。龜田力諫す。二從士をして其の轡を回さしむ。而して刀鞘を以て馬に鞭つ。馬蔚山に奔る。策の兵追躡す。岡田某・福永某、返り戦つて死す。清兵衛望見して城を出で、迎へ入る。元繼明軍の隔つる所と爲り、間路より島山に入る。島山は蔚山の別堡なり。

通釋 左京大夫は高い岡の上に居た。高策の軍が嶺を越えるのを遠くから見居た。そして其の四人の將が戦死するのを心配して、人をやつて之を呼び返へさせた。併し承知しなかつた。奮ひ戦つて數百人を殺して、とう／＼其處で討死した。只一人龜田は脱れ歸つて、切り取つた首を獻上した。そして曰ふには「明の軍勢は、望み見た所、果てがない位澤山居ります。どうか早速逃げて下さい」と。大夫は怒つて曰ふのに「俺は敵勢が多いと聞いて逃げられようか、決して逃げないぞ」と。自ら旗印を押し立て、軍勢を指揮して進んだ。將士は之を見て争つて敵中へ突込んだ。大夫は身に十餘の創を被つた。それでも進んで已まず。龜田は之を見て

時楊鎬李如梅等已破蔚山外郭。大夫代清兵衛率厲將士嬰壁守之。明兵以大夫爲清正也。欲必獲之。攻撃甚急。大夫自放銃無不命中。時開門突戰。殺傷過當。二城之間有川。李芳春解生泛兵艦以絕之。城兵銃破其五艘。溺數千人。而敵勢不衰。麻貴茅國器鼓衆攀壁。前者墜。後登。晝夜不歇。城兵欲告急於清正。清正時在機張。相去三日程。敵衆充塞道路。大夫曰。誰可往者。近臣木村某奮請往。大夫壯之。予以善馬。已出門。明兵麀集。木村一騎馳突。萬衆中。一日一夜達機張。見清正告急。清正大驚。投袂而起。左右或止之。曰。蔚山以孤城當大敵之衝。而我寡兵援之。終不能保。不若棄之也。清正曰。彈正囑我曰。緩急幸援我兒。今餒之敵。何以立天下。乃率見兵五百人。人負糧食。登舟赴援。與明候船戰江中。走之。清正自蒙銀兜盔。杖雜刀。立船

首指磨士卒。明韓諸軍指目莫敢近者。遂入蔚山。

訓讀 時に楊鎬・李如梅等、已に蔚山の外郭を破る。大夫清兵衛に代つて將士を率厲し、壁に罅りて之を守る。明兵大夫を以て清正と爲すや、必ず之を獲んと欲し、攻撃甚だ急なり。大夫自ら銃を放ち、命中せざるは無し。時に門を開いて突戦ふ。殺傷過當なり。二城の間に川有り。李芳春・解生兵艦を泛べて以て之を絶つ。城兵銃して其の五艘を破り、數千人を溺らす。而して敵勢衰へず。麻喜・茅國器、衆を鼓し、壁を攀ち、前者は墜ち、後者は登る。晝夜歇まず。城兵急を清正に告げんと欲す。清正時に機張に在り。相去ること三日程にして、敵衆道路に充塞す。大夫曰く「誰か往く可き者ぞ」と。近臣木村某奮つて往かんと請ふ。大夫之を壯とし、予ふるに善馬を以てす。已に門を出づ。明兵麁集す。木村、一騎萬衆の中を馳突し、一日一夜にして、機張に達す。清正に見えて急を告ぐ。清正大に驚き杖を投じて起つ。左右或は之を止めて曰く「蔚山は孤城を以て大敵の衝に當る。而して我が寡兵之を援くるも、終ひに保つ能はざらん。之を棄つるに若かざるなり」と。清正曰く「彈正我れに囑して曰く『緩急あらば幸ひに我が兒を援へ』と。今之を敵に餒せば、何を以て天下に立たん」と。乃ち見兵五百人を率ゐて、人ごとに糧食を資ひ、舟に登りて赴き援け、明の候船と江中に戦ひ之を走らす。清正自ら銀兜鎧を蒙り、薙刀を杖つき、船首に立ちて士卒を指麾す。明韓の諸軍指目して、敢て近づく者莫し。遂に蔚山に入る。

通釋 その時、楊鎬や李如梅等は既に蔚山の二の丸を破つた。大夫は清兵衛に代つて將士を率ゐ勵まし、城壁に立て籠り守つた。明の兵は大夫を清正だと思ひ、必ず之を獲たいと盛に攻撃した。大夫は自ら鐵砲を撃つたが命中しない事はなかつた。時に門を開いて突戦した。殺傷した敵は相當數に達した。蔚山と其の外郭の間に川が流れて、

との間には、川があつた。李芳春と解生とは兵艦を浮かべて、其の間を絶ち切つた。すると城兵は鐵砲で其の内五艘を打ち沈め、數千人を水に溺れさせた。併し敵の勢は少しも衰へなかつた。麻喜や茅國器は衆を鼓舞して城壁にはひ登り、前の者が迂り落ちると、後の者が登るといふ有様であつた。それを晝も夜も歇めなかつた。城中の兵は急を清正に告げ度いと思つた。其の時清正は機張に居つた。機張までは相去ること三日を要する里程であつた。敵が行く道々に、いつばいに滿ちふさがつて居た。大夫が曰ふのに「誰か行かれる者はあないか」と。近臣の木村某といふもの、奮ひ立つて自分が行き度いと申し出た。大夫はそれは誠に勇ましいと賞めて、善い馬を一頭與へた。やがて木村は門を出た。明兵は群り集つて來た。木村は只一騎で萬人の中を馳せ進み一日一晩で早くも機張に着いた。清正に面會して急を告げた。清正は大に驚いて、杖を振つて勢よく起ち上つた。左右の家來は之をとめて曰ふには「蔚山は孤城でありながら、大敵の打つて出る要路に當つて居ります。そして今我々の少ない兵力で之を援けても、結局は支へるは出来ません。之は見棄てた方が得策です」と。清正が曰ふのに「幸長の父長政が余に頼んで曰ふには『急な場合には何分とも我が倅を助けてやつて呉れ』と。今之を敵に見捨て、殺したとなると後日余はどうして天下に立つことが出来ようか」と。そこで有り合せの兵五百人を引きつれ、各人に食料を背負はせ、舟に乗つて助けに赴き、明の見張船と川の中で戦つて、之を退けた。清正は銀製のかぶとをかぶり、薙刀を杖につけて、舳に立つて士卒を指揮した。明韓の諸軍は指し見て居るだけで、近づかうとする者もなかつた。清正は遂に蔚山城に入つた。

註 二城(蔚山) ○木村某(母)。

鎬貴謂將士曰「清正定入城矣。猶檻虎而刺之也。明日合諸軍蟻附而上。清正令士卒投大石巨材擊卻之。即夜與數百騎襲明軍大獲而還。敵更起飛樓以火筒佛郎機百道竝攻。城壘震裂。清正與大夫堅守不屈。鎬貴知其不可力取。乃下令休戰。合圍十晝夜。斷我汲道。城兵飢渴皆嚼紙煎壁土刺馬飲其血。馬盡乃飲溺。夜出城外。搜明人尸取其所佩糗糧牛炙食之。天大雪士卒戰瘡有墜指者。而清正意氣自若。益修守具。用銃及紙礮。日斃明兵數百千人。鎬貴夜設伏。而曉焚營。退走數里。以誘城兵。城兵欲追。清正不許。曰「彼舉火以退。退不設殿。不以夜而以曉。是將誘我而殲之也。」久之。明伏稍稍出。終復圍之。浮田氏卒有亡在明軍者。呼語城上人曰「楊經理願媾和。欲與加藤公面議之。期城外百步相見。」清正欲往。大夫曰「敵情不可測。公受太閣命爲一方重寄。勿輕出貽笑外國。雖然。不出示之怯也。度彼未識公面。僕請爲公代行。」衆遂兩止之。故紓會期。以俟我援兵至。

蟻附して上る。清正士卒に令し、大石巨材を投じ、撃つて之を卻く。即夜、數百騎と明軍を襲ひ、大に獲て還る。敵更らに飛樓を起し、火筒佛郎機を以て百道竝び攻む。城壘震裂す。清正大夫と堅く守つて屈せず。鎬貴其の力取す可からざるを知り、乃ち令を下して戦を休め、合圍すること十晝夜、我が汲道を斷つ。城兵飢渴し、皆紙を嚼み、壁土を煎じ、馬を刺して其の血を飲む。馬盡く。乃ち溺を飲む。夜城外に出で、明人の尸を搜り、其の佩ぶる所の糗糧牛炙を取りて之を食ふ。天大に雪ふり、士卒戰瘡、指を墜す者あり。而るに清正意氣自若たり。益々守具を修め、銃及び紙礮を用ひ、日に明兵數百千人を斃す。鎬貴夜伏を設けて、曉に營を焚き、退き走ること數里、以て城兵を誘ふ。城兵追はんと欲す。清正許さずして曰く「彼火を舉げ以て退き、退くに殿を設けず。夜を以てせずして曉を以てす。是れ將に我れを誘ひて之を殲さんとするなり」と。之を久しうして明の伏稍稍出で、終に復之を圍む。浮田氏の卒亡げて明軍に在る者あり。呼んで城上の人に語つて曰く「楊經理媾和を願ふ。加藤公と之を面議せんと欲す。城外百歩を期し相見ん」と。清正往かんと欲す。大夫曰く「敵情測る可からず。公太閣の命を受け、一方の重寄爲り。輕しく出で、笑を外國に貽す勿れ。然りと雖も、出でざれば之に怯を示す。度るに彼れ未だ公の面を識らず。僕請ふ、公の爲めに代り行かん」と。衆遂に兩つながら之を止む。故らに會期を紓うし、以て我が援兵の至るを俟つ。

通釋 鎬貴や麻貴が其の將士に向つて曰ふには「清正は確實に城に入つた。それは宛かも虎を檻に入れて之を刺す様なものだ」と。翌日、諸軍を一緒に合せて、蟻のやうにべた一面に城壁を這ひ上つた。清正は士卒に命令して大石や大きな材木を投げさせ、之を退けた。その夜清正は又數百騎と共に明軍を襲つて、隨分獲物を得て歸つた。敵は更に高い櫓を組み立て、小銃や西洋製の大砲で方々から竝んで攻め立てた。城壘は爲めに震へ裂け

た。清正は大夫と共に堅く守つて屈服することをしなかつた。楊鎬や麻貴も遂に力を以ては此の城を抜くことは出来ない。そこで命令して戦をやめ、夜晝十日の間、城を取り圍んで、我が籠城の兵の水を汲む道を断つた。城の兵は腹が減り、咽喉が乾いたので、皆、紙を嚙んだり、壁土を煮て食べたり、又馬を刺し殺して其の血を飲んだりした。馬もやがてなくなつた。次には小便を飲んだ。夜は城の外へ出で明兵の死骸を探して、其の持つて居る乾飯を焼いた牛肉などを取つて食つた。折から大雪が降つたので、士卒は戦や霜焼を出して、指を落す者もあつた。清正はその心少しも動かなかつた。益々守り道具を整へ、鐵砲や紙筒で毎日明兵數千人宛を斃した。楊鎬・麻貴は夜、伏兵を置き、朝になつて陣屋を焼いて數里も逃げ走つて、城の兵をおびき出さうとした。城兵は之を追撃したと思つた。清正は許さないので曰ふには「彼は火を放つて退いたが、退くのに殿軍の備へがない。又夜中に逃げないで、朝になつてから逃げ出した。是はきつと我々をおびき出して、皆殺しにする算段だらう」と。暫くすると明の伏兵は段々に顯はれ出で来て、終に再び城を取り圍んだ。浮田氏の兵卒で明軍に逃げて行つた者があつた。城の上の人を呼んで曰ふには「明軍の大將楊經理は和睦を願つてあます。加藤清正公と面會して相談したいと思つてあます。城の外百歩の所でお目にかゝりませう」と。清正は行かうと思つた。すると大夫が曰ふのに「敵の様子は測り知られません。加藤公は大闇の命令を受けて一方の重任を引き受けて居られる。此の際軽々しく城を出で、萬一のことがあつて笑ひ草を外國に残すやうなことがあつてはなりません。併し又、誰も出て行かなかつたなら、敵に臆病を見せることになる。考へて見るに向ふではまだ加藤公の顔を知つて居りません。我が輩が代つて行き度いと思ふ」と。多くの人々は、遂にそのどちらをも引き止めた。そこで故意に面會の時期を延ばさせて、楊鎬の來るのを待つて居た。

佛郎機(佛蘭西製の大砲) ○戰塚(ひも切れ) ○紙礮(紙で貼り付)

黒田孝高在梁山。使使告釜山曰、蔚山急矣。即陷諸城隨之。不可不赴援。諸將然之。豊臣秀秋・毛利秀元・黒田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎・其子高良・脇坂安治等、將騎卒五萬、自彦陽・昌原分道赴援。而行長自海上會之。三年正月、秀秋等至彦陽、擊破高策。與昌原軍皆赴蔚山。行長益裝空艦蔽海而至。楊鎬聞我軍自三面至、挺身先遁。麻貴解生等乘夜解圍。長政使後藤基次晨出候軍。得一馬鞍于水涯。返報曰、是日本制。我兵已有騎渡者。不可後矣。長政即馳躡明軍。藤堂高良等揮槍繼之。清正與大夫乃開門合擊。敵衆崩駭。獨其將吳惟忠、孝國器、殿而回戰。吉川廣家奮擊走之。明軍大走、遺棄糧仗蔽野。

訓讀 黒田孝高梁山に在り。使をして釜山に告げしめて曰く、「蔚山急なり。即ち陥らば諸城之に隨はん。赴き援げざるべからず」と。諸將之を然りとす。豊臣秀秋・毛利秀元・黒田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎・其子高良・脇坂安治等、騎卒五萬に將として彦陽・昌原より道を分つて赴き援ふ。而して行長は海上より之に會す。三年正月、秀秋等彦陽に至り、撃つて高策を破り、昌原の軍と皆蔚山に赴く。行長益々空艦を裝し、海を蔽うて

至る。楊鎬我が軍三面より至ると聞き、身を挺して先づ遁る。麻貴・解生等、夜に乗じて圍を解く。長政、後藤基次をして晨に出で、軍を候はしむ。一馬鞍を水涯に得たり。返り報じて曰く「是れ日本の制なり。我が兵已に騎渡する者あり。後るべからず」と。長政即ち馳せて明軍を躡す。藤堂高良等槍を揮つて之に繼ぐ。清正大夫と乃ち門を開いて合撃す。敵衆崩駭す。獨り其の將吳惟忠・辛國器、殿して回り戦ふ。吉川廣家奮撃して之を走らす。明軍大に走り、糧杖を遺棄して野を蔽へり。

通釋 黒田孝高は梁山に居た。使を釜山にやつて告げて云ふには「蔚山が危い。若し蔚山が落城するやうなことがあると、他の諸城も之に随つて次ぎ／＼に落ちるだらう。故に蔚山へ速かに援けに行かねばならぬ」と。諸將も之に賛成した。豊臣秀秋・毛利秀元・黒田長政・加藤嘉明・森忠政・蜂須賀家政・藤堂高虎其の子高良・脇坂安治等が五萬の騎兵に將となつて、彦陽と昌原とから道を別々にして援けに赴いた。そして行長は海上の方から之に一緒になつたのである。三年正月、秀秋等は彦陽に着き、高策を打ち破り、昌原の軍と共に蔚山へ向つた。行長は益々空船を空船でないやうに見せかけ、海にいっぱいになつてやつて来た。楊鎬は日本軍が三方面から寄せて來ると聞いて、一人抜け出し最初に逃げ出した。麻貴・解生等は夜に乗じて圍を解いた。長政は後藤基次をして朝出て敵軍の様子を見させた。すると川岸で一足の馬杵を拾つた。歸つて來て報告して曰ふには「是は日本風に出來て居ます。して見ると日本兵で、もう川を馬で渡つた者があるのである。遅れてはなりません」と。長政は直ちに馳せて明軍を追つた。藤堂高良等は槍を揮り廻しながら、之につゝいた。清正と大夫は、そこで門を開いて共にともに攻め立てた。敵勢は崩れ駭いた。只其の將吳惟忠と辛國器だけが、殿軍となつて引き返して戦つた。吉川廣家が奮ひ戦つて之を走らせた。明軍は散々に敗れて逃げ、糧食や兵器の捨てられたものが、野原を蔽つていつ

ばいになつた。

諸將之救蔚山也、明候我空虚、一軍襲梁山、爲黒田孝高擊卻之。一軍襲釜山、浮田秀家使立花宗茂邀于般丹、燒而走之。明主得蔚山、敗聞、與其下議曰「是役也、謀之經年、傾海内、力加以全韓之兵、期於必克。今乃如此、罪當歸經理。乃罷楊鎬、以萬世德代之、與鄧子龍、張芳、監芳、威等、率楚兵往助邢玠。秀吉得蔚山、捷聞、賜手書於清正、賞之、爲餽糧食。」

訓讀 諸將の蔚山を救ふや、明我が空虚を候ひ、一軍は梁山を襲ひ、黒田孝高の爲めに之を撃ち卻けらる。一軍は釜山を襲ひ、浮田秀家、立花宗茂をして般丹に邀へしめ、燒いて之を走らす。明主蔚山の敗聞を得、其の下と議して曰く「是の役や、之を謀ること年を経たり。海内の力を傾け、加ふるに全韓の兵を以てして必克を期す。今乃ち此くの如し。罪、當に經理に歸すべし」と。乃ち楊鎬を罷め萬世徳を以て之に代へ、鄧子龍・張芳・監芳・威等と、楚の兵を率ゐて往いて邢玠を助けしむ。秀吉蔚山の捷聞を得、手書を清正に賜ひて之を賞し、爲めに糧食を餽る。

通釋 諸將が蔚山を救ひに集中すると、明軍は一方が空いたのを見すまして、明の一軍は梁山を襲ひ、却つて黒田孝高に却けられた。一軍は釜山を襲つたが、浮田秀家が立花宗茂をやつて般丹で迎へさせ、燒打ちにして之

を追つ拂つた。明主は蔚山で敗北したと聞いて、部下の者と相談して曰ふには「此の戦はあしかけ二年にもなつた。國中の力を傾けた上に、尙ほ全韓の兵を足して、必ず勝つことを目的とした。それが今や斯くの如き態たらくである。この罪はどうしても經理に負はせねばならぬ」そこで楊鎬を免職にして萬世徳を之に代らせ、鄧子龍・張芳監・芳威等と共に楚の兵を率ゐて邢玠を助けにやつた。秀吉は蔚山の勝報を得て喜び、自筆の感狀を清正に與へて賞め稱へ、糧食を送つてやつた。

般丹(慶尙)

三月、秀吉携秀頼及夫人以下遊醍醐。命前田玄以掌供帳、務使豐盛勿有遺憾。四月、遣使諭諸將留秀秋・行長・清正及島津義弘・黑田長政・左京大夫等十餘將其餘盡罷歸。其留者分爲四屯。秀秋守釜山、而蔚山在其右、清正守之、順天在其左、行長守之、泗川在其前、義弘守之、四城兵凡十萬。明兵亦可十萬。世徳與邢玠議令李如梅當義弘、劉綎當行長、麻貴當清正、陳璘以水軍出其後。已而召如梅、以董一元代之、相持未戰。是月、秀頼進從二位爲權中納言。五月、秀吉有疾。六月、外師罷者至乃

訓讀 三月、秀吉、秀頼及び夫人以下を携へて醍醐に遊ぶ。前田玄以に命じて供帳を掌らしめ、務めて豐盛ならしめて遺憾あること勿らしむ。四月、使を遣はして諸將に諭し、秀秋・行長・清正及び島津義弘・黑田長政・左京大夫等の十餘將を留め、其餘は盡く罷め歸らしむ。其の留まる者は、分ちて四屯と爲す。秀秋は釜山を守る。而して蔚山は其の右に在りて、清正之を守り、順天は其の左に在りて、行長之を守り、泗川は其の前に在りて、義弘之を守る。四城の兵凡そ十萬。明兵も亦十萬可なり。世徳、邢玠と議し、李如梅をして義弘に當り、劉綎をして行長に當り、麻貴をして清正に當り、陳璘をして水軍を以て其の後にいでしむ。已にして如梅を召し、董一元を以て之に代へ相持して未だ戦はず。是の月、秀頼從二位に進み、權中納言と爲る。五月、秀吉疾有り。六月、外師の罷むる者至る。乃ち召し見えて慰勞し、其の賞罰を論ず。

通釋 三月、秀吉は秀頼と夫人や其の以下の人々を伴れて醍醐へ遊びに行つた。前田玄以に命じて色々の支度を掌らせ、出来るだけ充分に立派に、そして何でも不足のないやうにさせた。四月、諸將の所へ使をやつて。秀秋・行長・清正及び島津義弘・黑田長政・左京大夫等の十人餘りの大將を残し、其の他は全部歸らせた。残つた將は四つの屯營に分れた。秀秋は釜山を守つた。そして蔚山は其の右で清正が之を守り、順天は左で行長が守り、泗川は前にあつて義弘が之を守つた。四城の兵力は凡そ十萬であつた。明の兵力も亦十萬位であつた。世徳は邢玠と相談して、李如梅をして義弘に當らせ、劉綎をして行長に當らせ、麻貴をして清正に當らせ、そして陳璘には海軍を率ゐさせて其の後に出来るやうにさせた。それから間もなく如梅を呼び返して董一元に代らせ、お互ひに對陣するだけで、まだ戦にはならなかつた。是の月、秀頼は從二位に進み、權中納言に任ぜられた。五月、秀吉が病に罹つた。六月、外國から歸つて來ることになつてゐた將士が到着した。そこで呼び入れて其の勞を慰め、又

其等の將士の手柄や失敗を論議した。

話釋 泗川(慶尚道)

七月、秀吉病篤。召_シ德川公_ヲ諭_シ之_曰、「外國未_ダ服_セ。而_{シテ}吾_レ罹_ル此_ノ疾_ニ。吾_レ死_{セバ}則_チ難_ク作_ラ。非_ニ卿_ノ莫_シ以_テ定_ム之_ヲ。吾_レ今日_ニ以_テ天下_ヲ托_ス卿_ニ。卿_ノ爲_メ我_ノ努力_{セヨ}。秀頼幼弱_ニ亦_チ煩_ス卿_ノ保護_ヲ。至_リ其_ノ成長_ニ當_レ立_ツ與_ハ不_レ當_レ立_ツ一_ニ在_リ卿_ノ之心_ニ。德川公歎_ク曰_ク、「殿下百歳_ノ後_ニ孰_シ不_レ奉_ル嗣_{君_ヲ者_ニ。雖然_モ人心_ノ不_レ測_ラ。殿下宜_{シク}運_シ其_ノ神算_ヲ以_テ建_ツ萬世_ノ之_ノ安_キ家_ヲ。康_不才_ト不_レ敢_テ當_ル重任_ニ。曰_ク、「吾_レ熟_{シク}思_フ之_ノ莫_{シク}若_ク卿_{者_ニ。卿_勿避_レ也_{。德川公固_{シテ}辭_シ而_{シテ}退_ク。秀吉遂_ニ召_シ石田三成_・増田長盛_ヲ告_グ之_{。二人諫_メ曰_ク、「殿下百戦_ヲ取_リ下_ニ而_{シテ}一日_ヲ予_フ之_{他人_ニ。是_レ胡_ノ爲_ル也_{。今天下_ニ猛將謀臣_{無_シ不被_レ殿下_ノ恩_{者_ニ。其_於輔_ト嗣_{君_ヲ何_{有_ラント}有_ラ」。}}}}}}}}}

訓 七月、秀吉病篤し。德川公を召して之を諭して曰く、「外國未だ服せず。而して吾れ此の疾に罹る。吾れ死せば則ち難作らん。卿に非ざれば以て之を定むる莫し。吾れ今日、天下を以て卿に托す。卿、我が爲に努力せよ。秀頼幼弱、亦卿の保護を煩す。其の成長に至つて、當に立つべきと當に立つべからざるとは、一に卿の心

宜しく其の神算を運して以て萬世の安きを建つべし。家康不才、敢て重任に當らず」と。曰く「吾れ之を熟思するに、卿に若く者莫し。卿避くる勿れ」と。德川公固辭して退く。秀吉遂に石田三成・増田長盛を召して之を告ぐ。二人諫めて曰く「殿下百戦して天下を取り、而して一日にして之を他人に予ふ。是れ胡爲るものぞや。今や天下の猛將謀臣、殿下の恩を被らざる者無し。其の嗣君を輔くるに於て何か有らん」と。

通釋 七月、秀吉の病氣は重くなつた。德川公を呼んで諭して曰ふには「外國はまだ服従しない。而るに余は此んな病氣に罹つた。自分が死んだならば、きつと騒動が持ち上るだらう。貴公でなければそれを鎮める者は居ない。自分は今天下を貴公に任す。貴公はどうか自分の爲めに努力してもらひ度い。秀頼は幼小で、之も亦貴公の保護を煩し度い。あれが大きくなつた時、天下の將軍になるか、ならぬかは一に貴公の心次第で、どうともよろしく取計つて下され」と。德川公は泣きしやくつて曰ふには「殿下がお歿くなりなつた後は、誰が後嗣の君を戴かないものが御座いませう。きつと後嗣の秀頼公を奉ずるのではあるが、併し、人の心といふものは、分らぬものであります。殿下はよろしくその優れた賢い計畫を運らして、萬世までも安泰になる基礎をお建てになるのがよろしい。家康は誠に才能のない者ですから、決して此の重い役目には當りませぬ」と。秀吉は曰ふのに「自分はよくよく考へて見るに、貴公より外に人はない。どうか辭退しないで呉れ」と。それでも德川公は固く斷つて引き下つた。秀吉は遂に石田三成・増田長盛を呼んで、此の話を告げ知らせた。二人は諫めて曰ふのに「殿下は諸方で戦つて、苦心して天下を取られました。それをたつた一日で雑作なく、他人に與へようとなさる。是れは一體何んといふ仕儀で御座いますか。今天下の勇ましい大將や謀のうまい家來は、皆殿下の御恩を受けて居るので、其等の者共が、御世嗣の君を輔けるといふことは當然なことでありませう」と。

於是定大老奉行。奉行五人如故所置。德川公及前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝爲五大老。以中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴爲三中老。小事決於奉行。大事決於大老。大老奉行或不協。則中老居間和解之。使片桐且元・小出秀正・傳秀・頼密囑二人曰。吾起人奴。至爲關白。孰非國恩哉。吾與明構兵。禍結弗解。吾深悔之。彼聞吾死。或大舉來報。國朝自古未曾受外國侵辱。及我時受焉。吾深耻之。是吾所以托國於家康。至我家存亡未暇恤也。雖然。家康必不負我。汝輩謹保護秀頼。莫使生覺隙焉。又使木村重成・薄田兼相・渡部尙副二人分親兵爲七隊。以速水守久・伊東長次・青木一重・眞野宗信・中島氏種・野村吉安・堀田正高爲隊長。馬標・旗旗盡傳之。秀頼使母衣騎郡良列卒將津川左近掌之。

是に於て、大老奉行を定む。奉行五人は故置く所の如し。德川公及び前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝を五大老と爲し、中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴を以て三中老と爲し、小事は奉行に決し、大事は大老に決す。大老奉行或は協はざる有らば、則ち中老・間に居て之を和解せよと。片桐且元・小出秀正をして秀頼に傳たらしめ、密に二人に囑して曰く「吾れ人奴より起つて、關白と爲るに至る。孰か國恩に非ざらんや。吾れ親正と

を構へ、禍結んで解けず。吾れ深く之を悔ゆ。彼れ吾が死するを聞かば、或は大舉して來り報いん。國朝古より未だ曾て外國の侵辱を受けず。我が時に及んで受くるは吾れ深く之を恥づ。是れ吾れ國を家康に托する所以なり。我が家の存亡に至つては、未だ恤ふるに暇あらざるなり。然りと雖も、家康は必ず我に負かじ。汝が輩、謹んで秀頼を保護し、覺隙を生ぜしむる莫れ」と。又木村重成・薄田兼相・渡邊尙をして二人に副たらしむ。親兵を分つて七隊と爲し、速水守久・伊東長次・青木一重・眞野宗信・中島氏種・野村吉安・堀田正高を以て隊長と爲し、馬標・旗旗は盡く之を秀頼に傳へ、母衣騎郡良列・卒將津川左近をして之を掌らしむ。

通釋 是に於て、大老や奉行の職を定め、奉行五人は前に置いたと同じやうにし、德川公及び前田利家・毛利輝元・浮田秀家・上杉景勝を五大老とし、中村一氏・生駒親正・堀尾吉晴を三中老とし、小さい事は奉行が決裁し、天下の大事は大老が取りきめることにした。若し大老と奉行とで意見が合はない場合は中老が其の仲に居て、仲裁するのである。片桐且元と小出秀正とは秀頼のお守役となし、秀吉が秘に二人に頼んで曰ふには「自分は下男から身を起して、關白となつたのだ。皆國の恩でないものはない。自分は明と戦争をして、戦争は未だに結んで解けない。これは深く後悔に堪へない所である。明國は自分が死んだと聞いたなら、或は大據押し寄せて返報するかも知れない。わが日本は古來まだ一度たりとも外國に侵され辱しめられたことはないのだ。自分の時になつてそのやうな事があつては、自分は深く恥とするのだ。さればこそ自分は天下を以て家康に任せようとしたわけなのである。自分の家が存続するか亡びるかといふやうなことは、決して心配してゐない。併し家康はきつと自分に背くやうなことはないと思ふ。お前方も謹んで秀頼を護り、仲たがひなど生じないやうに注意せよ」と。又木村重成・薄田兼相・渡邊尙の三人を、二人のお守の補助役とした。お側付の兵を七隊に分けて、速水守久・伊東長次・青木一

重・眞野宗信・中島氏種・野野村吉安・堀田正高を隊長と定め、馬じるしや旗の類は皆秀頼に譲り渡し、母衣騎の郡良列と足柄大將の津川左近とに之を掌らせた。

母衣騎(矢を防ぐものを背に)

八月、盡會大老奉行以下爲誓誓曰「虛心協謀、務輔嗣子、勿樹私黨、勿忘公義、勿變更、勿漏泄、勿不告而結婚、勿不告而交質、嗣子六歲未能親政、前田保之於大坂、而德川視事於伏見、封邑行罰、皆俟嗣子之長。命淺野彈正石田三成曰「汝赴朝鮮、收我兵、不能收則遣家康。家康有不可往則遣利家。二人遣一雖有百萬敵、不能尾也。」十三日、疾大篤將暝、已而張目曰「勿使我十萬兵爲海外鬼。」言畢而薨。年六十三。群臣秘喪、使前田玄以密葬之于阿彌陀峯。九月三日、德川公與諸侯盟、無貳於嗣君。遂使淺野石田以遣命赴肥前、密召在韓諸將。

訓 八月、盡く大老奉行以下を會し誓をなす。誓に曰く「心を虚しうして謀を協せ、務めて嗣子を輔け、私黨を樹つること勿れ。公義を忘る、勿れ。變更する勿れ。漏泄する勿れ。告げずして婚を結ぶ勿れ。告げずして質を交ふる勿れ。嗣子六歳、未だ親政を親らざる事勿れ。前田は之を代りて、後を継ぎ、之を輔け、之を養ふ事勿れ。」

伏見に視、邑を封じ罰を行ふこと、皆嗣子の長するを俟て」と。淺野彈正石田三成に命じて曰く「汝朝鮮に赴き我が兵を收めよ。收むる能はざれば則ち家康を遣はせ。家康往くべからざる有れば則ち利家を遣はせ。二人一を遣はせば、百萬の敵有り」と雖も尾すること能はざるなり」と。十三日、疾大に篤し。將に暝せんとす。已にし目を張つて曰く「我が十萬の兵をして海外の鬼と爲らしむる勿れ」と。言畢つて薨す。年六十三なり。群臣、喪を秘し、前田玄以をして密に之を阿彌陀峯に葬らしむ。九月三日、德川公諸侯と、嗣君に貳無きを盟ひ、遂に淺野石田をして、遣命を以て肥前に赴き、密に在韓の諸將を召さしむ。

八月、全部大老奉行以下の家來を集めて誓をさせた。其の誓の言葉に曰ふには「心を虚しくし、力を協せて謀をなし、務めはげんで嗣子を助け、勝手に黨を組んではならぬ。公の義理を忘れるな。従來の式例を更めるな。機密を漏らすな。お上に告げずに縁を結ぶな。お上に告げずに入質を交換するな。嗣子は六歳でまだ親しく政事をとられない。前田は大坂で之を守り立て、それから後に行ふやうにせよ」と。淺野彈正と石田三成とに命じて行ふことは、皆嗣子の成長するのを待つて、それから後に行ふやうにせよ」と。淺野彈正と石田三成とに命じて曰ふには「汝等朝鮮に行き、我が兵を引上げさせよ。引上げることが出来ないならば家康をやれ。若し家康が萬一行かれないならば利家をやれ。二人の内どちらか一人をやつたら、百萬の大軍があつても、後を追つかけることは出来ないぞ」と。十三日には病氣が非常に重くなつた。最早目をとちて息を引くのかと見えた。暫くして目を見張つて、曰ふには「我が十萬の兵を外國で殺してはならぬぞ」と。さう言ひ終つて薨じた。年は六十三歳であつた。家來は皆々喪をかくし、前田玄以をして秘に阿彌陀峯に葬らせた。九月三日、德川公は諸侯と共に世嗣に二心のないことを誓ひ合ひ、遂に淺野石田をして遣言にもとづいて肥前に行かせ、秘に朝鮮にある諸將を召し

返すやうにさせた。

諸將之與明軍相持也、明兵益至、邢玠萬世德促諸軍進攻、劉綎患順天、帶山海不可近、則思沈惟敬所為、欲誘而取之、遣間使來告行長曰、先鋒嚮與我國盟矣、因清正誑惑關白、復致有今日、今兩國兵老、吾欲親與先鋒會、以成前盟也、行長不信、瞰縱單騎候於道、則信之、將出赴會、而我兵降在縱部者、為泄其謀、行長驚還、縱恚而來攻、行長擊卻之。

訓 諸將の明軍と相持するや、明兵益々至る。邢玠・萬世德、諸軍を促して進み攻む。劉綎、順天の山海を帯びて近づく可からざるを患へ、則ち沈惟敬の爲す所を思ひ、誘つて之を取らんと欲す。間使を遣はし來り行長に告げしめて曰く、「先鋒嚮に我が國と盟ふ。清正關白を誑惑するに因り、復今日有るを致す。今兩國の兵老る。吾れ親ら先鋒と會し以て前盟を成さんと欲するなり」と。行長信ぜず。綎の單騎、道に候ふを瞰て則ち之を信じ、將に出で、會に赴かんとす。而して我が兵の降つて綎の部に在る者、爲めに其の謀を泄す。行長驚き還る。縱恚つて來り攻む。行長擊つて之を卻く。

通 諸將は明軍と對陣して居たが、明の兵隊は益々やつて來た。邢玠や萬世德は諸軍を督促して、進み攻めさせた。劉綎は山海を帯びて近づく可からざるを患へ、則ち沈惟敬の爲す所を思ひ、誘つて之を取らんと欲す。間使を遣はし來り行長に告げしめて曰く、「先鋒嚮に我が國と盟ふ。清正關白を誑惑するに因り、復今日有るを致す。今兩國の兵老る。吾れ親ら先鋒と會し以て前盟を成さんと欲するなり」と。行長信ぜず。綎の單騎、道に候ふを瞰て則ち之を信じ、將に出で、會に赴かんとす。而して我が兵の降つて綎の部に在る者、爲めに其の謀を泄す。行長驚き還る。縱恚つて來り攻む。行長擊つて之を卻く。

語釋 沈惟敬所爲(和陸を申し込み、會盟に託して我が) ○泄其謀(明人の詐謀を日本)

清正亦竣蔚山役糧多兵勇人思一戰九月麻貴至溫井懲前敗堅壁不敢出清正屢出戰擊走貴兵立花宗茂在釜山自請以五百人往救清正值明五千人于元潰乘曉霧薄擊克之遂追北或以衆寡不敵止之宗茂曰敵馬足亂可追不追視我寡也追擊復克之既舍逸明囚設五伏以待曰吾乃視寡而誘之也夜半明兵來襲伏起復克之明日未至蔚山數十里與清正夾擊麻貴大克之

訓 清正も亦蔚山の役を竣へ、糧多く兵勇に、人一戰を思ふ。九月、麻貴、溫井に至る。前敗に懲りて、

壁を堅くして敢て出でず。清正屢々出で、戦ひ、撃つて貴の兵を走らす。立花宗茂、釜山に在り。自ら請うて、五百人を以て往いて清正を救ふ。明の五千人に元漬に値ふ。曉霧に乗じ薄撃して之に克ち、遂に北ぐるを追ふ。或人、衆寡敵せざるを以て之を止む。宗茂曰く「敵の馬足亂る。追ふ可し。追はざれば、我が寡きを視すなり」と。追撃して復之に克つ。既に舍し、明の囚を逸し、五伏を設け以て待つ。曰く「吾れ乃ち寡を視して之を誘ふなり」と。夜半明兵來り襲ふ。伏起つて復之に克つ。明日未だ蔚山に至らざる數十里にして、清正と夾んで麻貴を撃ち、大に之に克つ。

通釋 清正も亦蔚山の工事を竣へ、食糧も多く、兵士も勇氣に溢れて、人々皆戦を待ち望んで居た。九月、麻貴が温川に來た。前の敗戦に懲りて、城壁を堅固にして、決して出で、戦はうとはしなかつた。それで清正の方から度々出で行つて戦ひ、攻め撃つて麻貴の兵を走らせた。立花宗茂はこの時釜山に居た。自分から願ひ出て五百人の兵を率ゐて清正を救ひに來た。元漬といふ處で明の五千の兵と出會つた。朝霧がかゝつて居て、先がよく見えないのを利用して、ずつと近寄つて攻撃して之に打ち勝つた。遂に逃げるのを追はうとした。すると或人が、向ふは多く、こちらは少いから、とても相手にならないと言つて引き止めた。宗茂は曰ふに「敵の隊伍は亂れて居る、追撃していゝのだ。若し追撃しないならば、其の事が却つてこちらの少ない兵力を示すことになるのだ」と。追撃して再び勝つた。既に宿舎に着いてからは、明の捕へられた者どもを放してやり、五個所に伏兵を置いて待つて居た。そして言ふには「自分は此の様にして、兵力の少ないことを見せて、敵を誘ふのだ」と。果して夜中頃に明の兵が襲來した。伏兵が起つて又々之に打ち勝つた。翌日、蔚山へはまた數十里もある地點で、

語釋 温井・元漬(慶尙道) ○前敗(蔚山の)

是時義弘及子忠恆在新寨與董一元夾晉江而軍。芋國器聞島津氏與豊臣氏爲宿仇、以爲可間也。乃作檄數秀吉罪、遣辯士以搖義弘。義弘叱而卻之。國器又說一元曰「義弘築望津・東陽・泗川・永春・昆陽・金海・固城新寨八壘、勢如長蛇。望津其首也。擊其首、餘易制耳。」一元然之。會明捕虜郭國安在望津、送欵於一元、約爲內應。舉火爲信。至期國器引兵臨江。我兵亦出寨臨江。已而寨中火起。吾兵顧而救之。明兵乃渡。陷望津。忠恆在新寨、欲赴援。義弘曰「未可望津。兵退守泗川。而一元已分兵襲永春・昆陽。燒其積聚。悉軍渡江。遂乘夜襲泗川。我守將出戰。斬明驍將李寧。虛得功。潰圍走新寨。忠恆復請赴援。義弘曰「未可。」一元已取數壘。而島津氏不出。意甚輕之。進燒東陽。倉火晝夜不滅。遂向新寨。國器止之。勸先攻金海・固城。以奪其羽翼。不聽。

訓讀 是の時義弘及び子忠恆、新寨に在り、董一元と、晉江を夾んで軍す。芋國器、島津氏の豊臣氏と宿仇たるを聞き、以て間すべしと爲す。乃ち檄を作つて秀吉の罪を數め、辯士を遣はして以て義弘を搖す。義弘叱して

之を卻く。國器、又一元に説いて曰く「義弘、望津、東陽、泗川、永春、昆陽、金海、固城、新寨の八壘を築く。勢、長蛇の如し。望津は其の首なり。其の首を撃たば餘は制し易きのみ」と。一元之を然りとす。會々、明の捕虜、郭國安、望津に在り。歎を一元に送り、約して内應を爲し、火を擧げて信と爲す。期に至つて國器兵を引いて江に臨む。我が兵、亦寨を出で、江に臨む。已にして寨中火起る。吾が兵、顧みて之を救ふ。明の兵、乃ち渡り、望津を陥る。忠恆、新寨に在り、起き援けんと欲す。義弘曰く「未だ可ならず」と。望津の兵、退いて泗川を守る。而して一元、已に兵を分ちて、永春、昆陽を襲ひ、其の積聚を焼き、軍を悉して江を渡り、遂に夜に乗じて泗川を襲ふ。我が守將出で、戦ひ、明の驍將李寧、虜得功を斬り、圍を潰して新寨に走る。忠恆復起き援けんと請ふ。義弘曰く「未だ可ならず」と。一元已に數壘を取る。而して島津氏出でず。意甚だ之を輕んじ、進んで東陽の倉を燒く。火、晝夜滅せず。遂に新寨に向ふ。國器之を止め、先づ金海、固城を攻め以て其の羽翼を奪はんことを勸む。聽かず。此の時、義弘と其の子忠恆は新寨に居て、董一元と晉江を夾んで陣取つてゐた。芋國器は、島津が豊臣に對して舊い怨があると聞いて、間を割くことが出来ると思ひ込んだ。そこで廻し文を作つて秀吉の罪を書き並べ、辯舌のうまい者を寄越して、義弘の心を搖かさうとした。義弘は吐り飛ばして之を受附けなかつた。國器は又一元に説いて曰ふには「義弘は望津、東陽、泗川、永春、昏陽、金海、新寨などの八つのとりでを造らへた。其の様子は大蛇の様である。その内で望津が一番大事な首にあたる所だ。それを撃つたならば、あとは制し易い」と。一元もこの説に賛成した。すると丁度明の捕虜の郭國安といふ者が望津に居た。彼は一元に内通して裏切を約束し、火を擧げて合圖としようと言つた。約束の時期になると、國器は兵を率ゐて川のほとりに出た。我が兵も亦とりでを出て、望津の邊に出た。すると間もなく、とりでの中、火が起つた。

した。其の内に明兵は川を渡つて望津は破れて終つた。忠恆は新寨に居て、援けに行き度いと思つたが義弘が曰ふのに「まだいけない」と。望津の兵は退いて泗川を守つた。其の間に一元は兵を分けて永春と昆陽を襲ひ、其處にあつた軍需品を焼き拂ひ、軍を一緒に合せて川を越え、遂に夜を利用して泗川を攻めた。城を守つて居た我が將は城を出て戦ひ、明の強い大將李寧や虜得功を斬り殺し、敵の圍を突き破つて新寨へ走り込んだ。忠恆は再び援けに行き度いと願つた。義弘は「まだいけない」と言つて許さない。一元はもう數個所のとりでを落した。而して島津氏はまだ戦を交へない。そこで心に大に之を輕蔑し、進んで東陽の倉を燒いた。其の時の火は晝夜燃え續けてゐた。遂に一元は新寨に向つた。國器は之をとめて、先づ金海と固城を攻めて新寨の羽翼に當るものを取れと勸めた。併し聞き入れなかつた。

新寨・晉江(慶尚)

十月朔、一元合兵、以國器及葉邦榮、彭信古爲先鋒、以藍芳威爲後軍、攻新寨、自卯至巳、以木砲摧大門及城牆、薄塹拔柵、城兵殊死戰、會砲炸烟焰四迸、明陣亂、義弘目忠恆曰「可以出矣」忠恆唯而起、與數千騎關門直衝明陣、明陣皆披靡、而國器邦榮、以萬人橫入于城、義弘豫勒五千人迎擊走之、芳威望見先走、明軍遂大潰、義弘忠恆追奔逐北、斬首三萬餘級、明兵爭走相擠、伏尸二百餘里、我軍以亡糧、不復窮

追至望津乃還。而秀吉之計適至。諸將潛相告言。稍稍治歸裝。而明都御史在吳者。諜知秀吉沒。報告明主。明主大喜。舉朝相賀。於是趣邢玠等躡我軍。郭國安亦走告之。明群帥群帥創新寨之敗。不敢進。

十月朔、一元兵を合せて國器及び葉那榮・彭信古を以て先鋒と爲し、藍芳威を以て後軍と爲し、新寨を攻め、卯より巳に至り、木砲を以て大門及び城牆を摧き、塹に薄り柵を抜く。城兵殊死して戦ふ。會々砲炸け烟焰、四に迸る。明の陣亂る。義弘、忠恆に目して曰く「以て出づべし」と。忠恆、唯して起ち、數千騎と門を關いて直に明の陣を衝く。明の陣皆披靡す。而して國器・那榮、萬人を以て横に城に入る。義弘、豫め五千人を勸して、迎へ撃つて之を走らす。芳威、望見して先づ走る。明軍遂に大に潰ゆ。義弘、忠恆、奔るを追ひ北ぐるを逐ひ、斬首三萬餘級。明兵争ひ走り相擠し、伏尸二百餘里。我が軍糧じきを以て復窮追せず。追うて望津に至つて乃ち還る。而して秀吉の計適至る。諸將潛に相告言し、稍稍歸裝を治む。而して明の都御史の吳に在る者、諜して秀吉の没せしを知り明主に報告す。明主大に喜び舉朝相賀す。是に於て、邢玠等を趣し、我が軍を躡せしむ。郭國安も亦走つて之を明の群帥に告ぐ。群帥新寨の敗に創りて、敢て進まず。

十月一日一元兵を皆合せて、國器や葉那榮・彭信古を先鋒部隊とし、藍芳威を後備隊として新寨に攻め寄せ、午前の六時から十時までの間、木砲を以て大門や垣根を打ち摧き、塹に間近く攻め寄せ、逆段木を抜き取つた。城の兵は死を決して戦つた。折しも明軍の大砲が發けられて、煙や粉が四方に飛び出した。明軍の陣形が

亂れた。義弘はすぐに忠恆に目くばせをして曰ふには「今こそ打つて出る時だ」と。忠恆は合點して身を躍らし、數千騎と共に門を押し開いて眞直に明の陣地へ突き進んだ。明の陣は忽ちに皆道を披いて靡き伏した。然るに國器と那榮とは一萬の兵をつれて横合から城に押入らうとした。義弘は前々から五千の兵をまとめて置いて、之を迎へ撃つて退けた。芳威は遠くから此等の様子を見て、先づ逃げ出した。明軍はとうとう滅茶くんに破られて終つた。義弘と忠恆は逃げて行く敵兵を追つかけて、首を斬ること三萬以上であつた。明兵は先を争つて逃げ走り、お互ひに押し合つて、地に伏した死骸は二百里餘りも續いた。併し我が軍は糧食が乏しかつたので、此の上追ひ詰めることは止めた。望津まで追つかけて、歸つたのである。其時丁度秀吉の死んだ知らせが着いた。諸將は内々に相知らせ、そろそろ歸り支度に取掛つた。そして又明の都御史で吳に居た者が、間者を放つて秀吉の死んだのを嗅ぎ付け、明主に知らせた。明主は非常に喜び、朝廷の人々は残らずお互ひに祝ひ合つた。そこで邢玠等を督促して、我が軍を追撃させた。捕虜の郭國安も亦走つて秀吉の死去の事を明の大將連に知らせた。大將連は新寨の敗北に懲りて、進出しようとしなかつた。

木砲(木で作つた大砲)

當是時我邦訛言。明大舉扼我兵歸路。德川前田二老皆欲親往。衆議止之。使藤堂高虎代之。來至行臺。得新寨捷書。乃止。而釜山軍已從秀秋。還對馬。清正義弘次收兵還。行長亦欲還。而劉綎復來圍之。清正與義弘返擊。拔行長。皆上舟。陳璘鄧子龍

李舜臣・陳蠶・馬文煥・陶明宰等、以兵艦數千艘、要之海中。清正已去。義弘圍且卻、至加德島。明兵四集於行長。行長厲士卒、止戰。會、明人失火器、反中其船。我兵因奮擊、慶其兵、斬子龍、舜臣來救。亦射殺之、進圍。幾獲之、而蠶・文煥繼至、銃炮交發、盡焚我船。行長上一島、奪敵寨、據之。明兵艦環守焉。行長乘夜、獨遁歸於義弘。義弘返、載其餘衆、與蠶・明宰戰、擒明宰而還。皆至加德。劉繼以生兵來攻。義弘行長擊卻之。明軍不敢復追躡。我軍盡達對馬。

訓讀 是の時に當り、我が邦訛言す、明大舉して我が兵の歸路を扼すと。徳川・前田の二老、皆親ら往かんと欲す。衆議之を止む。藤堂高虎をして之に代らしむ。來つて行臺に至り、新寨の捷書を得て、乃ち止む。而して釜山の軍已に秀秋に従つて對馬に還る。清正・義弘次いで兵を收めて還る。行長も亦還らんと欲す。而して劉繼復來つて之を圍む。清正・義弘と返り撃ち、行長を抜き皆舟に上る。陳璘・鄧子龍・李舜臣・陳蠶・馬文煥・陶明宰等、兵艦數千艘を以て之を海中に要す。清正已に去る。義弘圍ひ且つ卻き、加德島に至る。明兵行長に四集す。行長士卒を厲して止り戰ふ。會く明人火器を失し、反つて其船に中る。我が兵、因つて奮撃して其の兵を盡にし、子龍を斬る。舜臣來り救ふ。亦射て之を殺し、進んで礮を圍む。幾ど之を獲んとして、蠶・文煥繼ぎ至り、銃炮交々發す。

義弘に歸す。義弘返り、其餘衆を載せ、蠶・明宰と戦ひ、明宰を擒にして還り、皆加德に至る。劉繼、生兵を以て來り攻む。義弘行長撃つて之を卻く。明軍敢て復追躡せず。我が軍盡く對馬に達す。

通釋 此の當時、我が國內では間違つた噂を立てた。それは明が大兵を擧げて、我が日本兵の歸り路を押へてあるといふのであつた。徳川・前田の二大老は、皆自分で親ら助けに行かうと思つた。多勢の者は之を止めさせる意見であつた。藤堂高虎をして代つて行かせた。高虎は假本營に到着すると、新寨で島津が勝つたといふ報知を得て、國內の噂は誤傳だと知つたので、そのまま渡海を止めた。そして釜山の軍は既に秀秋に従つて對馬へ歸り着いた。次いで清正と義弘が兵を收めて歸途についた。行長も亦歸らうと思つて居た。すると劉繼は再びやつて來て行長を取り圍んだ。清正は義弘と共に引き返して紙を撃ち、行長を救ひ出して、一同皆、船に乗つた。すると鄧子龍・李舜臣・陳蠶・馬文煥・陶明宰の面々が兵艦數千艘を浮べて、之を海中に待ち受けて居た。清正はもう去つた後であつた。義弘は戦ひながら段々退いて加德島に着いた。そこで明兵は取り殘された行長に四方から撃つて掛つた。行長は士卒を元氣づけて止まつて戦つた。偶々明兵が火器の扱ひ方を間違つて却つて自分の船に丸が中つた。我が兵はそれに因つて奮ひ戦ひ、其の兵を皆殺しにして、子龍を斬つた。舜臣が救ひに駆け付けた。之も射殺し、進んで礮を取り圍んだ。もう少しのことでのを生捕らうとしたが、蠶や文煥が引續いて來て鐵砲や大砲を次々と打つて、すつかり我が船を燒いて終つた。行長はとある島に上り、敵の寨を占領して、此處に立て籠つた。明の兵艦は之を取り巻いて守つて居た。行長は夜を利用して單身逃げ出し、義弘の所へ來た。義弘は引き返して、行長の殘した兵士を船に載せ、蠶・明宰等と戦ひ明宰を生捕つて引き上げ、一同加德島に着いた。劉繼が新手の兵を率ゐて攻めて來た。義弘と行長は之を撃ち退けた。明軍はもう追ふこともしなかつた。我が軍は全部

對島に到着した、

一島(南海島)

十一月、諸將整軍至那古耶。兩奉行迎之、宣秀吉遺命。諸將皆泣。三成曰、公等詣伏見、當各之國。來秋會同、以茗讌相招。清正曰、諸君好爲茗讌、我守孤城、七年矣、勞悴讒存、母茗酒、當炊稗粥答之耳。三成嘆之。先是、行長德、清正救順天也、欲釋憾焉。清正曰、吾亦欲之矣。如子善治部、何自是相讎益深。於是諸將相率詣伏見、謁秀頼。諸老慰勞之、令罷之國。以嗣君猶幼、國家多難、不敢自逸。埃明年去。明年、大老奉行論征韓功、賜義弘以公田、在薩摩者四萬石。清正、行長以下、得賞有差。

十一月、諸將軍を整へて那古耶に至る。兩奉行之を迎へ、秀吉の遺命を宣ふ。諸將皆泣く。三成曰く、「公等伏見に詣り、當に各々國に之くべし。來秋會同し、茗讌を以て相招かん」と。清正曰く、「諸君好んで茗讌を爲す。我れ孤城を守ること七年、勞悴纒に存す。茗母く酒母し。當に稗粥を炊いで之に答ふべきのみ」と。三成之を嘆む。是より先き、行長、清正の順天を救ふを徳とするや、憾を釋かんと欲す。清正曰く、「吾も亦之を欲す。子、治部に善きを如何」と。是より相讎とするに益々深し。是に於て諸將相率ひて伏見に詣り、秀頼に謁す。諸老之を慰勞し、罷めて國に之かしむ。嗣君猶幼く、國家多難なるを以て敢て自ら逸せず。明年を俟つて去る。

明年大老奉行、征韓の功を論じ、義弘に賜ふに公田の薩摩に在る者四萬石を以てす。清正、行長以下賞を得る差あり。

十一月、諸將は軍容を立派に整へて那古耶に着いた。淺野・石田の兩奉行は之を迎へて、秀吉の遺言を述べた。諸將は皆泣いて悲しんだ。暫くして三成が曰ふのに「貴公等は先づ伏見に行き、それから各自、御自分の國へ戻るやうにし給へ。來年の秋には皆集つて茶の湯の會を催して、相互に招待し合ふことにしよう」と。清正がいふのに「諸君は茶の湯の會が好きだ。自分は萬山の孤城を守ること正に七年であつた。今は疲れやつれて、やつと生き永らへて居るのだ。お茶も無い、又酒も無い。まあ稗のお粥でも炊いて御返禮をしよう」と。三成は此の言葉を聞いて心の内に怨み悪んだ。是より前に、行長は、清正が順天を救つて呉れたのを有り難く思ひ、遺恨を捨て、仲良くしようと考えた。併し清正は曰ふのに「自分もさうありたいと思つては居る。併し君は三成と惡意だから駄目だ」と言つた。これからお互ひに讎とすること益々深まつて行つた。是に於いて、諸將は連れ立つて、伏見に來り、秀頼に面會した。大老・中老の諸公は色々勞を慰め、それが濟むと引き上げて、皆、自らの領分へ行かせることにした。併し諸將は世嗣の君がまだ幼く、又國內が物騒がしかつたので、強ひて自分の休息を求めようとはしないで、翌年を待つて立ち去ることにした。翌年になると、大老や奉行は征韓諸將の手柄を評議し、義弘には公田の内薩摩に在る分、四萬石を與へた。清正、行長以下賞を賜はるること各々差等があつた。

公田(お上の田地)

日本外史解義卷十七

日本外史解義 卷十七

德川氏前記

豊臣氏下

慶長四年正月十日、前田利家奉^{ジテ}秀頼^ヲ、徙^リ大坂^ニ、抱坐^ニ正廳^ニ。德川公以下、牧伯將吏來^ツ謁^ス之。德川公還^{ツテ}、居伏見^ニ、第^ニ視事^ス。五奉行更^{ヘシテ}遣兵^ヲ守城^ヲ。皆如^ク秀吉^ノ遺命^ニ。而德川氏威權獨熾^リ。利家謂^ヒ其侮^レ己^ヲ、乃忿恚^{シテ}欲罷^メ就國^ニ。細川忠興爲^リ利家戚屬^ニ、引^{イテ}遺命^ヲ諫止^ス之。是月二十一日、大老奉行連署^{シテ}、謂^フ德川公曰^ク、足下^ノ行事多^ク可疑^キ者^{アリ}。背^キ太閤^ノ遺令^ニ、與伊達、福島、蜂須賀、三家^ノ私^ニ結^ブ婚姻^ヲ。是欲^ス何^レ爲^ル也。宜^{シク}解^キ政^ヲ就國^ニ。又詰^ル三家^ヲ。三家不服^セ。三家與黑田、淺野、池田、藤堂、細川、京極、有馬、金森、山岡諸將^ノ、皆嫉^ミ石田三成^ヲ、爭^{ツテ}附^キ德川氏^ニ、仇^ニ視^ス。

他、侯伯、三、中老議曰、「遺命所謂居間和解者、在於此。」二月、乃請大老奉行尋盟于伏見。

慶長四年正月十日、前田利家、秀頼を奉じて大坂に徙り、抱いて正廳に坐す。徳川公以下の牧伯・將吏來つて之に謁す。徳川公還つて伏見の第に居つて事を視る。五奉行更々兵を遣はして城を守る。皆秀吉の遺命の如くす。而して徳川氏の威權獨り熾なり。利家其己を侮ると謂ひ、乃ち忿恚して、罷めて國に就かんと欲す。細川忠興・利家の威屬たり。遺命を引いて之を諫止す。是の月二十一日、大老・奉行、連署して徳川公を諭めて曰く、「足下の行事疑ふべきもの多し。太閤の遺令に背き、伊達・福島・蜂須賀の三家と、私に婚姻を結ぶ。是れ何をか爲さんと欲する。宜しく政を解き國に就くべし」と。又三家を詰る。三家服せず。三家、黒田・淺野・池田・藤堂・細川・京極・有馬・金森・山岡の諸將と、皆石田三成を嫉み、争つて徳川氏に付き、他の侯伯を仇視す。三、中老、議して曰く、「遺命に所謂、間に居つて和解せよとは此に在り」と。二月、乃ち大老・奉行に請うて、盟を伏見に尋む。

慶長四年正月十日、前田利家は秀頼を奉じて大坂に移り、之を抱きかへて大書院に坐した。徳川公以下の大名諸役人が入つて来てお目通りをした。徳川公は伏見の邸に戻つて政事を見た。五奉行は順番に兵を出して伏見城を守つた。すべて秀吉の遺命通りにした。所が徳川氏の威權は特に盛となつた。利家は家康が自分を侮つてあると想像して腹を立て、後見の役を止めて本國に歸らうとした。細川忠興は利家の縁家であつた。秀吉の遺命を引いて之を諫め止めた。この月の二十一日、大老・奉行、連署して徳川公を諭めて曰く、「足下の行事疑ふべきもの多し。太閤の遺令に背き、伊達・福島・蜂須賀の三家と、私に縁組をした。是れ何をか爲さんと欲する。宜しく政を解き國に就くべし」と。又三家を詰る。三家服せず。三家はそれに服しなかつた。この三家は、黒田・淺野・池田・藤堂・細川・京極・有馬・金森・山岡の諸將と共に、皆石田三成を憎んで、我れ勝ちに徳川氏に付き、他の大名達を仇敵視してゐた。三、中老が相談して曰ふには、「御遺言に、間に立つて仲裁せよとあるのは、このことだ」と。そこで二月、大老と奉行に、伏見で再び盟を温めるやうに頼んだ。

正廳(表座敷、大座敷といふ意味から、正式に政治を取る場所を指す。當時の大書院)

利家有疾。加藤清正與細川忠興・淺野左京大夫、勸利家與疾赴伏見。三月、徳川公亦往大坂。利家病甚。扶而起、泣囑之曰、「吾將旦夕入地。願公盡心以輔嗣君。」徳川公曰、「諾。」利家次子利政、欲刺徳川公。爲其兄利長所止。三成等會議于小西行長宅。曰、「内府專橫、蔑視嗣君。諸老所共憤也。不可不速除之。」行長因建襲擊之策。前田玄以素通欵徳川氏。故發異議沮之。三成又欲以火器襲之。伏見第延細川忠興告謀。忠興復沮止之。走告徳川氏。教之徙居于向島。行長曰、「諸公明文墨而瞞兵機。乃爲豎

子所誑大谷吉隆聞諸奉行之謀謂增田長盛曰吾視諸公所爲不務利嗣君而專害内府内府苟貳於嗣君宜埃其罪著而討之天下誰有棄此歸彼者哉今自我開釁彼則有辭是不獨自禍乃禍嗣君也長盛以告三成三成弗肯

訓 利家疾有り。加藤清正、細川忠興、淺野左京大夫と、利家に勧め、疾を興して伏見に赴かしむ。三月、徳川公も亦大坂に往く。利家病甚し。扶けられて起き、泣いて之に囑して曰く「吾れ將に旦夕地に入らんとす。願はくは公、心を盡し以て嗣君を輔けよ」と。徳川公曰く「諾」と。利家の次子利政、徳川公を刺さんと欲す。其の兄利長の止むる所と爲る。三成等、小西行長の宅に會議して曰く「内府專横、嗣君を蔑視す。諸老の共に憤る所なり。速に之を除かざるべからず」と。行長、因つて襲撃の策を建つ。前田玄以素より歎を徳川氏に通ず。故に異議を發して之を沮む。三成又火器を以て之を伏見の第に襲はんと欲す。細川忠興を延いて謀を告ぐ。忠興復之を沮止し、走つて徳川氏に告げ、之をして向島に徙り居らしむ。行長曰く「諸公、文墨に明にして兵機に暗し。乃ち豎子の誑す所と爲る」と。大谷吉隆、諸奉行の謀を聞き、増田長盛に謂つて曰く「吾れ諸公の爲す所を視るに、嗣君を利するを務めずして、専ら内府を害す。内府苟も嗣君に貳あらば、宜しく其の罪の著はるるを俟つて之を討つべし。天下誰か此を棄て、彼に歸する者あらんや。今、我より釁を開かば、彼れ則ち辭あらん。是れ獨り自ら禍するのみならず、乃ち嗣君に禍するなり」と。長盛以て三成に告ぐ。三成肯んぜず。

興で伏見に行かせた。三月、徳川公も大坂に出向いた。利家は病氣が重態に陥つた。人に扶けられて起き上り、涙を流して家康に頼んで曰ふには「私はもう今日明日に息を引き取らぬと思ふ。貴公どうぞ一心に世繼の君を助けて下されよ」と。家康は「承知致した」と曰つた。利家の次男の利政が徳川公を刺さうとした。併し兄の利長に止められた。三成等は小西行長の家で會議をして曰ふには「内府はわが儘勝手で世繼の君を無いがしろにしてゐる。諸大老は皆腹を立てゝゐるのだ。早くやつ、けて終はねばならぬ」と。行長はそれで家康を急に攻め殺す策をたてた。所が前田玄以は以前から徳川氏に内應してゐた。異議を出して邪魔立てをした。三成は又火繩銃で伏見の邸を不意討したいと思つた。細川忠興を近づけて謀を話した。忠興もやはりそれをさへきりとめて、直ぐ様それを徳川氏に知らせ、向島に移るやうにさせた。行長が曰ふには「諸公は文事には達してゐられるが、どうも軍の機略に通じない。却つて奴家康に欺かれてゐるのだ」と。大谷吉隆は諸奉行の謀を聞き、増田長盛に向つて曰ふには「私は諸公の爲され方を見ると、世繼の君のお爲めになるやうにしないで、内府をとつちめよ」と許りしてゐる。一體内府が若君に二心を抱いてゐるといふなら、その罪の證據が明かに見えて來た時、討つが宜しい。さうなれば、正しいこちらを棄て、誰が徳川方に屬くなど、天下のどこにあらう。今こちらから仲違ひをしかけたなら、向ふには（無實の罪といふ）言ひ草が出来る。それでは諸君御自分方の損になる許りでなく、却つて世繼の君に禍を及ぼすことになる」と。長盛はそれを三成に話した。三成はその言ふことをきかなかつた。

語釋 内府(内大臣) ○向島(大)

文祿之役、三成・長盛・吉隆在朝鮮。聞淺野・黑田來、就議軍事。兩人方圍基、不顧三成等。三成等怒而出。兩人收局、問侍者曰、「三奉行何不來。」侍者告故。乃使人呼返之。三成等不肯。爲惡言而去。終惡兩人於秀吉。兩人之子深銜之。於是與加藤清正・加藤嘉明・福島正則・池田輝政・細川忠興、連署罪狀三成、請誅之。德川公不許。乃如大坂、請於利家。利家疾篤。三成方視之。七將不得達。乃各自治兵、欲擊殺之。未發也。

訓讀 文祿の役に、三成・長盛・吉隆朝鮮に在り。淺野・黑田來ると聞き、就いて軍事を議せんとす。兩人方に基を圍んで三成等を顧みず。三成等怒つて出づ。兩人局を收め、侍者に問うて曰く、「三奉行何ぞ來らざる」と。侍者故を告ぐ。乃ち人をして之を呼び返さしむ。三成等肯んぜず。惡言を爲して去り、終に兩人を秀吉に惡す。兩人之子深く之を銜む。是に於て、加藤清正・加藤嘉明・福島正則・池田輝政・細川忠興と、連署して三成を罪狀し、之を誅せんと請ふ。德川公許さず。乃ち大坂に如き利家に請ふ。利家、疾篤し。三成方に之を視る。七將達するを得ず。乃ち各自自ら兵を治めて之を擊殺せんと欲す。未だ發せず。

通釋 文祿の役で、三成・長盛・吉隆は朝鮮に居た。淺野と黑田が來たと聞いて、軍事の相談にその宿所に行つた。所が二人は丁度基を打つてゐて、三成達を構はなかつた。三成達は腹を立て、歸つて終つた。所で二人が基盤を仕舞ひ、侍者に「三奉行はどうして來ないのか」ときいた。侍者が事の次第を語つた。人々を呼んで返させた。三成らは承知しなかつた。惡口を吐いて歸り、終には二人を秀吉に惡く言つた。そこでこの二人の倅(淺野幸長、黒田長政)までそれを怨んでゐた。この時になつて、加藤清正・加藤嘉明・福島正則・池田輝政・細川忠興と連名し、三成の罪狀を並べ立て、誅殺のことを大老に願ひ出した。德川公はそれを許さなかつた。そこで大坂に行つて利家に頼んだ。利家は病氣が重態であつた。丁度三成が來て看病してゐた。それで七將はたうとう逢ふことが出来なかつた。そこで銘々に軍隊を整へて三成を攻め殺さうとした。併しまだ兵を起すに至らなかつた。

閏月三日、利家疾革。奮呼曰、「天下洶洶、吾不目嗣君成立而死、死不瞑矣。」遂卒。衆推其長子利長代之。列四大老之下。七將曰、「大納言既沒、三成必出。」欲要擊之。或走告三成。毛利・浮田・島津・上杉・佐竹、五家皆善於三成。佐竹義宣自伏見馳至。弔前田氏。因見三成于浮田氏。曰、「寧自歸於内府。」攜詣德川公。德川公納之。七將聞之、憤惋。追至伏見。或說德川公勿除三成。德川公大悟。遂諭七將弭兵。七將不得已聽之。又諭三成解政權、就封澤山。七將欲要擊之。見德川氏兵護送、乃止。上杉景勝與三成通謀。約、明歲東西舉兵、以討德川氏。四月、太閤廟成。詔、賜號豐國明神。

閏月三日、利家、疾革なり。奮呼して曰く「天下海海たり。吾れ嗣君の成立を目せずして死す。死するも瞑せず」と。遂に卒す。衆、其の長子利長を推して之に代らしめ、四大老の下に列す。七將曰く「大納言既に没す。三成必ず出でん」と。之を要撃せんと欲す。或ひと走つて三成に告ぐ。毛利・浮田・島津・上杉・佐竹の五家、皆三成に善し。佐竹義宣、伏見より馳せ至り、前田氏を弔し、因つて三成を浮田氏に見て曰く「寧ろ自ら内府に歸せよ」と。携へて徳川公に詣る。徳川公之を納る。七將之を聞いて憤慨し、追うて伏見に至る。或ひと徳川公に説いて三成を除く勿らしむ。徳川公大に悟り、遂に七將に諭して兵を弭めしむ。七將已むを得ずして之を聴く。又三成に諭して政權を解き、封に澤山に就かしむ。七將之を要撃せんと欲す。徳川氏の兵の護送するを見て乃ち止む。上杉景勝、三成と謀を通じ、明歳を俟ちて、東西兵を擧げ、以て徳川氏を討たんと約す。四月太閤の廟成る。詔して、號を豊國明神と賜ふ。

閏月三日、利家の病氣が危篤になつた。利家は一生懸命に聲を出して曰ふには「天下はどよめき騒いでゐる。己は世繼の君の生ひ立ちを見ないで死んで行く。死んでも死に切れない」と。たうとう亡くなつた。皆はその長男の利長を推薦して父に代らせ、四大老の末に列せしめた。七將が曰ふには「大納言が最早死んで終つた。三成も必定出て来るだらう」と。そして待ち伏せして討ち取らうとした。或る人が走つて三成に知らせた。毛利・浮田・島津・上杉・佐竹の五家は、前から皆三成と仲が好かつた。佐竹義宣は伏見から駆けつけて前田氏に悔を述べ、それから浮田氏の邸で三成に會つて曰ふには「いつそ内府の所に逃げ込め」と。そこで三成をつれて徳川公の所へ行つた。徳川公はそれを受け入れた。七將はそれをきいて口惜しがり、伏見まで追つかけて行つた。或る人が徳川公に、三成を殺させぬやうにと言つた。徳川公は「自分が遺父の命をよめる爲めに三成の存在

が必要であることに)はたと氣が付き、たうとう七將に諭して軍を止めさせた。七將は仕方なく承知した。徳川公はまた三成を諭して奉行の政權に關係することをやめ、澤山の領地に歸らせた。七將は又それを待ち伏せして討たうとした。徳川氏の軍隊が護送して行くのを見て、止めた。上杉景勝は三成と共謀し、明年になつたら、東西から兵をあげて徳川氏を討たうと約束した。四月、太閤の廟が落成した。詔を下して豊國明神と名を賜つた。自、秀頼徙大坂、伏見城無主。五月、黒田長政、堀尾吉晴等、請徳川公入城。如太閤故事。六月、毛利・浮田以下外征、諸將皆謁歸。七月、前田・上杉・佐竹三家亦之國。徳川氏久不覲秀頼。頗有物議。淺野・片桐等數、促之辭以疾。八月、乃往、遂留居西城。西城時爲秀頼嫡母淺野氏所居。於是淺野氏遜於京師。有流言、淺野彈正・大野治長・土方雄久、援前田氏以圖徳川氏。十月、放治長于下野、雄久于常陸、實彈正于武藏。府中下令北伐前田氏。細川忠興爲謝之。徳川氏徵前田利長、母爲質。十一月、徙之江戶。増田長盛・長束正家争之曰「遺令勿告而交質、盡與諸老議、弗肯」。利長泣而奉令。是歲、徳川公加封細川忠興、堀尾吉晴各五萬石。

訓讀 秀頼大坂に徙りしより、伏見城に主なし。五月、黒田長政・堀尾吉晴等、徳川公の城に入つて太閤の故

事の如くせんことを請ふ。六月、毛利・浮田以下外征の諸將皆歸す。七月、前田・上杉・佐竹の三家も亦國に之く。徳川氏久しく秀頼に觀せず。頗る物議あり。淺野・片桐等數々之を促す。辭するに疾を以てす。八月、乃ち往き、遂に留つて西城に居る。西城は時に秀頼の嫡母淺野氏の居る所たり。是に於て淺野氏京師に遷る。流言あり、淺野彈正・大野治長・土方雄久、前田氏を援けて以て徳川氏を圖ると。十月、治長を下野に雄久を常陸に放ち、彈正を武藏の府中に實き、令を下して北前田氏を伐つ。細川忠興、爲めに之を謝す。徳川氏、前田利長の母を徵して質と爲す。十一月、之を江戸に徙す。増田長盛・長束正家之を争うて曰く「遺令に、告げずして質を交ふる勿れと。盍ぞ諸老と議せざる」と。肯んせず。利長泣いて令を奉す。是の歳、徳川公、封を細川忠興・堀尾吉晴に加ふる。各々五萬石なり。

秀頼が大阪城に移つてから、伏見城には主人がなかつた。五月、黒田長政・堀尾吉晴等が、徳川公が、太閤時代のしきたりの様に伏見城に居ることを請うた。六月、毛利・浮田以下、朝鮮征伐に行つた諸將が、皆秀頼に拜謁しに歸國をした。七月、前田・上杉・佐竹の三家も本國に返つた。徳川氏は長らく秀頼に參觀しなかつた。それが大層評判になつた。淺野・片桐等が度々催促をした。所が病氣だと言ひ立て、斷つた。八月になると出かけて来て、そのまゝ、西の丸に留つてゐた。西の丸は當時、秀頼の嫡母淺野氏の居つた所である。徳川公が留つてゐるので、淺野氏は京都に隱居をした。この時分、流言があつて、淺野彈正・大野治長・土方雄久の三人が前田氏に加擔して徳川氏を滅ぼさうとしてゐるといふことであつた。十月、治長を下野に、雄久を常陸に追放し、彈正は武藏の府中に置き、前田氏を北伐する命令を下した。細川忠興が前田氏の爲めに詫びをした。徳川氏は前田利長の母を呼びよせて人質とし、十一月にそれを江戸に移した。増田長盛と長束正家が抗議をして曰ふには

「太閤の御遺言に、無斷で人質をやり取りしてはならぬとある。何故諸大老と相談をされないのか」と。徳川公は聞き入れようとしなかつた。利長は泣いて命に従つた。是の歳、徳川公は細川忠興と堀尾吉晴に夫々五萬石を加増した。

嫡母(庶子より父の正妻) ○府中(この時淺野氏の領地)

五年春、徳川公戒上杉景勝西上。答曰「我受太閤遺旨、鎮守東陲。何受内府令也。乃數其背盟十罪。徳川公大怒、議東伐上杉氏。夏、以其義女妻黒田長政、留兵於伏見。而自將諸軍東下。三成欲起兵乘其後。會大谷吉隆自其邑敦賀會師。三成使人要之、告以其謀。吉隆極言其非計。三成不肯。吉隆乃訣去。低回久之曰「吾與治部共仕太閤、舊相好也。今知其事不克、棄之非義。乃還。三成大喜、與長束正家皆赴大坂。見増田長盛定議。秋、遂移書遠近曰「内府有罪。嗣君命討之。苟念太閤恩誼者、宜來戮力。毛利輝元以下、侯伯來會者四十餘人。時東西諸侯妻子皆在大坂。三成收之。城中使輝元長盛守大坂。浮田秀家小早川秀秋島津義弘等將四萬人攻伏見城。小野木重勝等將二萬人攻田邊城。毛利秀元與長束正家僧惠瓊將三萬人攻阿濃

津京極高次等將二萬人徇北陸

五年春、徳川公、上杉景勝に西上を戒む。答へて曰く「我れ太閤の遺旨を受け、東陲を鎮守す。何ぞ内府の令を受けんや」と。乃ち其の盟に背く十罪を數む。徳川公大に怒り、東上杉氏を伐たんと議す。夏、其の義女を以て黒田長政に妻はせ、兵を伏見に留め、而して自ら諸軍に將として東下す。三成兵を起して其の後に乘せんと欲す。會々大谷吉隆、其の邑敦賀より師に會す。三成人をして之を要せしめ、告ぐるに其の謀を以てす。吉隆其の非計を極言す。三成肯んせず。吉隆乃ち訣し去り、低回すること久しくして曰く「吾れ治部と共に太閤に仕ふ。舊相好し。今、其の事克たざるを知つて、之を棄つるは義に非ず」と。乃ち還る。三成大に喜び、長束正家と皆大坂に赴き、増田長盛を見て議を定む。秋、遂に書を遠近に移して曰く「内府罪有り。嗣君命じて之を討たしむ。苟も太閤の恩誼を念ふ者は、宜しく來つて力を戮すべし」と。毛利輝元以下の侯伯、來り會する者四十餘人。時に東西諸侯の妻子、皆大坂に在り。三成、之を城中に收め、輝元・長盛をして大坂を守らしむ。浮田秀家・小早川秀秋・島津義弘等、四萬人に將として伏見城を攻め、小野木重勝等二萬人に將として田邊城を攻め、毛利秀元、長束正家・僧惠瓊と、三萬人に將として阿濃津を攻め、京極高次等二萬人に將として北陸を徇へしむ。

五年春、徳川公は上杉景勝に西上するやうに注意した。すると景勝が答へて曰ふには「余は太閤の遺旨を受けて東邊を鎮護してゐる。内府の命令などを聞いてたまるか」と。そこで家康が盟に背いた十ヶ條の罪を責めた。徳川公は非常に腹を立て上杉氏を東伐しようとして議した。夏、その義女を黒田長政に嫁せしめ、伏見に義女を留め、自ら諸軍を率ゐて東下した。三成は兵を起して其の留守につけ込まうとした。丁度その時大谷吉隆が領地の敦賀から徳川氏の軍に加勢する爲め出て來た。三成は人をやつて彼を待ちつけ、自分の謀を話させた。吉隆は言を極めてその計の拙いことを説いた。併し三成は承知しなかつた。そこで吉隆は別れて出たが、やや暫し行きつ戻りつした後に、曰ふのに「俺は治部と一緒に太閤へ仕へた。元からの仲善しだ。今事の成功せぬのが分つてゐるからといつて彼を棄てるのは道でない」と。そこで立ち戻つて來た。三成は非常に喜び、長束正家と皆で大阪に行き、増田長盛に會つて相談を定めた。秋、いよく遠近の諸侯に手紙を廻して曰ふには「内府は罪を犯してゐる故、お世繼の君が彼を討つやうに命ぜられた。苟且にも太閤の御恩誼を忘れぬものは、早速出て來て協力さるゝが宜しい」と。毛利輝元以下の大名の集り來たもの四十餘人。當時東西の諸大名の妻子は皆大阪に居つた。三成はそれらを城中に捕へ、輝元と長盛をして大阪を守らせた。浮田秀家・小早川秀秋・島津義弘等は四萬人を率ゐて伏見城を攻め、小野木重勝等は二萬人の將となつて田邊城を攻め、毛利秀元は長束正家・僧惠瓊と共に三萬人を率ゐて阿濃津を攻め、京極高次等は二萬人を率ゐて北陸を威服させることになつた。

田邊(後)

吉隆在敦賀。招北莊・大正寺・小松三城下之。前田利長與弟利政、爲徳川氏攻拔。大正寺遂欲攻北莊。北莊乞援於敦賀。吉隆乃自將赴援。或曰堀尾氏兵守府中。而在我後。不先取之。則進退皆難。吉隆曰北莊陷。則小松孤立矣。至若府中。則不必取也。

亦不可取也。即可取也、不可不分兵守之。分則兵寡、以寡對衆、是爲難耳。且彼必不敢要我矣。是我使敵守城也。我既卻北兵、以存諸城、則彼不攻而下矣。即夜五更、馳至北莊。利長、姉夫、中川宗伴在京師。將赴北陸。吉隆要而執之、令爲書給利長曰、內府西上將士多叛之、大坂兵逆擊之美濃、走之。遂發舟師、將取加賀。公宜早爲之備。利長得書、疑懼、引兵卻。府中果遂降於吉隆。會高次等至、合兵復大正寺、遂定越前、置守而南。

吉隆敦賀に在り。北莊・大正寺・小松の三城を招いて之を下す。前田利長、弟利政と、徳川氏の爲に攻めて大正寺を抜き、遂に北莊を攻めんと欲す。北莊、援を敦賀に乞ふ。吉隆乃ち自ら將として赴き援く。或ひと曰く「堀尾氏の兵、府中を守つて我が後に在り、先づ之を取らずんば、則ち進退皆難からん」と。吉隆曰く「北莊陥らば、則ち小松孤立す。府中の若きに至つては、則ち必ずしも取らざるなり。亦取るべからざるなり。即し取るべくば、兵を分つて之を守らざるべからず。分てば則ち兵寡し。寡を以て衆に對す、是れ難しと爲すのみ。且つ彼れ必ず敢て我を要せず。是れ我れ敵をして城を守らしむるなり。我れ既に北兵を卻けて以て諸城を存すれば、則ち彼れ攻めずして下らん」と。即夜五更、馳せて北莊に至る。利長の姉夫中川宗伴京師に在り。將に北陸

兵、之を美濃に逆へ撃つて之を走らす。遂に舟師を發し、將に加賀を取らんとす。公、宜しく早く之が備を爲すべし」と。利長、書を得て疑懼し、兵を引いて卻く。府中果して遂に吉隆に降る。會高次等至り、兵を合せて大正寺に復り、遂に越前を定め、守を置いて南す。

吉隆は敦賀に居つて、北莊・大正寺・小松の三城を誘つて降服せしめた。前田利長は弟利政と共に、徳川氏の爲めに大正寺を攻め落し、その足で北莊を攻めようと思つた。北莊は敦賀に援助を求めた。そこで吉隆は自身軍隊を率ゐて援けに行つた。或る人が彼に曰ふには「堀尾氏の兵が府中を守つて我が背後にゐます。先きにこつちを取らなければ進むにも退くにも困ることになります」と。吉隆が曰ふには「北莊が落城したら小松が孤立して終ふから放つておけぬ。府中など取る必要はない。亦取ることも出来まい。もし取り得るとしても兵を分けてそれを守らねばならぬ。兵を分ければ味方が少くなる。小勢で多勢に對することゝなる。だから戦がしにくくなる。それに府中の兵はきつと我が軍を待ち伏せして撃つことはせぬだらう。かうなると、我が軍は、敵に城を預けて守らせておくやうなものだ。我が軍が北陸兵を追ひはらつて諸城を無事に保つてゐるなら、府中などは攻めずとも降参して来る」と。その晩午前四時頃に馬をとばせて北莊に行つた。利長の姉の夫中川宗伴は京都に居つた。丁度北陸に行かうとしてゐた。吉隆は待ち伏せしてつかまへ、次の書面を書かせて利長を欺かせて曰ふには「内府が西上して来た。その將士は多數彼にそむき大坂の兵が美濃まで出かけて關東軍を討ち退けた。遂に大阪方は舟軍を出して加賀を占領しようとしてゐる。貴方は早くその準備を爲されるがよい」と。利長はその手紙を読み疑ひおそれて退却した。すると府中は案の定吉隆に降服した。そこへ丁度高次等もやつて来たので、兵を合せて大正寺に歸り、つひに越前を平定し、守兵を置いて南に向つた。

大正寺(加) ○小松(若) ○府中(越)

吉隆教三成招織田秀信秀信以岐阜降於是三成導諸將至大垣秀家等拔伏見來會焉德川公至下野聞變不爲驚然以諸將質在大坂頗疑之使人問其去就諸將皆奮欲擊三成乃誓曰公苟不渝太閤約善視嗣君則僕等力戰必梟治部諸將乃先發首攻岐阜下之三成與島津義弘援之不及東軍陣赤坂秀家欲夜襲之三成弗聽秀元拔阿濃津來陣南宮山秀秋來陣松尾山

訓 三成をして織田秀信を招かしむ。秀信岐阜を以て降る。是に於て、三成諸將を導いて大垣に至る。秀家等伏見を抜いて來り會す。德川公下野に至り、變を聞いて爲めに驚かず。然れども諸將の質の大坂に在るを以て頗る之を疑ひ、人をして其の去就を問はしむ。諸將皆奮つて三成を撃たんと欲す。乃ち誓つて曰く「公、苟も太閤の約を渝へず、善く嗣君を視ば、則ち僕等力戦して必ず治部を梟せん」と。諸將乃ち先づ發し、首に岐阜を攻めて之を下す。三成、島津義弘と之を援く。及ばず。東軍、赤坂に陣す。秀家夜之を襲はんと欲す。三成弗聽かず。秀元、阿濃津を拔き、來つて南宮山に陣す。秀秋來つて松尾山に陣す。

で行つた。秀家等は伏見を陥れて、そこへ集つた。德川公は下野まで行つた時、變事を聞いたが別に驚きもしなかつた。併し、諸將の質が大坂に居るので、餘程彼等の心事を疑ひ、他人をしてその去就を聞かせた。所が諸將は皆元氣よく、三成を撃たうと賛成した。そこで一同約束して曰ふは「もし公にして太閤の命を變へず、善く世嗣の君の世話をされるといふならば、我々は奮闘してきつと治部を梟首にして見せます」と。そこで諸將は先發し、最初岐阜を攻めて陥れた。三成は島津義弘と共に援けに行つた。併し間に合はなかつた。東軍は赤坂に陣取つてゐた。秀家がそれを夜襲しようとした。併し三成がきかなかつた。秀元は阿濃津を陥れ、南宮山まで來て陣取つた。秀秋は松尾山に來て陣取つた。

赤坂・南宮山・松尾山(濃美)

初秀頼與生母淀君居大坂而嫡母淺野氏稱北廳居京師庶母京極氏稱松城君居大津北廳之兄曰木下家定家定子爲秀秋及兵起北廳使人戒秀秋曰内府不利秀頼則力拒之非然則勿負之秀秋遂送款於江戸松城君之弟爲京極高次高次受封大津與德川氏嗣子並娶淀君之妹亦送款江戸及岐阜陷吉隆召北陸諸將會大垣高次後發馳歸大津舉兵應德川氏立花宗茂筑紫廣門赴大垣比至石部聞之返陣勢多會毛利秀包等來自大坂則合兵攻高次淀君遣二女使諭松城

君及高次夫妻不肯。宗茂等攻奪其郛。而城未下也。

訓 初め秀頼、生母淀君と大坂に居り、而して嫡母淺野氏、北廳と稱して京師に居り、庶母京極氏、松城君と稱して大津に居る。北廳の兄を木下家定と曰ひ、家定の子を秀秋と爲す。兵起るに及び、北廳人をして秀秋を戒めしめて曰く「内府、秀頼に不利ならば、則ち力めて之を拒げ。然るに非ずば則ち之に負く勿れ」と。秀秋、遂に歎を江戸に送る。松城君の弟を京極高次と爲す。高次、封を大津に受け、徳川氏の嗣子と並に淀君の妹を娶る。亦歎を江戸に送る。岐阜陷るに及び、吉隆、北陸の諸將を召して大垣に會せしむ。高次後れて發し、馳せて大津に歸り、兵を擧げて徳川氏に應ず。立花宗茂、筑紫廣門大垣に赴き、石部に至る比る、之を聞き、返つて勢多に陣す。會々毛利秀包等大坂より來る。則ち兵を合せて高次を攻む。淀君二女を遣はして、松城君及び高次夫妻に諭さしむ。肯んぜず。宗茂等、攻めて其郛を奪ふ。而して城未だ下らざるなり。
通釋 初め秀頼は生母の淀君と大坂に居り嫡母の淺野氏は北廳と稱して京都に居り、庶母の京極氏は松城君といつて大津にゐた。北廳の兄を木下家定と曰ひ、家定の子が秀秋である。此の度の兵亂が起つたに就て、北廳は人をやつて兄の子の秀秋に注意を與へて曰ふには「内府が秀頼に對して不利を致すやうならば、力を盡して防ぐがよい。さうでない場合には背くやうなことをなさるな」と。秀秋はその言によつて、遂に江戸に内應した。松城君の弟で京極高次である。高次は大津に領地を持ち、徳川氏の嗣子（秀忠）と同じく、共に淀君の妹を娶つてゐた。これも亦江戸に内通してゐた。岐阜が陷ると、大谷吉隆は北陸の諸將を大垣に集合させた。高次は後れて出發したが、大津に馳せ歸つて、毛利秀包等をつれて徳川氏に應じた。立花宗茂及び筑紫廣門は大垣に集つた。

垣に行かうとして、石部につく頃、高次が徳川に味方したことを聞いて勢多に戻つて陣取つた。丁度其の時毛利秀包等が大坂から來た。それで兵を合せて高次を攻めた。淀君は二人の婦人をやつて、松城君と、高次夫婦を諭させた。併し承知しなかつた。宗茂等は攻めて、城の外郭を占領した。けれども城はまだ落ちなかつた。

語釋 庶母（父の妾を） ○石部（江） ○二女（考顯主、女）

徳川公分兵爲二、自將一軍由海道、使其嗣子秀忠將一軍由山道、命彈正少弼助之。關西從風而靡、爭先送歎。山道之軍進至小室、招眞田昌幸。初昌幸赴會津、至大伏而大坂檄至。長子信幸曰「吾受關東殊遇、請東矣。西軍即敗、吾爲父弟乞命。」幸村曰「太閤舊誼不可背也。寧西而死、不東而生。」昌幸曰「欲東者東、欲西者西、而吾與西者也。」乃遣信幸之江戶、而自與幸村以兵三千歸上田。東軍三萬陣于小室。信幸從在其軍、以書招其父弟、不肯居。四日、東軍來攻上田。城帶川、昌幸壅其上流、伏兵險阻、出戰伴走。東軍爭追、陷伏而亂。乃決其壅、水大至、東軍不能繼。幸村以突騎蹙之、遂大敗其軍、使不得進者三日。其海道軍、埃之亦遲回數日。以其久不至、乃獨進陣于赤阪。秀家與三成計、亦設伏而挑戰、敗其前軍而退。

訓 徳川公兵を分ちて二と爲し、自ら一軍に將として海道由りし、其嗣子秀忠をして一軍に將として山道由りせしめ、彈正少彌に命じて之を助けしむ。關西、風に從つて靡き、先を争つて歎を送る。山道の軍進んで小室に至り、眞田昌幸を招く。初め昌幸、會津に赴き、犬伏に至つて、大坂の檄至る。長子信幸曰く「吾れ關東の殊遇を受く。請ふ東せん。西軍即し敗るれば、吾れ父弟の爲に命を乞はん」と。幸村曰く「太閤の舊誼、背くべからざるなり。寧ろ西して死すとも、東して生きじ」と。昌幸曰く「東せんと欲するものは東せよ。西せんと欲するものは西せよ。而して吾は西に與する者なり」と。乃ち信幸を遣はして江戸に之かしめ、而して自ら幸村と兵三千を以て上田に歸る。東軍三萬小室に陣す。信幸從つて其軍に在り。書を以て其父弟を招く。肯せず。居ること四日、東軍來つて上田を攻む。城、川を帶ぶ。昌幸其上流を壅ぎ、兵を險阻に伏せ、出で戦つて伴り走る。東軍争ひ追ひ、伏に陥つて亂る。乃ち其壅を決す。水大に至り東軍繼ぐ能はず。幸村、突騎を以て之に壓り、遂に大に其軍を敗り、進むを得ざらしむるもの三日。其海道の軍之を疾ち亦退同すること數日。其久しく至らざるを以て、乃ち獨り進んで赤阪に陣す。秀家、三成と計り、亦伏を設けて戦を挑み、其前軍を敗つて退く。

通 徳川公は兵を分けて二隊とし、自身その一隊を率ゐて東海道から進み、嗣子の秀忠に他の一隊を率ゐさせて中山道を進ませ、彈正少彌に命じてそれを助けさせた。關以西の諸大名は勢に壓されて一齊に關東軍に靡き、我れ勝ちに好を通じた。山道の軍は小室まで進み至り、眞田昌幸を招いた。これより前、昌幸は會津に向ふ途中、犬伏まで來ると大坂からの三成の檄文を手にした。長男の信幸が曰ふには「私は關東の特別な待遇を受け

幸村が曰ふには「太閤の古い恩義に背いてはならぬ。たとひ西に味方して死なうとも、東に附いて生き長らへ度くはない」と。昌幸が曰ふには「東に付き度い者は東に附け、西に付き度いものは西に附け。だが私は西に味方する者ぢや」と。そこで信幸を江戸に行かせ、そして自分は幸村と一緒に、三千の兵をつれて上田に歸つた。東軍三萬人が小室に陣取つてゐた。信幸は從つてその軍中にゐた。手紙をやつて父と弟とを招いた。二人は勿論承知しなかつた。上田に來て四日経つた。東軍(中山道軍)が上田を攻めて來た。城はまはりに川が流れてゐた。昌幸はその上流をふさぎ、險阻な所に伏兵をおいて、城から出て戦ひ、わざと敗けて逃げた。東軍は矢鱈に追ひかけ、伏兵に陥つて亂れた。そこでその壅を切り放つた。水はどつと流れて、東軍は軍隊を續けることが出來なくなつた。幸村は襲撃騎をつれて追ひつめ、遂に大に其の軍を破りて、三日の間といふもの、進むことの出來ぬやうにした。海道の軍は、それを待つてゐて又五六日も愚圖ついで遅くなつた。何時まで経つてもやつて來ないので、單獨に進んで赤阪に陣取つた。秀家は三成と相談し、又伏兵をおいて戦をしかけ、その前衛を打ち破つて退却した。

諸 小室(信) ○犬伏(野) ○海道軍(即ち家康)

於是、諸將大議決戰。秀家、吉隆欲固守大垣、以俟田邊、大津、兵、島津、義弘、欲夜襲赤阪。三成恃其衆皆不聽。欲出戰于關原。夜赴南宮、請秀元夾擊東軍。秀元素通欵東軍。伴諾之。三成遂赴松尾、獎厲秀秋。秀秋已與東軍約爲內應。亦伴諾之。吉隆疑秀

秋有異、以其兵陣松尾山下。吉隆有惡疾、以綃蔽面、輕服坐轎、戒其左右曰、「及敗速斬我頭。」且日、兩軍大戰關原。自辰至未、東軍數卻、而秀元、秀秋皆觀望不戰。東兵窪島某馳白德川公曰、「秀秋似背約、請更爲計。」德川公驚曰、「我悔爲小兒所賣、使窪島向松尾山發礮促之。」

是に於て、諸將大に戰を決せんと議す。秀家・吉隆、固く大垣を守つて以て田邊・大津の兵を俟たんと欲す。島津義弘、夜赤阪を襲はんと欲す。三成其の衆を待んで皆聽かず。關原に出で戰はんと欲し、夜、南宮に赴き、秀元に東軍を夾撃せんと請ふ。秀元素より欸を東軍に通ず。伴つて之を諾す。三成遂に松尾に赴き、秀秋を獎厲す。秀秋已に東軍と内應を爲さんと約す。亦伴つて之を諾す。吉隆、秀秋の異なるを疑ひ、其兵を以て松尾山の下に陣す。吉隆惡疾有り。綃を以て面を蔽ひ、輕服にて轎に坐し、其左右を戒めて曰く、「敗に及ばば、速に我が頭を斬れ」と。且日、兩軍大に關原に戰ふ。辰より未に至る。東軍數々卻く。而るに秀元・秀秋、皆觀望して戰はず。東兵窪島某馳せて德川公に白して曰く、「秀秋約に背くに似たり。請ふ更に計を爲せ」と。德川公驚いて曰く、「我れ小兒の賣る所と爲るを悔ゆ」と。窪島をして、松尾山に向ひ礮を發して之を促さしむ。

通釋 ところで諸將は大に決戰の計を相談した。秀家と吉隆は大垣を固守して、田邊・大津の兵の來るのを待たうと主張した。島津義弘は赤阪を夜襲しようとして主張した。併し三成は多勢を待んでどの説にも承知しなかつた。關原に出で戰はうといふ希望を懷き、夜、南宮に赴き、秀元に東軍を夾撃せんとする様に頼んだ。窪島某は

は前から東軍に内通してゐた。僞つて承諾した。三成はそれから松尾にも行つて秀秋を激勵した。秀秋もすでに東軍に内應の約束がしてあつた。これも亦僞つて承諾した。吉隆は秀秋が異心を抱いてゐるらしいことを疑つて、自分の軍隊を松尾山の下に陣した。吉隆は癡病だつた。うす絹を顔にかけ、甲冑をつけずに身輕にして駕籠に坐り、左右の侍臣に戒めて曰ふには「戦が破れたら直ぐ俺の首を斬れ」と。その翌朝、兩軍は關原で激戦した。午前八時から午後二時まで續いた。そして東軍は度々退却した。而るに秀元・秀秋は皆形勢を眺めて戦はなかつた。東兵の窪島某は馬をとばせて德川公に知らせて曰ふには「秀秋は約束に背く様に見えます。どうか計畫を變更さるゝやう」と。德川公は驚いて曰ふには「己は小僧に欺されて残念だ」と。窪島をして秀秋の陣のある松尾山に向つて大砲を放つて催促させた。

黒田長政亦使人責秀秋。秀秋乃以兵八千、銃手六百、下山擊吉隆。吉隆怒呼曰、「豎子背恩忘義、不可舍也。」以六百人直衝其麾下。戸田重政、平塚爲廣、助吉隆。大破秀秋。斬東軍監使奥平貞治。而脇坂、朽木、小川、赤座等皆應秀秋。與東將藤堂高虎、織田長孝等三面逼之。重政爲廣皆戰死。吉隆隊將湯淺五介退告之。吉隆曰、「吾可以死矣。勿使敵傳吾元。」遂自殺。五介剽之、使侍臣某藏之泥中、而駢冒高虎陣。死。吉隆二子、吉胤、吉之、姪賴、繼皆力戰。返見空轎、相泣欲死。從者諫之。乃走欲守敦賀。

無肯納者。遂走大阪。賴繼尋病死。

黑田長政も亦人をして秀秋を責めしむ。秀秋乃ち兵八千・銃手六百を以て、山を下つて吉隆を撃つ。吉隆怒り呼んで曰く「豎子、恩に背き義を忘る。舍す可からざるなり」と。六百人を以て直に其麾下を衝く。戸田重政・平塚爲廣、吉隆を助けて大に秀秋を破り、東軍の監使奥平貞治を斬る。而して脇坂・朽木・小川・赤座等、皆秀秋に應じ、東將藤堂高虎・織田長孝等と、三面より之に逼る。重政・爲廣皆戦死す。吉隆の隊將湯淺五介、退いて之を吉隆に告ぐ。吉隆曰く「吾れ以て死すべし。敵をして吾が元を傳へしむる勿れ」と。遂に自殺す。五介之を到し、侍臣某をして、之を泥中に藏めしめ、而して駢んで高虎の陣を冒して死す。吉隆の二子吉胤・吉之、姪賴繼皆力戦し、返つて空輦を見、相泣いて死せんと欲す。從者之を諫む。乃ち走つて敦賀を守らんと欲す。肯て納る者なし。遂に大阪に走る。賴繼尋いで病死す。

黒田長政も人をやつて秀秋を責めさせた。そこで秀秋もとうとう兵八千と鐵砲隊六百人をつれて山を下り、吉隆を撃つた。吉隆は腹を立て、怒鳴つて曰ふには「小僧め恩に背き義を忘れてゐる。許し難い奴だ」と。六百人の手勢で眞つ直に秀秋の旗下を突き攻めた。戸田重政と平塚爲廣は吉隆を助けて大に秀秋を破り、東軍の軍目附奥平貞治を斬つた。しかし脇坂・朽木・小川・赤座等が皆秀秋に味方し、東將の藤堂高虎・織田長孝らと三方から吉隆に迫つた。重政・爲廣は共に戦死した。吉隆の隊將の湯淺五介が退いてそれを吉隆に知らせた。吉隆が曰ふには「おれの死ぬべき時だ。敵におれの首を持つて行かせてはならぬぞ」と。遂に自殺をした。五介はその首を獲し、侍臣の某に泥の中に藏ませ、二人一縱に高虎の陣に飛び込んで討ち死した。吉隆の二子、吉胤、吉之、姪賴繼皆力戦し、返つて空輦の中に見え、二人一縱に高虎の陣に飛び込んで討ち死した。吉隆の二子、吉胤、吉之、その首を獲し、侍臣の某に泥の中に藏させ、二人一縱に高虎の陣に飛び込んで討ち死した。吉隆の二子、吉胤、吉之、

東軍以秀秋内應乘勢齊進。西軍遂大敗。秀家怒、欲與秀秋決闘。明石守重諫曰「君爲元帥。何自爲匹夫行也。秀家曰「吾不翅惡秀秋也。輝元不親出。秀元亦持兩端。事可知矣。吾有一死報太閤而已。守重曰「縱諸將皆叛。君宜獨據其國以輔嗣君。徒死何爲。秀家乃走。其將長河内某死之。秀秋薄義弘。義弘擊走之。曰「吾雖敗不肯卻走。以殘兵五百薄東軍。而南。東軍爲動。東將井伊直政等追躡。又擊走之。敵衆尾不止。阿多盛淳代義弘死。義弘得間踰鱒尾嶺而去。

東軍、秀秋の内應を以て、勢に乗じて齊しく進む。西軍遂に大に敗る。秀家怒り、秀秋と決闘せんと欲す。明石守重諫めて曰く「君は元帥たり。何ぞ自ら匹夫の行を爲すや」と。秀家曰く「吾れ翅に秀秋を惡むのみならずるなり。輝元親ら出でず。秀元も亦兩端を持す。事知るべし。吾れ一死太閤に報ゆる有るのみ」と。守重曰く「縱ひ諸將皆叛くも、君は宜しく獨り其國に據り以て嗣君を輔くべし。徒死何をか爲さん」と。秀家乃ち

走る。其將長河内某之に死す。秀秋、義弘に薄る。義弘、撃つて之を走らせて曰く「吾れ敗ると雖も肯て卻き走らず」と。残兵五百を以て東軍に薄つて南す。東軍爲めに動く。東將、井伊直政等追躡す。又撃つて之を走らす。敵衆尾して止まず。阿多盛淳、義弘に代つて死す。義弘、間を得て鯨尾嶺を踰えて去る。

東軍は秀秋の内應で、調子に乗つて一齊に進んだ。西軍は遂に大敗した。秀家は怒つて秀秋と勝負を決しようとした。明石守重が諫めて曰ふには「貴方は總司令官である。何でその様な詰らぬ人間の眞似をされるか」と。秀秋が曰ふには「余は不屈者と思ふのは秀秋許りではないのだ。輝元は自分で出て来ない。秀元もどつち付かすの態度である。萬事は知れてゐる。余は一死もつて大閥に報ゆるのみである」と。守重が曰ふには「たとひ諸將が残らず叛いても、貴方だけは是非領地に立てこもつて世繼の君を輔佐されねばなりません。犬死したとて致し方ありません」と。そこで秀家も逃げることにした。その將の長河内某がその際に討死した。秀秋は義弘に攻めよせた。義弘は彼を追ひ退けて曰ふには「己はたとひ敗け様とも、退却なんぞはしないぞ」と。残兵五百をつれて、東軍に肉薄して南に進んだ。東軍はその爲めに動搖した。東將井伊直政等が後をつけた。又撃ち退けた。敵の軍勢は後をつけて止めない。阿多盛淳が義弘の身代りになつて死んだ。義弘はその際に鯨尾嶺を起えて逃げ去つた。

鯨尾嶺(近)

三成走匿伊吹山、散從者曰「吾欲自大坂航赴薩摩以計再舉也。汝等宜伏匿以待。」

「聞子匿治部今田中吉政在井口、索之甚急、事露、子必逮禍矣。農夫曰「無之。」三成隔障聞之、謂農夫曰「吾終不可脫。汝盍出告。」農夫使之遁走。三成曰「吾病矣。不能寸歩。」恐累汝。汝第速自首。農夫乃之井口告吉政。吉政遣卒捕之。」

三成走つて伊吹山に隠れ、從者を散じて曰く「吾れ大坂より航し、薩摩に赴いて以て再舉を計らんと欲するなり。汝等、宜しく伏匿して以て時を待つべし」と。三成、遂に探拾して饑に充て、行くこと四日、泄を患ふ。石橋村に至り、知る所の農夫某に就く。某之を舎匿す。或者某を戒めて曰く「聞く子、治部を匿すと。今、田中吉政、井口に在つて之を索むること甚だ急なり。事露はるれば、子必ず禍に逮ばん」と。農夫曰く「之なし」と。三成障を隔て、之を聞き、農夫に謂つて曰く「吾れ終に脱るべからず。汝盍を出で、告げざる」と。農夫之をして遁れ走らしむ。三成曰く「吾れ病む。寸歩する能はず。恐らくは汝を累さん。汝、第だ速に自首せよ」と。農夫乃ち井口に之いて吉政に告ぐ。吉政、卒を遣はして之を捕ふ。

三成は逃走して伊吹山に隠れ、從者を解散して曰ふには「自分は大阪から舟に乗り、薩摩に行つて再舉を計らうと思つてゐる。お前達はどこにでも隠れて時を待つておくれよ」と。三成は遂に食物もなくなり、木の實などを拾つて饑を凌ぎ、歩き行くこと四日にして下痢に罹つた。石橋村にまで行つて、知合の農夫某の家に頼つた。某は三成をかくまつた。或る者がその農夫に戒めて曰ふには「聞けばお前は治部をかくまつてゐるといふ話だ。今田中吉政が井口にゐて、三成を非常にやかましく探してゐる。もし露顯したら、きつとお前にも禍

が降りかゝつて来るだらう」と。農夫は「そんな覚えはない」と答へた。三成は襖越しにその話を聞き、農夫に向つて曰ふには「余はどの道逃げ終せることは出来ないのだ。お前はどうして知らせに行かないのだ」と。農夫は三成を落さうとした。三成が曰ふには「余は病氣だ。一寸も歩くことは出来ぬ。ぐづぐづしてゐると、お前に累を及ぼすことになる。お前は直ぐ自首して出るやうに」と。そこで農夫は井口に行つて吉政に知らせた。吉政は兵卒をやつて捕へさせた。

〔註釋〕 石橋村・井口(近)

初、三成之握權也、吉政事之甚恭。三成既被捕、呼吉政如故。曰、「吾欲報先君知遇、與上杉・毛利等俱舉事、一敗至此、命也。願得速自殺。」吉政請之、徳川氏乃命醫治其疾。其父晴成・兄重成・子重家・姪朝成、皆在澤山、自殺。長東正家走保水口。東兵來逼、誘出之、迫使自殺。僧惠瓊亦被捕。皆囚于東營。諸將帥爭折辱三成。獨淺野左京大夫視之憫然。脫其短襖、衣之曰、「子雖我仇也、同爲豊臣氏臣、吾不忍乘其困、加以無禮。」徳川氏聞之、心敬憚。大夫義弘之南走、經伊賀・大和、行破土兵而至大坂、欲與輝元

訓 初め三成の權を握るや、吉政之に事ふること甚だ恭し。三成既に捕へられ、吉政を呼ぶこと故の如し。曰く「吾れ先君の知遇に報いんと欲し、上杉・毛利等と俱に事を擧げて一敗此に至る。命なり。願はくは速に自殺するを得ん」と。吉政之を徳川氏に請ふ。乃ち醫に命じて其の疾を治せしむ。其の父晴成・兄重成・子重家・姪朝成、皆澤山に在つて、自殺す。長東正家走つて水口を保つ。東兵來り逼り之を誘出し、追つて自殺せしむ。僧惠瓊も亦捕へらる。皆東營に囚ふ。諸將帥争つて三成を折辱す。獨り淺野左京大夫之を視て憫然たり。其の短襖を脱ぎ之に衣せて曰く「子は我が仇なりと雖も、同じく豊臣氏の臣たり。吾れ其の困に乗じて加ふるに無禮を以てするに忍びず」と。徳川氏之を聞き、心に大夫を敬憚せり。義弘の南走するや、伊賀・大和を經、行々士兵を破つて大坂に至り、輝元・長盛と俱に城守せんと欲す。二人答へず。乃ち其の質を取り、航して薩摩に歸る。

通釋 初め三成が政權を握つた時に、吉政は之に仕へるに懇懇を極めてゐた。三成は捕へられてからも、元の通りに吉政を目下の者の様に呼んだ。そして曰ふには「余は先殿(大閣)の理解ある待遇に報いようと思つて、上杉・毛利等と一緒に事を擧げて、一度に敗軍してこんな始末になつた。出来ることなら早く自殺させて貰ひ度いものだ」と。吉政がその旨を徳川氏に頼んだ。そこで醫者に命じて三成の病氣を癒させた。彼の父晴成・兄重成・子重家・姪の朝成は皆領地の澤山にゐて自殺した。長東正家は走つて水口を守つた。東兵が追ひ迫つて來ておびき出し、更に追ひつめて自殺させた。僧惠瓊も亦捕へられた。皆東軍の陣屋に囚へておいた。諸將帥は我もくくと三成を凌辱した。唯だ一人淺野左京大夫のみは彼を見つめて不憫に思つた。その陣羽織を脱いで三成に着せて曰ふには「君は私の仇だが、共に豊臣氏の家來である。私はその落ち目につけ込んで、無禮を加へるには忍

びない」と。徳川氏はそれを聞いて、心中に大夫を敬ひ憚つた。義弘が南に落ち延びた時、伊賀・大和を通り、途々士兵を破つて大阪につき、輝元・長盛と共に城を守らうとした。併し二人は返答しなかつた。そこで城中の人質を取り戻して、舟に乗つて薩摩に歸つた。

先是、田邊・大津皆下。立花宗茂引兵東至草津、聞敗還入京師、使人謂木下家定曰、「貴息之事不可言也。子猶右嗣君、則請共守大坂。」家定曰、「子先往。」乃閉門自守。宗茂遂至大坂、使謂輝元曰、「公苟城守、願扞一面。」輝元曰、「議而後答。」宗茂罵曰、「今日復何議。」乃欲歸其國。將士曰、「公所以酬豐臣氏足矣。」因勸降徳川氏。乃送降焉。亦航歸柳川。

訓讀 是より先き、田邊・大津皆下る。立花宗茂、兵を引いて東草津に至り、敗を聞き、還つて京師に入り、人をして木下家定に謂はしめて曰く「貴息の事言ふ可からざるなり。子、猶ほ嗣君を右に守れば、則ち請ふ共に大坂を守らん」と。家定曰く「子先づ往け」と。乃ち門を閉ぢて自ら守る。宗茂遂に大坂に至り、輝元に謂はしめて曰く「公苟も城守せば、願はくは一面を扞がん」と。輝元曰く「議して後答へん」と。宗茂罵つて曰く「今日復何をか議せん」と。乃ち其國に歸らんと欲す。將士曰く「公の豊臣氏に酬ゆる所以は足れり」と。因つて徳川氏に降るを勧む。乃ち降を許し、舟に乘つて薩摩に歸る。

通釋 これ以前に田邊も大津も皆降参した。立花宗茂は兵を率ゐて東の方、草津まで行つたが、西軍の敗戦を聞いて京都に戻り、人をやつて木下家定に曰はせるには「御子息(秀秋)のことは何とも話にならぬ。けれども貴公がやはり秀頼公をお助けになるならば、一つ御一緒に大阪を守りませう」と。家定が曰ふには「貴公先きに行かれよ」と。そこで門を閉めて自分の家を守つてゐた。宗茂は遂に大阪まで行つて、輝元に使をやつて曰ふには「貴殿がもしも城を守られるならば、拙者にどうか一方を防がせて貰ひ度い」と。輝元が曰ふのに「相談してからお答へしよう」と。宗茂は罵つて曰ふには「今になつて何の相談がある」と。そこで自分の本國に歸らうと思つた。その將士が曰ふには「殿が豊臣氏に對する恩報は最早十分で御座います」と。因つて徳川氏に降参することをすゝめた。そこで降参の使ひを出して舟に乗つて柳川に歸つた。

語釋 貴息之事(家定の子の秀秋が徳川に内應したこと) ○柳川(後筑)

秀家經近江爲士兵所困、獨從二人竄土窟中。聞捕者至、欲自殺。從者止之、請其寶刀、出告東軍。以秀家既死、獻刀爲證。秀家至大坂、聞其國已覆沒、竟走薩摩。其妻前田氏利長、妹也。大歸加賀。後數年、利長問得其實、告之江戸。乃責前告者、告者請死。釋之。島津忠恒請宥秀家死。流八丈島。前田利政據能登、九鬼嘉隆據志摩、並抗東軍。利政除籍、嘉隆自殺。

訓 秀家近江を經、土兵の困しむる所と爲り、獨り二人を従へて土窟中に竄る。捕者至ると聞き自殺せんと欲す。從者之を止め、其の寶刀を請ひ、出で、東軍に告ぐるに秀家既に死するを以てし、刀を獻じて證と爲す。秀家大坂に至り、其の國已に覆没すと聞き、竟に薩摩に走る。其の妻前田氏は利長の妹なり。加賀に大歸す。後數年、利長問うて其の實を得、之を江戸に告ぐ。乃ち前の告ぐる者を責む。告ぐる者死を請ふ。之を釋す。島津忠恒、秀家の死を宥さんと請ふ。八丈島に流す。前田利政能登に據り、九鬼嘉隆志摩に據り、竝に東軍に抗す。利政は籍を除かれ、嘉隆は自殺す。

通釋 秀家は近江を通り、大兵に攻め苦しめられ、二人の家來だけつれて岩屋の中に隠れてゐた。捕手が來たのを聞いて自殺しようとした。從者はそれを押し止め、その寶刀を貰ひ受け、岩屋を出て東軍の者に、秀家は最早死にましたと申し出で、その寶刀を差出して證據とした。秀家は大阪に逃れ歸り、自分の領國備前が最早東軍の手に渡つたと聞いて、遂に薩摩に走つた。その妻の前田氏は利長の妹である。不縁になつて加賀へ戻つてゐた。數年経つてから、利長が問ひ訊して事實(秀家は生きて薩摩に逃げたといふ)が分つたので、早速江戸に知らせた。江戸方では、前に秀家の死を知らせた從者を責めた。その者は死罪を求めた。併し許してやつた。島津忠恒は秀家の死を赦免するやうに願ひ出た。その故に八丈島に流した。前田利政は能登に立てこもり、九鬼嘉隆は志摩に據り、皆東軍に抵抗した。結局利政は諸侯の名籍を削られ、嘉隆は自殺した。

是役也、小西行長首應三成。三成以其更事倚賴之。行長爲人自殖而薄士。士不樂爲之用也。及敗陣、亂不可禁。乃走至備前。備前林藏主者曰、吾、攝津守也。吾、德川氏之臣也。聞上國敗、皆降德川氏。

僧曰、公盍自刃。行長曰、吾奉耶蘇教。不可自刃。僧乃執而告之。是歲冬、與三成・惠瓊皆斬于京師。加藤清正初、知三成必舉事、止德川氏東行。不聽。乃歸其國。逢大坂、檄至曰、是侯豎託幼主以濟其私也。乃發兵攻小西氏城邑。盡并之。會黑田孝高攻略近國。因合兵降筑紫廣門等。遂臨薩摩。島津義久已降德川氏。森勝信、其弟勝永、出小倉走匿土佐。上杉景勝與伊達政宗最上義光戰而勝之。佐竹義宣觀望不出。及聞上國敗、皆降德川氏。

訓 是の役や、小西行長、首として三成に應ず。三成、其事に更るを以て之に倚賴す。行長人と爲り自殖して土に薄くす。士、之が用を爲すを樂しません。敗に及び陣亂れて禁すべからず。乃ち走つて備前に至る。備前林藏主なる者に逢うて曰く「吾は攝津守なり。吾れ女に徳せん」と。僧曰く「公盍ぞ自刃せざる」と。行長曰く「吾れ耶蘇教を奉ず。自刃すべからず」と。僧乃ち執へて之を告ぐ。是の歳冬、三成・惠瓊と皆京師に斬らる。加藤清正初め三成必ず事を擧ぐるを知り、徳川氏の東行を止む。聽かず。乃ち其國に歸る。大坂の檄至りに逢つて曰く「是れ侯豎、幼主に託して以て其私を濟すなり」と。乃ち兵を發し、小西氏の城邑を攻めて盡く之を并す。會て黑田孝高、近國を攻略す。因つて兵を合せて筑紫廣門等を降し、遂に薩摩に臨む。島津義久已に徳川氏に降る。森勝信、其弟勝永、小倉を出で、走つて土佐に匿る。上杉景勝は伊達政宗・最上義光と戦つて之に勝つ。佐竹